

政治詩人ハイネ [新版] (V)・完

ヴァルター・グラープ 著

松 下 亮 訳

熱望された「救世主」フェルディナント・ラサールとのハイネの出会い

一八四四年に詩人は、『冬のメールヒエン』の印刷を監督するために、最後のハンブルク行きをおこなった。かれがル・アーブルから船旅したのは、プロイセン政府が「フォアヴェルツ！」紙のすべての寄稿者に逮捕令状を出していたので、プロイセンの土地を踏みたくなかったからである。そのハンザ同盟都市でかれは親類たちを訪問し、叔父ザーロモンと話し合いをした。その金持の銀行家は、学生時代からかれを経済的に支援して、一八四四年以後四千八百フラン（当時の相場で約二千五百マルク）の年金を提供していた。この金額によってハイネはかれの支出のおよそ三分の一を賄うことができた。ハイネがパリへ還った二カ月後、

一八四四年十二月に銀行家は死去し、三千万一別の申立てでは四千万以上一フランの評価額の財産を遺した。遺言状は八千マルク（およそ一万五千フラン）の一時払いを甥のために定めていた（これは相続財産のおよそ〇・〇五パーセントに相当した）。年金の継続については述べられていなかった。ハイネが、かれの計画中の回想録で自分ら一族の秘密をベラベラしゃべらないうようにと、年金を支払わないことによって金銭上の脅しをかけようとしていたとの嫌疑をその家族にかけたのは、根拠のないことではない。「家族の検閲」にかけることによってかれの文筆家としての自由を制限しようとした従弟カールとの相続争いは、かれを絶望させ、さなきだに疲れ切ったかれの健康状態を危険にした。天才と金囊との間のほとんど二年にわたるたたかいは、結局おそまつな妥協によって終わったが、ハイネの貫徹する意志を阻喪させた。一八四五年はかれの文学的生産のどん底だった。

こうした個人的心理的な状況によって、かれが一八四五年十一月末に激しい気性の若者の思いがけない訪問を受けたとき、詩人が感情的に強く揺り動かされた理由は説明される。かれにはその若者が、自己の政治的哲学的な諸理想の輝かしい体現のように思われた。それはプレスラウ出身の二十代の青年フェルディナント・ラサールだった。

早熟で、天分あり、自負心の強いその青年は、すでにライプチヒの学生時代にハイネの『歌の本』を耽読していて、好んでその

詩句を朗誦していたが、十六歳のときすでに詩人と無縁な間柄でなかつた。ハイネが銀行家ザーロモン・シュトラウス・ベルネのかつてのガールフレンド ジャネット・ヴォールの夫とたたかつて決着をつけた決闘のことを聞いたとき、ラサールは⁽²⁾一八四一年九月二十五日の「プレスラウ新聞」紙上で詩人の味方をした自分の論説を、かれに送った。それをハイネは至極適切だとみなした。『冬のメールヒエン』からも深い感銘を受けたラサールは、ハイネと知り合いになりたくてたまらないでいた。かれは一八四四年の夏学期以来ベルリン大学で哲学を学び、ヘーゲルの確信的な信奉者へと生長していた。その大哲学者への共通する崇拜が、老いゆく病弱の詩人と活気に満ちた若い大学生とを結びつける、きずなとなつた。

活動性と権勢欲に満ちたその将来の労働者の指導者は自らの情熱を世界の情況から掬んだ。かれはヘーゲルの哲学のなかから、絶対的個性の理念が発展の動輪であり、フランス大革命が、この原理を国家において貫徹するきっかけを与えた、と推断した。かれが一九四⁽³⁾五年九月、パリへ旅行する直前に書いた『世界への戦争宣言』のなかで、意志強固な自我の自己実現を求めたが、その自我にとって自己の願望を実現させることは義務と喜びを意味した。資本主義の世界では無産者が他人の権力に引き渡されて、粉々に破壊された個々人は互いに破壊させられ、その世界は組織化された強盗の状態に他ならない。生命のない物質である資本と

いう新しい神の前に跪くことなく、それとたたかうことを、かれは誓つた。かれは際限なくおのれを買いかぶつて自分自身を超人と宣言した、「私がたたかう決心を固めたことで、大地は根底から震動し、精神の世界の構造が深部で鳴りどよめく。」かれは、「神の理念の担い手にして使徒」であると主張した。その神の理念はかれを理念なき周囲の世界にたいしてすべての抑制から解放するものだから、かれには、この理念を実現するために他の人々を手段として使用する、道徳的な義務がある、と。

ラサールのエリート的社會貴族主義、かれの行動的な権勢欲の徹底性、「神なく実体なき世界のソドムとゴモラ」にたいするかれのたたかひの宣言は、ものすごく強い感銘をハイネに与えた。かれは、亡命以来知り合つた他のだれからよりも強い印象を、その熱烈な激情家の高い知性から受けたようだった。ついにここに、そのあらゆる脈搏が火のように打つ男がいた。ついにここに、奴隸にされた人類をその苦勞から解放することが任とされた世俗の救世主がいた。「この十九歳の青年を私は今世紀の救世主とみなします」と、熱狂に圧倒された詩人はラサールの父に伝えた。かれには、ドイツへの旅の途中で探し求めたが得られなかつた救済者に出会つたように思われた。「かれは美しく、とてもしなやかでありながら途方もなくたくましい男である。青春そのもののように深刺としている」——こうハイネは六年前にかれの『ベルネ追想録』に救世主のことを書き記していた。しかしその両手は黄金

の鎖でしばられているという、なぜならそうでなければ救世主は「とつぜん地上に急降下して、時機まだ早尚で都合もよくないうちに、救済の仕事に着手する」であろうから。ラサールの出現によって詩人は「真の救済のとき」が来たと思った。

ハイネはかれの新しい友人を、「自由な思想と自由な欲求をもち、ごまかしと罪から完全に免れた」生長しつつある新世代の傑出した代表者だとみなして、その友に、かれが『冬のメールヒエン』で約束していたように、「すべてを告げ」たいと望んだ。ドイツにおける社会的・政治的革命的必然性についての、また未来の国家の社会的等級についての二人の観念には沢山の類似性があった。民主主義は二人のどちらにとっても多数者の支配あるいは権力の人民への引渡しを意味しなかった。兩人ともヘーゲルの学徒として理性の原理をとってはなさなかったが、その理性の確乎不動の規範は政治の領域でも客観的な学問によって規定されているのである。ラサールの手本とするものはフランスのジャコバン派国民公会であった、その理由は国民公会の立法は国民の利益と一致していたからだし、その公会が革命を勝利へ導いたのだから。かれのジャコバン主義はボナパルト主義に合流した。ボナパルト主義を「洞察の独裁」^{ディクタト}とみなしたかれは、その主義を打ち樹てられるべき国家のモデルともみた。これらすべての理念は、ハイネによって要求され熱望された、有為で才能ある者たちの功績階層と一致するものだった。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

その若い社会主義者との交際は、相競争いでの失望と失敗そして悪化してゆく病気がかれを投げこんでいた、沈思・諦念的な気分から、詩人を引っぱり出した。かれはラサールとの出会いのうちに自己の遺産問題の上首尾の結果を信じて、年金支払いの継続を実現させるため、ラサールに、ハンブルクの金持の親類との争いを「富と強欲の神の支配」にたいする理念上の原理闘争として決着をつける全権を与えた。ラサールはハイネにむかつて、このたたかいを、有産階級にたいする、いな既存の経済状態一般にたいする被搾取者にして従属者たちの政治的、社会的行動へと拡大することを、約束した。一族との私的争いがこうして、「ずうずうしい利己的な小商人族」と化したブルジョアジイにたいする強制された原理的闘争になった。ラサールはこれを、有名詩人の毀損された権利意識の名において公人たちに自己の理念に賛成する義務を負わせ、世論に影響を及ぼす、絶好の機会とみた。このようにかれは社会のトップクラスの人々と、自らの政治的学問的な経歴の上で自分に役立つかもしれない関係をむすびたがった。

ラサールは、プロイセンに足を踏み入れるようなことがあれば拘禁するとハイネを脅かしていた、プロイセン当局の命令を撤回させるため、全力をつくしてみると、約束した。詩人は、高名な外科医ヨハン・フリードリヒ・ディーフェンバハに自分の病気の診察をもらうため、ベルリンへ行きたかったのだから。その上ラサールは、けちなハンブルクの成金どもにジャーナリズムで

のキャンペーンを巻き起こしてかれらの恐喝の試みをすつばぬくことよつて、ザーロモン・ハイネが口頭でその甥に約束していた、年金全額の継続支払を強制することを、約束した。ハイネはラサールに、かれの友人にして戦友、かれがベルリン大学在学時代以来親しくして、『アッタ・トロル』を献呈していた、カール・アウグスト・ハルンハーゲン・フォン・エンゼに宛てた紹介状を持たせてやつた。

この手紙—ラサールは十七年後の労働者扇動の絶頂期にそれを公表することになるであろう—は、いかにハイネが新しい友人の意志の強固さに夢中になっていたかを示しており、またハイネがラサールを自己の個人的遺産争いの代理人ならびに政治的相続人として、また共和主義的イデオロギーの克服者として、革命活動の新しい歴史的段階の体現者としてみていたことを、証明している。かれの政治的な願望と憧憬のこの宣言は、次の世代の才能あり性格の強固な上に学識豊かで行動的な代表者たちへの、よく似たバトンタッチを思わせた、つまりハイネ自身がかれの先輩、世界市民的ジャコバン主義者フォルスターおよびハイベアから委ねられ受け継いだのと全く同じように。

「(…)この手紙をあなたに持参する私の友人、ラサール氏は卓越した知的天分を有する青年です。徹底的な学識、該博な知識、私がかつて出会つたなかで最大の明敏さを備えたかれには、表現の最も豊かな才能と、驚くべき知的エネルギーおよび敏腕な行動

とが結びついています。そして私にたいするかれの共感が消えないとき、私はかれに最も活動的な助勢を期待します。とにかく知識と能力とのこのような結合は私にとつて喜ばしい現象でした。そしてあなたは人を認めることの幅広さにおいて、きつとその結合を至極公正に解されるでしょう。ラサール氏とはとにかく新時代の際立つた息子で、われわれがそれを用いて多かれ少なかれ偽善的に無駄口を叩いてわれわれの時代をぶらぶらと通り抜けたような、あの断念と遠慮については何も知りたがりません。—この新世代は楽しむこと、はつきりした形で効果が見えてくることを望んでいます。われわれ古い者らは目に見えないものの前にへりくだつて身をかがめ、人影にキスしたり青い花の薫りをすばやく掴もうとし、諦めたり泣いたり喚いたりしましたが、あのように誇り高く闘つて死ぬことへと向かつてゆく、あれら不屈の剣士たちよりも恐らく幸せだったでしょう。千年にわたるロマン主義の国は終りを告げ、私自身はその最後の退位したお伽噺の王でした。もしも私が王冠を頭から取つて投げ棄て、ガウンを脱がなかったら、かれはまさしく私の首を斬つたことでしょう。(…)」

ラサールの出発直後の一八四六年一月初めに出来たとおもわれる、三節の詩のなかで、まだ高揚した精神状態にいたハイネは、「不屈の剣士」を鼓舞して、躊躇なく戦場の混乱に身を投ぜしめた。かれはかれの英雄たちを古代のナポレオン、つまり全世界を獲物とみたアレキサンダー大王と比較して、政治的勝利をエロチック

な関係とごちやまぜにした。ヒポメーネスによって投げやられた黄金の林檎の方へ身をかめたために競争に負けたアトランテ〔競争で勝っては求婚者を殺害していた〕を暗示したギリシア神話は、ラサールに、物質的な利益によって墮落させられず、理念上の原理闘争をあらゆる個人的な利益よりも優先させるべきだと、警告するものである。このことは、じじつハイネはラサールをそのエネルギーと生命力のために賛嘆してはいたものの、他の見通しが呈示されれば、友情をも顧みないというかれの傾向を見抜いていたことをも、証明している。

その詩の最初の異稿は民主主義者ハインリヒ・ピユットマンによって一八四七年に発行された「アルバム オリギナルポエジイ」に『学理のために』Zur Doktrin という題名で発表された。始めの二節は次の内容である。

おびき寄せられるな、惑わされるな

走路上の黄金の林檎に！

剣戟鳴り響き弓箭ヒヨウと唸る

だが英雄は臆さない

断行すなわち成功、

アレキサンダーは世界をぶんどる！

ぐずぐず考え込むな！ 女王たちは

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

すでに天幕内にひざまずいて勝者を待つ。

第三節を詩人は幾度も改作した。ここでかれはもはやかれの若い英雄「ラサール・アレキサンダー」に呼びかけることはせず、その英雄と一体化した。そのさいかれは古代ペルシア国王ダariusの政治的遺産と、死んだ叔父ザーロモンによって約束された年金をめぐるかれ個人の相続争いの有利な結着への希望とを、奇妙な工合に組み合わせた。かれ自身なお、病弱にもかかわらず、「笑う相続人」でありたがり、同時に滅びゆく旧秩序にたいする勝利を楽しみ味わいつくしたがった。

われわれは叩き毀す、笑う相続人のように

古代ダariusの国と玉座を。

敢闘、努力！ 銘酹の死

バビロンでのすばらしい勝利の死。

ハイネは、この詩節の別の、同様に不適切とされた異稿において「笑う」という付加語を削除することによって、期待された物質的遺産への関係をいくらか消去して、ダariusの死、つまり政治的旧秩序の没落のみを確認し、相続人として権力の座に即くことへの要求を根拠づけた。そうすることでかれは歴史的事実に近づいたが、それによるとアレキサンダー大王はじじつダariusの

王冠によって王位に即きはしたが、王の死については無実だったのである。

獲得しようとする努力を長びかせるな！ われわれは相続

人だ、

ダリウスは死んだ、王冠をよこせ

すると死が生じる、それから

われわれはバビロンで甘美な勝利の死を獲得する。

ここでは自らの死の予感が以前よりも著しく明白になっていた。ピユットマンによって印刷された草稿ではそれら死の予感はおもとの確に強調されていたし、同時に、かれの感情の赴くままにさせる、酒呑みの享樂と結びつけられていた。酒呑みが飲み干したあとで壁に叩きつける盃によって、相続人の勝利と即位とは旧体制の粉砕が先行したあとで初めて可能なことが、暗示される。そのさいダリウスの人物像は無視されてしまっている。

われわれは相続人だ、われわれは打ち砕く

われわれが飲み干した盃を、

そしてわれわれは死ななければならぬ、

最後にバビロンの美しい勝利の死を獲得する。

かれがバビロンという名を使って、アレキサンダー大王が酔っぱらって死んだ都市のことを言ったのか、あるいは、かれ自身そこで敵たちへのかれの政治的勝利をすら味わいつくして、叔父の物質的遺産をめぐる争いで成功を待ち受けようとしていた、頹廢の都市パリのことを言ったのか、を、詩人は未解決のままにしておいた。この解釈は、かれが健康だった日々¹⁰に自分の感情についてパリの街頭で述べた所感によって裏付けられる。「昼間¹⁰でこそ私はでっぷり太って笑いながら、きらめき輝くバビロンの路地をぶらついてゆくが、私の言うことを信じてくれ！ 夕闇が降りてくるや、憂鬱な豎琴が心のなかで鳴り出し、それから夜中には、悲痛のあらゆるティンパニーとシンバル、世界苦のトルコ軍樂隊の音楽が心中嚙喰と鳴りひびき、そして仮装した人々の行列が恐ろしい喚き声をあげながら立ち現われる……」

実際に、ハイネが普通は用いなかった、その詩の行内韻^同内^{二つ以上}の語^がは軍隊音楽を示唆している。そしてそのこと互いに韻をふむもの^はによって、古い社会秩序に新しい社会秩序が勝利するためには暴力と破壊が不可避だったことが、強調された。一八五二年に『ロマンツェーロ』のなかに最終的に発表された、その詩の決定稿は『若い人たちに』An die Jungenと題され、以前のすべての異稿よりも強烈に性愛的かつ政治的な勝利を死の予感と混ぜ合わせた。このことはおそらく詩人の悪化してゆく身体の状態に起因したのだろう。非常に的確だったのは、相続人が権力の座に即くことの

甘美さは敗者の死の裏面にすぎない。つまり新しい世代の開花と活力は旧世代が衰亡したときだけ可能だった、という言明である。

⁽¹²⁾奮闘努力しよう！ 相続人として

老ダリウスの寝台と玉座に登ろう。

あア甘美な滅亡！ あア華々しき死！

バビロンでの酔っぱらった凱旋の死よ！

自分自身が芸術および精神の領域において、その政治的没頭を熟知していた、あの旧秩序の一部を自らの胎内に蔵していることを、詩人は痛く自覚していた。『冬のメールヒエン』でかれが古い「迷信の骸骨」を打ち砕けと命じたとき、自らの胸のなかから血の流れが噴出したし、かれの『アッタ・トロル』は、友人ファルンハーゲン・フォン・エンゼに打明けたように、「没落⁽¹⁴⁾してゆく時代の白鳥の歌」だった。「あなたも同じく旧時代を埋葬するのを私に手伝って下さった―それどころか、私たちは旧時代を暴露して怖がらせました。しかし私たちは、鴨の卵をかえして、幼いひと腹の雛が水に飛びこんで楽しんで泳いでいるのを驚いて見ている哀れな鶏のようなものです！」

ハイネもラサールという鴨の卵をかえたのだということが、間もなく明らかになるであろう。最初ラサールはじじつ、かれが「ハンブルクの相統争い」に関して詩人に向かってした約束を

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

行しようとしてみはした。かれはピュックラウームスカウ侯爵をそのかしてカール・ハイネに宛て手紙を書かせ、詩人への年金の支払い継続を要求させた。そしてアレクサンダー・フォン・フンボルトその他に宛て、宮廷に介入して、拘留命令を廃止させるように、手紙を書いた。けれども所轄大臣v.ボーデシユヴィングは拒否の回答を与えた。

ハイネはなおもおよそ二カ月の間ラサールの尽力の成功を希っていた。かれは一八四六年二月十日ラサールに書き送った。「また私はだれにあつてもそんなに多くの情熱と明晰な知力が行動のなかで一つになつてゐるのを見たことはありません。あなたには、大胆である権利が充分にあります―私たち他の者はこの神々しい権利、このすばらしい特権を不法に奪い取つてゐるにすぎません。あなたに比べると私なぞ取るに足りぬ蠅でしかありません。」

しかしその直後にラサールは伯爵夫人ゾフィー・ヘルツフェルトの離婚訴訟に関係した。近年かれはかの女にすっかり夢中だった。かれが一八四六年十月に、ハイネをその策略に引き入れようと試み、詩人がこうしたジャーナリズムでの親切な助力を断つたとき、友情は破綻した。ハイネは直後に、ラサールの父に書き送つたように、悲痛の念をもつて、「いかに至極幸福な天与の才がデモーニッシュな自己破壊を加えられたかを」見るように思つた。そして弟グスターフ宛の手紙のなかで、自分はラサールと絶交した、その訳はこの人物が「殺人、偽造、窃盗」もやりかねない「極⁽¹⁷⁾

めて恐るべき悪漢の一人となった」のだから、と主張した。一八四八念の革命中の大部分の期間ラサールは一部ではヘルツフェルト離婚事件に捲き込まれたため、一部では過激なアジテーションのために獄中にあつた。それ故かれが果たそうと努力した政治的役割を演じることができなかった。ラサールが六〇年代の初めに労働者の指導者に生長して、社会的無権利者層からかれらの救世主とみられたとき、もはやハイネは自己の予言的的の中を生きて知ることとはなかつた。

注
引用文献略語

B	ブリークレープ編「ハインリヒ・ハイネ全集」第一―六巻 I・II。
DHA	デッセルドルフ版「ハインリヒ・ハイネ全集」十五巻―二十冊。
HSA	百年記念版「ハインリヒ・ハイネ全集」一九七〇―一九五五年刊行分。
H	ヒルト編「ハイネ書簡集」六巻。
W	ヴェルナー編「ハイネとの出会い」一九七三年。

(1) M. Werner: *Genius und Geldsack* 一二五ページおよびB五巻七五一ページ。ヴェルナーは、一八四四年の三〇万フランは一九七五年の二億一千六百万の貨幣価値に相当したと、算定した。参照、かれの換算表、一五六ページ。叔父からのそして後に従弟カールから

- の詩人への援助については、二二〇―二二六ページ。
- (2) HSA 二五巻二七八ページ。
 - (3) 続く引用とともに、Oncken 五〇および次ページ。
 - (4) Lotnar Bucher の報告による。F. Lassalle: *Nachgelassene Briefe* 六巻四一〇ページ。ハイネとラサールとの関係については参照、S. Nataman の研究ならびに S. Nataman, Lassalle 中のハイネの「泥沼化した」ハンブルクの相続戦についての章六〇―八一ページ。
 - (5) B 四巻二二〇ページ。続く引用も同所。
 - (6) ハイネのラサール宛手紙、一八四〇年一月十日付、H三巻四八ページ。
 - (7) 同右、一八四六年一月三日付、H三巻三五および次ページ、H五巻九九および次ページ。
 - (8) B 六一巻九九ページ。
 - (9) ハイネによって排除された、その詩『若い人々へ』の各種の異文およびテキストの分析は E. und M. Werner 著の次の書にある: *Zur Praxis der Handschrifteninterpretation*.
 - (10) B 四巻一二五ページ。
 - (11) 参照、S. Praver の分析: Heine, the tragic satirist 一五八ページ。
 - (12) B 六一巻一〇〇ページ。
 - (13) B 四巻五九五ページ。
 - (14) 続く引用とも、ファルンハーゲン・フォン・エンゼ宛手紙、一八四六年二月一〇日付、H五巻一〇〇ページ。
 - (15) ラサール宛手紙、一八四六卷二月十日、H三巻四七ページ。
 - (16) Heymann Lassalle 宛手紙、一八五〇年四月十六日付、H三巻二〇八ページ。
 - (17) その前の引用とも、グスタフ・ハイネ宛手紙、一八五一年一月二一日付、H三巻二六〇ページ。

ハイネと一八四八年の革命

期待された現世の救世主との出会いから詩人がこうむった、魂の深い幻滅はかれの体力を衰弱させた。おまけに、詩人とハンブルクの従弟との間に結ばれた取り決めは、叔父ザーロモンによって約束された年金の支払いを保証しはしたものの、事実上は『回想録』^{メモワール}に関する「一族の検閲」への屈服と同時に、かれの今後の制作への干渉を意味するものだった。かれの富裕な「親族たち」との「和解」^①にもかかわらず、あるいはその「和解」のために、ハイネは「悲しい気持の断末魔」状態で、かれの遺言状を書き始めた。

詩人が初めは大きな期待を寄せていた七月王政も、終焉を迎えていた。長らくくすぶり続けている農業および商業の危機の結果積み重なっていた社会的な火種が、一八四八年冬にわずかなきっかけから爆発した。学生、労働者、市民国民軍が「市民王」ルイ・フィリップにたいして蜂起し、退位を強請したのである。

一八四八年二月初旬から医療施設フォルトゥリーエで診療を受けていたハイネは、かれの医師と一緒に夕食に行く途中、その二月二十三日、乗っていた馬車が革命家たちによって止められ、下車しなければならなかった。「私は芝居見物のためによい席にいた。いわば特別仕切り席にいた。たまたま私がいた街路は、両側からバリケードによって閉鎖されていたのだから。やっこのこと

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

でわが家へ連れ帰ってもらえた」、こうかれは「アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング」紙への論説で報告した。蜂起者たちの勇氣にかれの心は驚嘆の念で一杯になった。「フランスの労働者たちがその闘いのなかで死を恐れなかったのはどうしてかとわれわれが不審がるのは、まったくそれが決して宗教心と一致するものではないからであり、またこの地上で祖国のために死んだ報酬が彼岸で与えられるという美しい信仰にも支えられているためでもないという理由からに他ならない。」

かれの窓の下での太鼓の連打と射撃の音は耳を聳せんばかりだった。ひっきりなしに奏でられるマルセイエーズは「私の脳を破裂させんばかりで、そしてあア！ 私がそこに数年来閉じこめてきた、国家にとつて極めて危険な思想の無頼漢が、またも脱獄してきたのだ。」その思想の無頼漢は予言した、「この魔神的な邪悪の響き」はまもなくライン河を飛び越えるだろう、そしてドイツ人も「同様にその魅惑的な力を知る」だろう、と。

ハイネは二月革命の出来事と共和国の建国をとっても複雑な感情をもって眺めた。共和国の建国は一方ではのし上りつつある市民階級をその経済上そしてイデオロギー上の諸前提のなかで強めていたが、他方プロレタリアートが初めて独立の要求をひっさげて闘技場に登場してきたのだ。バリケード戦の戦士たちは民主主義的共和国の建国を求めて闘ったのだし、その共和国は無産階級の人々に人間らしい生活を保証すべきものだった。かれらは参政権

と国家から保証される労働権とを要求した。財産を鼻にかけたブルジョアにとっては労働者の社会的平等の要求は身の毛のよだつ恐怖だった。革命のなかであらわになつてゆく、ブルジョアジーとプロレタリアートとの間の和解がたい利害の対立は、理想的で葛藤のないブルジョアによる支配をめざすサン・シモン主義者の教義の展望が到達不可能なユートピアだったことを、証明した。ハイネは、知識階級と国家権力を調和させることに託したかれの希望が挫折したことを、認識せざるをえなかつた。社会的な対極化は広範な階層に激しい困窮と物質的な不安定をひきおこし、無数の人々の生存を破壊して、中小出版書店と銀行に著作上の権利といくばくかの株式資本を持っていたハイネをもおびやかした。「⁽³⁾今この地をどのような悲惨が支配しているか、あなたにはわかりになりません。全世界が自由になり、破産します」と、かれは母に訴えた。

かれは共和国の建国を時期尚早とみて、「⁽⁴⁾その勝利の時期は偶然によつてとても早められた」と言った。新しい臨時政府の「⁽⁵⁾月桂冠を頂いた首領として」、外相に任命された詩人「ド・ラマルチーヌ氏」が登場したとき、その政府をかれは当然に、「同質性を欠く」と非難して、それがフランスの困難な社会的政治的問題を乗りきることができようとは思わなかつた。「⁽⁶⁾ルイ・フィリップはこの国民の持ちうる唯一の王だった」と、かれは言った、「そしてフランス人はそのかれにすら、十八年間の試用ののちに、辛

抱できなかつた。フランス人は成長して王党主義の政治的なお仕着せ、金モールつきの緋色の信仰篤いロマン主義から抜け出した。それはもはやかれらの体には合わなくなった。いたるところで縫い目がほころびた。そこでかれらは共和主義の上つ張りに着替えた。その上つ張りはむろんだぶだぶすぎている。けれども前よりも自由に動ける。かれらは現在共和国を持っている。そしてかれらがそれを愛しているか、愛していないかは、大した問題じゃない。かれらは現在それをもっているのだ。そして一旦そのようなものを持つと、それは、鼠径ヘルニアとか、妻とか、祖国ドイツとか、そのほかの慢性病を持つているのと、同じことなのだ。」かれの脊髄病は政治的興奮の結果悪化した。自分の病気はたんなる身体的なものではなく、社会的にも条件づけられていると、かれは確信(7)して、病気の進行と政治的危機の進展との間に類似性を認めた。「その大活劇は肉体的にも道徳的にも私をひどく衰弱させました」と、母にかれは報告した。

かれはすでにその「⁽⁸⁾パリの二月のお伽噺」つまり市民王の失脚によるフランスの諸問題の解決を信じ込まされようとはしなかつたのだが、「⁽⁹⁾ドナウ河とシユプレー河の静かな河岸に起つたとかいう、誇大妄想狂らによつて考え出された、ありうべからざる魔法の革命」こそ、アラビアンナイトのなかの途方もない物語のようにみなした。じじつかれば、ドイツの哲学によつて「⁽⁹⁾龍の歯が蒔かれ、それらの歯から今日武装した男たちが成長して出て

きてかられの武器による喧噪で世界を満たしはするが、遺憾ながら互いに首を絞め合う」ことだろうと、そのさまを傍観していたのではあるが、かれの予言が現実的中したとき、びっくりしてかれは言った、民衆の蜂起は誤った時点で起きた、と。かれがみずからに要求した、文学的・世論のスポークスマンの職務を代表するためには、体力のないのを残念がった。三月二十二日、パリ滞在中の女流作家ファニー・レーヴァルトがかれを訪問したとき、ベルリンのバリケード戦と民衆蜂起の結果とに關してちようど届いたばかりのニュースについて、かれはこう言った。「私は、それがもう少し早くか、あるいはもう少し遅く起きればと、希っていました。なぜならそれをこんな私の状態で迎えなければならぬ」というのは、ピストル自殺ものだからです。けれども充分にしばしば私は、かれらをその眠りから目覚めさせるために、鐘の紐を引いて鳴らしました。また充分にしばしば、ドイツ国内がデンマーク国と同様に怠惰なことを思い出させました―そしてあのハムレットをかれらは八年このかた、王位に即けていたのだ！」

五月に両脚の完全な麻痺が起こり、「かつてスペインの宗教裁判が考え出すことができたよりも」⁽¹¹⁾「もつと多くの苦痛」を耐え忍ばせた、かれの体の衰えにもかかわらず、かれは活発な関心をもってドイツにおける政治的發展を見守った。おびただしい詩人としてのまた個人的な証拠が、ドイツの騒乱の年の間に登場したさまざまなグループや人物についてのハイネの見解を明らかにし

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

ている。

一八四八年三月中旬と五月初旬の間に書かれたに違いないネットの断章において詩人は、自らの勝利をすでに確信した、革命党の或る黨員にたいしてこのように答えた。

答へ Antwort⁽¹²⁾

きみの踏み出す道は正しい道だ、

でも時とともにきみは大いに思い違いをするかもしれぬ。

最近ドイツからむつとするように吹きつけてくるのは、

肉豆蔻^{ズク}や没薬の芳香じゃない。

ドイツの警官隊が剣を帯びているかぎり、

われわれは勝利の喇叭を吹いてはならない。

毒蛇が甘い言葉で言い寄り、狼や驢馬が

自由の歌を甘ったるく唄うとき、わたしは不安になる。

「毒蛇」および「狼」を伝統的な権力保持者と、またドイツ心酔者を「驢馬」とみなすのは、誤った考えではない―カール・マルクスも、一八四五年末にハイネ宛の手紙で、「キリスト教的ゲルマン主義的驢馬」のことを語った。旧支配権力は、かれらの席をみずから進んで明け渡すようなことは決してしないだろうこと、

そして支配権力が適切な時点で革命をひねりつぶすことのできる常備軍を意のままにすることができる限り、勝利はまだかちえられないことを、ハイネは承知していた。それゆえにかれは、民衆支配と民主主義の勝利を一挙に打ち樹てるといふ、没薬やナツメグの薫りといった芳香のかおる「魔法の革命」を、信じなかった。よく似た隠喩を使つてかれはすでに『ベルネ追想録』のなかでミラボーに次の言葉を喋らせていた。「ラベンダー油によつては革命は起きない」と、また『ドイツ 冬のメールルヒエン』ではサン・ジュストに次の句を言わせていた。

(13)
革命は薔薇の香油や
麝香によつては起きない。

ハイネはドイツ構成国家の伝統的な権力者たちの融和的な姿勢と譲歩の態度を疑つた。それら権力者たちはパリの二月革命の直後に数人の自由主義的な反対派の人々を、自分らの陣営に引張つて、待望される民衆蜂起にうまくブレーキをかけることができるよう、いわゆる「三月閣僚」に任命していた。かれは未完成のソネットの数行で、フランクフルトのパウル教会にどう大勢の人の良い妥協的な政治家たちが決して理解しなかつたような認識、つまり自由主義諸成果は立派に組織され、軍事的によく訓練された国民皆兵の軍隊によつてのみ確保されるという認識、を表

現した。フランス大革命の歴史に精通していた詩人は、ルイ十六世もかれの廷臣や信奉者たちも革命への愛を甘い言葉でささやき、自由の歌を笛でかなでていた一方で、蜂起を血の海に溺死させようと隠密裡に目論んでいたことを、知っていた。それゆえ「毒蛇」や「狼」といった旧権力者らから武器を奪い取ることが、肝要だったのだ。

同様に日付の書かれていない、ハイネの遺稿中に見つかった別の詩も、同じ時期に書かれたかもしれないし、同じ相棒宛のものかもしれないが、いずれにしろ前掲の詩と同じように呼びかけの形で、勇氣ある熱狂的な革命家に宛てられている。ここでも詩人は反動的権力側の軍事的優勢にたいする警告を發した。しかしソネットの断章『答え』では悲觀的なニュアンスを感じさせていたのが、今度は断乎としてかれの友人に焚きつけた。革命的事態に役立つようなときには、思慮と戦う勇氣とを結びつけ、流血を恐れてしりごみしないように、と。

(14)
斡旋 Vermittlung

きみは感激している、きみは勇氣がある――

それもよいことだ！

だが感激の評価によつて

思慮の代りをさせることはできない。

わたしは知っているが、敵は

正義と光のために戦うのではない―

だが敵は小銃をもち少なからぬ

大砲も、たくさんの百ポンド砲も持っている。

きみは落ち着いて銃を手に取り―

撃鉄を起こし―

よく狙いを定めよ―やつらが倒れると

きみの心臓は歓喜して爆発してよい。

カール・マルクスは、四年後に著わした論文『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』において、一八四八年の革命が、一七八九年から一八一四年までの世界を震撼させた革命のパロディーでしかなかったこと、そしてこの一八四八年の革命が、ローマ共和国の服装とローマ帝国の服装とを取り替え引き替え身にまとい、⁽¹⁵⁾「こころした由緒ある扮装をし、この借りもののせりふを使って、世界史の新しい場面を演じた」ことを、確証した。

「過激な挙動」をつねに笑うべきものと思っていたハイネは、すでに革命の開始されたときからパロディーの印象を受けていた。一八四八年四月十二日に文筆家アルフレート・マイスナー宛の手紙のなかでかれは嘆いた、「議事日程への情熱」にまわりを取り囲まれた「古代ローマの顔々しか」見えないことは、うんざりだ、

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

と。かはこれに関連して、ベルネの友人で、かれも長い間知り合っていたが、今や「現代の英雄」を気取っている、政治的亡命者ヤーコプ・ヴェネダイに言及した。ヴェネダイのタイプの偏狭な法螺吹きどもの口先だけの過激主義の背後に―ヴェネダイはその直後にドイツへ帰国してパウロ教会の議員に選出された―かれは小心な俗物を嗅ぎつけた。その俗物にはいかなる革命的なエネルギーも全然なくて、それら法螺吹きどもの「愚直な原始チュートン族敵性質の中核」は、武装闘争を呼びかけるハイネの檄に従うことは不可能だったのである。

「世界が今おこなっていること、希っていることは、私の心とは無縁である。私は運命に屈服する。運命に反抗するには、私は弱すぎるからだ」と、ハイネはマイスナーに打ち明けた。そしてかれの出版者カムペにたいしてそれらの革命的諸事件を「普遍的無秩序、世界的ごった返し、目の前に出現した神の精神錯乱！」と呼んだ。一八四八年六月にパリのプロレタリアートが流血をもって鎮圧されてしまった後の日に、そのとき市街戦で三千人が犠牲となったが、かれはこう言った。「世界は不幸に満ちて、ひとびとは逆上しています。」

すでにハイネはフランス第二共和国の発展に関して懐疑的だったが、それよりもなおきっぱりとドイツにおける革命の経過との間に距離を置いた。とくにかれは、パウロ教会の多くの自由主義的な議員たちが反革命の突撃にたいしりごみする状況を憂慮し

た。かれらは一八四八年七月末に反ポーランド決議に賛成し、属州ポーゼンにおけるプロイセンによるドイツ化政策と弾圧政策を是認した。ハイネはドイツ心酔主義者らのこうした権力増大を危険かつ未来への凶兆とみなした。「私が故国から受けている知らせは、私の苦悩をつのらせませす」と、かれは一八四八年八月末に、パリ亡命の当初から知っていた、パリの出版業者兼書籍商ジャン・ジャック・デュボシユに打ち明けた。「最大の努力を払って私の全生涯の事業を継続することが大切なこの瞬間に、怠惰を余儀なくされています。そして私はいつもの助けを私に期待する友人たちの救けてくれという叫びに答えることができないのです。われわれの敵どもはドイツで優勢です。いわゆる『国粹主義の』党派、ドイツ心酔者たちは、滑稽と同時に傍若無人な高慢さでふんぞり返っています。かれらの大言壮語は信じられません。かれらが夢みているのは、世界史のなかで主役を演じること、東方と西方での見捨てられたすべての種族をドイツに再び併合することに他なりません。もしあなた方がエルザスをかれらに返還することに急がないときにも、ロートリンゲンの要求をかれらのためらわなうでしよう。かれらのドイツ心酔的な要求をどこで止めるだろうか、だれにもわかりません。」

この予言はたんに一八七〇／七一年の戦争の領土的要求ばかりでなく、ヴェルヘルム時代における全ドイツ人のさらに引き続き要求をも指摘していたが、その要求は今世紀における二度にわ

たつての「世界的支配権の掴み取り」に合流するものだった。革命のさまざまな代表的人物や党派のグループと対決したハイネの政治の分析がされる前に、かれの考え方総体に継続があったのか、あるいは一貫性があったのかを確認するために、かれが距離を置いた原因にたいし最初に呈された疑問に答えることが、適切であろう。そのエリート的精神のありようがボナパルチズム、ヘーゲル主義そしてサン・シモン主義の思想の所産によつて養われていたハイネは、ドイツ革命の舞台上での俳優たちをどう評価していたか？

ドイツ革命がすでに挫折していた一八四九年九月に、二十年前のヘルグラント島での保養滞在以来親交を結んでいた、考古学者フェルディナント・マイヤーがかれを恭敬訪問した。この旧友にたいし詩人は政治的な信仰告白をおこなった。かれは言明した、自分は以前からの自己の政治的見解を堅持している。自分はそれをよくよく考え、吟味し直した上で、正しいと認めただ、と。じじつヨーロッパの旧態はとても改良を必要としてはいたが、それを揺すぶった個々人は、些細な個人の利益に支配されていて、大きな問題を解決する能力のなかつた頭の弱い人やみじめな臆病者たちだ。一八四八年二月以降登場した自由の英雄たちはみな、自分に嘔気を催させるだろう。或る政党指導者のとくに隣れむべき見本が、妻に扶養されていて、危急のときには妻のエプロンのうしろに這い込むような、詩人兼前衛闘士なのだ。しかし生死を

賭けて始められた血腥い殲滅戦は、政党の一つが完全に抹殺されたときに初めて、停戦となるかもしれない。別の戦士が戦いを挑むであろう時期が来るに違いない、と。

この啓発するところの多い所感は、ハイネの政治的考え方の変化が問題でないことを示している。かれは、伝統的なドイツの権力エリートとの妥協はありえない、また闘争は武力によつてのみ決定されうるといふ見解を堅持した。革命の挫折の責任をかれは主観的諸原因に押しつけた。つまり知識層インテリの革命の首唱者の怯懦、愚鈍そして政治的凡庸にである。かれらは、政治的領域における自分らの要求と、大衆つまり小市民階級の、農民の、手工業者および労働者の社会的要求とを、大革命の存立を脅かす一七九三年の危機において「偉大な公安委員会」がなしたと同じようには、結びつけることに成功しなかつた。

ハイネは当時の大量処刑を嫌悪していたにもかかわらず、ロベスピエールとサン・ジユストとは「いとも神聖な自由の英雄として、またパリの国民公会の高所から三色の福音を説教した山上の説教者たち」とかれにはみなされた。「三色の福音を通じて国家形態だけでなく社会生活全体が纏われるというわけではなく、新たに改造され、新たに創設され、それどころか新たに生みだされるであろう。」かれが亡命する前にもジャコバン派支配にたいして表明したこの賛意を、ハイネは一八三二年に書かれた『フランスの状態』で次のように裏付けた。「私は、²⁴先の革命闘争と、こ

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

れを闘った英雄たちとの思い出を愛している。私はかれらを深く尊敬する、フランスの青年がいつだってなしうると同じように深く。いやそれどころか、かの七月の日々以前には、まだ私はかのロベスピエールと聖ユストゥームとそして偉大な山岳党を称賛していたのだ。」

けれども一八四八年のドイツ革命では、利己心を知らず、住民の多数の物質的要求と利益を目標に据えて、軍事上の勝利をかちとることによつて、民主主義的成果を確保するために、国民皆兵を宣言した、ロベスピエールとサン・ジユストのような人物がいなかつた。その多数が保守的な各個の政府への暴力の行使を原則的に否決したパウル教会の集会は、プロイセンとオーストリアの支配権を制限することを逸してしまつた。ドイツ革命が失敗したのは、勇敢で天才的な民衆指導者にして「世俗的な救世主」、つまりラサール、ガリバルデイ、ボナパルトを、生み出さなかつたからである。

この分析は単にマイヤーの報告に基づくばかりでなく、数多くの政治詩によつて裏づけられる。それらの中でハイネは、あの嵐の年の間とその後においての革命の信奉者と敵について、ならびに革命の経過について、かれの判断を下したのだ。一八四八／四九年のドイツ革命にたいしハイネが詩作によつて決算をおこなつたことについて、これから注釈と解説をしてゆくに当り、これらの詩の成立年代を挙げることは全般的に断念される。というのは

これらの詩にはたい日付がつけられていないし、詩人はほとんど生涯の終りに至るまで再三再四その革命の社会的な原因および事件を振り返ったからである。政治の舞台上に登場する人物や性格の仮面にたいしておこなつたハイネの注釈の研究を、左翼的な政治的スペクトルから始めて、右の方へと進めて行く方がむしろ得策と思われる。

詩『ジムプリチシムス一世』Simplizissimus I. はゲオルク・ヘルヴェークの政治的行動主義を批判した。この詩人は一八四二年にプロイセン国王に拝謁したことでセンセイションを捲き起こし、ハイネはその政治的単純さをすでに早くも嘲笑した。その詩人は革命が始まったときパリで亡命生活をしていた。かれは新しく編成された「ドイツ民主主義兵団」の団長職を引受けたが、その兵団は軍事的に未訓練の手工業者たちから徴募され、ドイツ共和国の武力援助を目標とするものであった。一八四八年四月にヘルヴェークはこの軍隊を率いてライン河を越えた。そのときかれの妻エマーベルリンの富裕な絹商人の娘——は遠征に加わってかれについて行つた。およそ七〇〇人の兵員から成るその兵団は、数日のちにヴェルテンベルク軍によつて壊滅させられた。ヘルヴェーク夫妻は変装してスイスに逃げ込むことができた。戦闘からのヘルヴェークの逃亡をめぐつて、かれがこわがって馬車の中に隠れてしまい、妻が馬車を御したという噂が立つた。

初めから挫折すべき革命にあつた、その反乱の企ての不幸な結

末の後でヘルヴェークは四方八方から嘲弄と嘲笑を浴せかけられた。ハイネの批判はたんにヘルヴェークの単純さと理想主義的迷妄に向けられたばかりではない。かれがヘルヴェークを嘲笑したのは、ヘルヴェークが最初は偉そうにドイツの解放を予言しているながら、恥知らずに戦場から逃げ出したからでもあつた。フェルディナント・マイアーとの対話でも、ハイネはすでに触れたように——ヘルヴェークの臆病をからかつた。その手ひどい諷刺詩には不公正さがなくはない——なぜならヘルヴェークが帝位に即こうと意図したことはなかつたのだから——し、ときおり通俗に墮した。

これが、かれの義勇軍の先頭を

馬上ゆたかに颯爽と騎行した、

解放の騎手たる、

あのドイツの自由の総司令官なのか？

かれのまたがった白馬は純白、

もうとつくに黴だらけになつた神々や

英雄たちが乗っていたすべての白馬のように、

熱狂が祖国の救い主に歓声をあげた。

かれは乗馬の名人だつた

馬上のリスト、夢遊病の香具師、

愚か者、俗物の腰ぎんちゃく、
みじめな主役俳優だった！

女騎者^{アマゾネス}として轡を並べていたのが
鼻の高い妻だった。

勇ましい羽毛を帽子につけ、
美しい服がうっとり光っていた。

噂によれば、この妻は

銃声が夫のか弱い下腹の

神経にショックを与えたとき、

おじけづく夫を奮い立たせようとしたが無駄だった。

妻は夫に言った、「臆病はおやめ、

ひるんだ弱気を捨てなさい、

今こそ勝つか死ぬかの大事なとき――

王冠がかかっているのです。

祖国の窮状を思ってください、

ご自身の借金と苦境を考えて下さい、

フランクフルトであなたを王位に即けてあげますよ、

するとロスチャイルドは貸してくれます、他の陛下と同様に。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

どんなにすばらしくおこじよの毛皮のマントが
あなたに似合うことでしょう！

萬歳の声がもう聞こえます。あなたに
花をふりまく白服の娘たちも見えています――

無益な勧告だ！ 極めて優れた人でさえ

病気になるほど、生まれつき嫌いな物はある、

ゲーテが煙草の煙を嫌ったように、

われらが英雄も火薬の臭いを嗅げない。

銃声がひびく――英雄は蒼ざめ、

訳のわからぬたわごとを口ごもる、

目の前が黄色になり――妻は

高い鼻もろともハンカチで顔をおおう。

そんな噂が流れる――それは本当か？

だれにわかるう！ われわれ人間は不完全であり、

かの偉大なホラチウス・フラックスさえ

いくさで逃亡した。

いくつかの詩節において詩人に^{イロニッシュ}反語的な軽快さの無さが目立

ち、野卑に墮した。それが「あまりにも野卑に」思われたため、かれはその詩を印刷の前に引つ込めた。或る知人にかれは、いつだつても才気に富んでいたこの人物が下層民から蒙らなければならなかった「沢山の精神的苦痛」について知らされていたので、ヘルヴェークをいたわりたい、と告げた。『ジムプリチムス一世』は、ハイネの死後かなりの年数が経つてようやくかれの遺稿中から公表された。

こうしてハイネは、広汎な人民大衆の支持、必要な物質的土台をつくり出すこともなくて、ドイツの革命と共和国化をもたらしべき、軍事的暴動の試みを、原則的には勝算なく誤りだともていたのだが、少なからずドイツ人の「臣従の情」なる奴隷根性を嘲笑して、「下からの革命」の勝利についてあまり幻想を抱かなかつた。かれは一八四八年はじめにおこなわれた、フランクフルト国民議会の選挙に際し、非妥協的な民主主義者が「公的な信頼の男たち」としてごく僅かしか選出されなかつたのを、見た。それと正反対にイギリスの下院には専制君主チャールズ一世との闘争で断乎たるリーダーがいた。かれらは一六四九年に議會を法廷に変えてその君主に死刑の判決を下した。一七九三年にフランス国民公会は同様な態度をとつて、ルイ十六世とマリー・アントアネットを短い裁判にかけ、王夫婦を処刑させた。諷刺詩『一六四九年——一七九三年——?』1649-1793-??? においてハイネは、イギリス革命およびフランス革命の徹底的な共和主義者たちと、玉

座のまえに恐れ入り畏まり立ちつくして、王冠を頂く者らにこれっぽちの害も加えなかつた、おどおどして臆病なドイツの議員たちとを比較した。その詩（ハイネの死後やつと公刊された）はじじつ一八四八年のドイツの革命家たちの無能を槍玉にあげはしたけれども、君主らにも、かれらの王冠が永遠に続くものではないことを警告した。「泣いている御者」によって刑場に運ばれる君主が「いともうやうやしく」処刑されるといふ逆説的な像を描いて、ハイネは大多数のドイツの自由主義者たちのお上にたにする従順さを嘲弄した。

イギリス人は王殺しとして

すこぶる粗野で無礼な態度を示した。

チャールズ王はホワイトホールで

一睡もせず最後の夜をすごした。

窓の前で嘲りの歌が唄われ

断頭台に槌が打たれた。

フランス人も劣らず無礼だった。

辻馬車でルイ・カペーを

刑場に運んだ。

儀礼にしたがって

陛下にふさわしい、

御料場所は許さなかった。

マリー・アントアネットの場合もつとひどかった。

二輪荷車しか使わせなかった。

侍従や女官の代りに

過激共和黨員が同乗した。

カペー未亡人は高慢につんと

ハプスブルグ家の厚い下唇をつき出した。

フランス人とイギリス人とは

もともと情がまったくない。情があるのは

ただドイツ人だけ。ドイツ人は

テロ行為のときでも情を示すだろう。

ドイツ人はいつも陛下を

敬虔に遇するだろう。

六頭立ての宮廷儀装馬車に乗せ、

馬には黒い縞模様の布と喪章、

御者台の上では泣きながら御者が

葬儀の鞭を手にして―

こんなふうにつかドイツの国王は刑場に運ばれ

いともうやうやくしくギロチンにかけられるだろう。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

十七世紀の革命で処刑されたイギリス国王の姿は、最初一八四七年にピュットマンの「記念帖」に『子守唄』Das Wiegenliedという標題で、それから四年後に少し手が加えられて、『ロマンツェーロ』のなかに『チャールズ一世』Karl I. の題で発表されたバラードの中心に据えられている。

森の中の炭焼き小屋にだ一人

沈んだ気持で国王が坐っている。

炭焼きの子の揺り籠のかたわらに坐り

王は揺らしながら単調な歌を唄う。

「ねんねんころり、何がかさこそ藁のなか？」

小屋で羊はメエーメエー―

おまえの額にしるしがあつて

寝顔のほほえみ恐ろしい。

ねんねんころり、仔猫が死んだ―

おまえの額にしるしがあつて―

大人になると斧ふるう、

はやくも森では櫛が震える。

古い炭焼きの信仰は消えた、
いま炭焼きの子らは信じぬ—
ねんねんころり—もはや神も、
まして王など。

仔猫が死んで、仔鼠元氣—
余らは亡びの運命—

ねんねんころり—天の神さまも
地上の王の余もまた亡ぶ。

元氣は失せて、心は病んだ、
日に日に病み衰え—

ねんねんころり—炭焼きの子よ、
余は知っておる、おまえは余の首斬人。

余の死の歌がおまえの子守唄—

ねんねんころり—おまえはその前
余の白髪をちょん切り、
頸にひやりと刃をあてる。

ねんねんころり、何がかさこそ藁のなか？
おまえが帝国手中におさめ、

余の頭を胴から斬り離す—
仔猫は死んだ。

ねんねんころり、何がかさこそ藁のなか？

小屋で羊はメエーメエー。

仔猫が死んで、仔鼠元氣—

おねんね、余の小づちや首斬人、おねんね！

ハイネは、みずからの臣下どもによって死刑の宣告を受けて斬首された国王に発言させることによって、伝統的な権力者たちを裁いている。この展望が、退場してゆく階級の避くべからざる没落という歴史的法則性をかれら自身の観点から叙述することを可能にした。かれの首斬人との国王の幻想的な出会いを可能にするために、詩人は、炭焼きの小屋への君主の訪問を巧みに作り出している。その炭焼きの眠っている乳呑み子に王は憂鬱な子守唄を歌って聞かせるのである。依然として王は権力を保持しているのだけれど、すでに致命的な、阻止できぬ脅威を見抜いている。なぜなら王が乳呑み子の額に認めるしるしは、その子が成人となるや否や、自分の首を斬り落すであろうことを暗示しているからだ。王がその子を歌って寝かしつけようと試みる子守唄は、かれ自身の挽歌となる。王は、自分の死刑執行人から逃れられぬことを承知している。死刑執行人のチャリンと音を立てる刀がすでに

頸に触れるように思われる。

その詩の政治的発言は一八四八年革命の時期に論議を呼ぶ現実性をもつものだった。「仔猫」や「仔鼠」といった象徴性を孕む縮小語形は小ささをあらわすのではなく、むしろ威嚇の感情を強めている。子の額の上のカインのしるしと藁のなかのかさこそとは血腥い暴力的な革命を暗示している。仔猫の死と仔鼠の喜びとは、君主の敗北と人民大衆の勝利と解される。「はやくも森では懈が震える」の行は、ハイネがおそらく十七世紀のイングラントではなく、むしろ十九世紀のドイツを考えていたことを示すものである。詩『夜の思い』および『ドイツ 冬のメールヒェン』において「懈」はドイツの同意語として書かれており、『ベルネ追想録』では詩的隠喩なしで次のように述べられた。「われわれはついにわれわれの懈の森を正しく使用するだろうか、つまり世界解放のバリケードのために？」——こうして老いはれた権力者らに止めを刺し、天国の神ならびに地上の王を潰してしまうだろう者は、今はまだ眠っているドイツ国民である。死滅しつつかある封建身分的な秩序にたいして反乱を起し革命の担い手になるであろう下層の社会階層は、じじつまだ政治的な認識を確信するまでにはなっていないのだが、「古い炭焼きの信仰が消えた」ことはすでに明白である。宗教からの、彼岸での神の正義への希望からの離反は、地上の権威の否定を必然的に招き寄せる。「思想界で起きたと同じ革命を、現象の世界でも待ち受ける空想家を笑うな」

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

と、ハイネは『ドイツにおける宗教と哲学の歴史』のなかで言った。そして続けて述べた、「稲妻が雷鳴に先だつように、思想は行動に先だつ」。カントからヘーゲルまでのドイツの哲学者たちが思想の王国に移し入れた革命は、地上における支配関係の転覆に必然的に合流する。政治的進歩の、社会的平等の、そして人民主権の諸理念の勝利は、大人へ生長してゆく子供の身体の発育と同様に、阻止できない。

一八四七年に初めて発表したときハイネは、王政復古権力の危機が革命的爆発という結果にいたることを予感していた。その『子守唄』Wiegenliedが、かれらの時代は終わったという、権力者たちにたいする脅迫を内容としていたのは、ピユットマンの「アルバム」に発表された詩『シュレージエンの織工たち』と同様だった。ハイネが革命の挫折のうちにその詩の題名を『チャールズ一世』と変えたとき、時代物の衣裳を着せて仮装させているにもかかわらず、読者が自分の時代史的個人的な意図を見抜くことを、かれは確信していた。時事的関連の多様さは一八五一年にも維持されていた、いや、もっとその詩の政治的な爆発力を高めた。というのは、旧権力の成功は歴史的発展の最終的な結論ではありえなかったし、民主主義の勝利は阻止できないという理由によって、かれらの敗北をたんに一時的な失敗とみなすことは、劣勢な民主主義への挑発とみなされなければならなかったのだから。このことはハイネが一八四九年の秋に考古学者フェルディナント・マイ

二七九(二七九)

アーにたいしてした信念の告白、つまり戦いは前進し、別の—より立派な—闘士たちが戦いに臨むような時代が来るに違いないという、それとも一致した。

風刺的幽霊バラッド『マリー・アントアネット』³² Marie Antoinette
最初一八五一年『ロマンツエーロ』に発表、も、時代遅れの老朽化した支配形態と革命前の時代の政治的特権にしがみついていたドイツの君主たちにたいする隠喩的判決だった。詩人は、—かれがしばしば使用した—斬首のモチーフによって、政治的特権身分としての貴族を歴史的な必然性をもって抹殺すること、ならびに絶対君主の無思慮と愚鈍を芸術的に造形することに、成功した。

チュイルリー宮殿のガラス窓は
なんと明るく輝いていることか、
それなのにそこでは真つ昼間
むかしの幽霊どもが徘徊する。

花のあずまやに現われる
マリー・アントアネット。
そのかたはそこで厳かな
礼式で朝の接見をおこなう。

飾り立てた女官たち。大部分は起立しているが、

床几に腰かけている者もある。
その縞子や金襴のドレスは
宝石やレースで飾られている。

胴着は細く、袴衣はふくらんで、
その下から可愛らしい踵の高い
足が賢そうにちらりと覗く—
あア、かの女らに頭がついていたらなあ！

女官たちにはみんな頭がなく、
王妃おんみずからにもない、
だから王妃陛下は
御髪上げなされない。

まさしく塔のようにそそり立つ髪型で
誇り高く振舞うことのできた王妃、
マリア・テレジアの御息女、
ドイツ皇帝の孫、

そのおかたがいま頭もなく、髪型もなく
化けて出なければならぬ、
同じように頭もなく髪も結わない

貴婦人たちにかこまれて。

これは革命の結果だ、

革命の因果な綱要の結果だ。

これはみなジャン・ジャック・ルソーと
ヴォルテールとギロチンのせいだ。

ところが奇妙だ！ これらの連中は

自分らが死んでいることに、

自分らが頭を失くしたことに、

まったく気づいていないように思える。

まったくむかし通りの空々しい矯飾

間のぬけた片足曳いてのお辞儀―

滑稽であり無気味でもある

頭のないお辞儀など。

氣付役の第一の女官が膝をかかめるお辞儀をして

リンネルの肌着シユミーズをもつてくる、

第二の女官がそれを王妃に捧げ

そして二人とも膝をかかめてひきさがる。

第三の女官と第四の女官は

お辞儀をして王妃陛下の前に

ひざまずいて、

靴下をおはかせする。

お付き女官があらわれて膝をかかめ

着替えの胴着タユをもつてくる、

次の女官は膝をかかめて

王妃に下袴衣ベチコートをもつてくる。

女官長は侍立して、

真白な胸を扇いでいる、

頭がないので

かの女はお尻で微笑する。

カーテンをひいた窓のすき間から

太陽は物珍しげに覗き込む、

けれどもむかしの幽霊どもを認めて

びっくりして跳びすさる。

「³³すでに二十年以上前に詩人は『旅の絵』のなかで確証していた。
幽霊というものは、夜の黒いマントを脱いで、真昼の光のもと

に現われる方が、ずっと恐ろしい」と。真つ昼間に幽霊となって王宮に現われるマリー・アントアネットとかの女の女官たちの幽霊は、自分らが斬首されていることを自覚していない。かの女らはお尻で微笑むことができるし、かの女らの時代遅れの宮廷の儀式、たわむれのような矯飾と滑稽で厳かな礼式を保持している。啓蒙思想と革命にもかかわらずアンシャンレジームの精神がドイツにまだ生き残っていること、一八四八年の革命家らが諸君主を退位させることも首を斬り落しもしなかったために、「間のぬけた片足曳いてのお辞儀」が君侯の宮廷に「まったくむかし通り」に続いていることを、ハイネは笑いのものにした。「ドイツ皇帝の孫」がフランスでかの女の頭をなくしたという警告は、王冠を頂く者たちに将来革命が勝利したさいには同様の運命がさし迫っていることを、暗示するものだった。プロイセンとオーストリアの検閲当局は、『チャールズ一世』および『マリー・アントアネット』のような詩は歴史画ではなく、政治的時局性^{アクチュアリティ}をもつと認識した。かれらは手に入る限りの『ロマンツエーロ』を押し、その抒情詩集をかれらの権力の範囲内で発禁にした。

すでに触れたように、ハイネはかれの政治詩において、何故にドイツの革命がその担い手のために失敗せざるをえなかったか、を示そうと試みた。この意図はとくに、ケルンのジャーナリストヤーコプ・ヴェネダイを攻撃した詩『コベス一世』において顕著であった。ハイネはかれと一八三四年に知り合い、一時期政治的

に近い立場にあった。ヴェネダイは、一七九七年の短命だった「シスレニン共和国」で或る役割を果たしたラインのジャコバン党員の息子だった。かれはブルシエンシャフト運動の出身で、ハムバッハ祭典に参加し、逮捕されて、バイエルンの牢獄から脱走した。パリでかれは「ドイツ民族協会」に加盟し、亡命者の雑誌「被追放者」を編集した。かれは左翼的共和主義者とみなされたが、もちろんすでに、一八三九年に出版されたプロイセンについての或る本では「ゲルマン民族主義」を公然と支持していた。かれのドイツ民族主義的気取りはハイネに嫌悪の念を催させ始めた。この疎隔は、プロイセン政府が一八四二年にケルンのドームの建築の継続を決定したときに、激化した。ヴェネダイは熱狂して、一冊のパンフレットを書き、そのなかで国粹主義的な音色を鳴り響かせた。ドームは「ドイツの国旗の旗手」にして「国境監視塔」であり、敵が脅かすや否や、その「警鐘」が「ドイツ種の人々」を呼び集める、と。

一八四八年ヴェネダイは亡命からドイツに帰国して、パウロ教会の議員に選出された。そこでかれはフランスからエルザスとロートリンゲンの返還を求め、プロイセン国王をドイツ世襲皇帝とする選挙に賛成票を投じた。ハイネにとつて、最初手工業者と労働者の社会的解放というスローガンを唱えながら、プロイセン権力国家の信奉者に成り変わったヴェネダイは、じじつ過激な空論を口にしはするものの、現実には人民を相互にけしかける反動

の道具にされる、あれらの珍しからざるいい加減な気持の似而非^{えせ}革命家たちの原型^{プロトタイプ}となった。あるメモ用紙でハイネはヴェネダイのことを「縞馬³⁵—黒赤金の縞模様」と名づけた。

一八五四年秋に『雑録集』Vermischte Schriftenの第一巻に発表された、風刺詩『コベス一世』Kobes I. はかつてのブルシエンシャフトラーにして粗野な共和主義者を笑いものにした。ハイネは詩『ジムプリチシムス一世』で、ゲオルク・ヘルヴェークはドイツ皇帝の位を得んと努めていると主張していたのだが、『コベス一世』でかれは、イローニツシユに、ヤーコプ・ヴェネダイにも同じ名誉を与えようと提案した。

キフホイザーの赤髻王に

ドイツの詩人はとうぜん語った、

「よくよく考えてみれば

われわれには皇帝などまったく必要でない！」

けれどもあなたらは帝政をどうしても欲しい、

皇帝を選びたがる。

ねエドイッ人よ！ 精神や

名誉に騙されないように。

貴族の生れを選ばず、

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

下層民の一人を選びなさい、
狐も獅子も選びなさんな、
一番愚かな去勢雄羊を選びな。

ケルン生れを選びなさい、
愚かなコベス・フォン・ケルン氏を、
あれこそ愚鈍の点で天才といってよい、
民を騙しはしないだろう。

丸太がいつも最上の君主だと、
寓話でイソップが教えている。

丸太は哀れな蛙を食いはしない、
長嘴の鶴^{こうのとり}は食べるが。

確信せよ、コベスが暴君になりはしない、
ネロにもホロフェルネスにもならぬ。
かれには古代の残忍な心はなく、
近代の温順な心がある。

町人どもの高慢はその心を疎んじた、
けれども誇りを傷つけられた男は
職場の被圧迫者の胸にすがって

粗野なやつらの精華となった。

職人組合の同志たちは

コベスを代弁者を選んだ。

コベスはいかかると最後のパンを分かち合い、

かれらは褒めちぎった。

最後に引用した詩節でハイネはイローニツシユに、それらの構成員が主として亡命手工業者から成立っていた、パリの「ドイツ民族協会」および「被追放者連盟」でのヴェネダイの活動力を当て擦った。

ハイネはドイツ民族主義の領土要求を嘲笑した、次のような意図をヴェネダイになすりつけることによって、つまりドイツ皇帝にかれが選出されたのちには、手工業の徒弟から徴募された「皇帝親衛隊」を編成し、その先頭に立ってフランスに侵入し、エルザスおよびロートリンゲンばかりでなく、十一世紀から十三世紀まで帝国に属していたブルグンドをも、併合しようとする意図を、である。

でも心配ない、コベスは出かけない、
平和な使命がかれを引き止める

高い理想の実現、

ケルンのドームを完成させることが。

しかしドームが完成すれば、

コベスは腹を立てて

剣を手に取り

フランス人の責任を問うだろう。

かつてフランス人が帝国から掠め取った

エルザスとロートリンゲンを奪い取れば、

コベスは意気揚々とブルグンドへも進撃する、

ドームが出来あがればすぐにでも。

ドイツ人たちよ！ 気をしっかりて、

どうしても皇帝が欲しいなら、

ケルンの謝肉祭の皇帝になさい、

コベス一世というのがその名前さ！

一八五四年に公刊され、『コベス一世』を収めたハイネの詩集を、
ヴェネダイが見たとき、かれは「ケルン新聞」紙上で、ハイネの
文体とイロニーの模倣を試みて、詩人に欠けている愛国心、無性
格および「けがらわしい嘘つき」を非難する、七つのヘボ詩で答
えた。

(38) おまえ自身の血、おまえの祖国を

おまえはくそみそに言った、

それなのに絶えずいたるところで

おまえ自身に胡麻を搗った。

ハイネの秘書ラインハルトがかれにヴェネダイによる非難を朗読して聞かせたとき、ハイネはこの「腹を立てた無能力と下手な仮面をつけた虚栄との拙劣な韻文化」をあざけた。かれはヴェネダイの「ペガサス」を「翼の生えた驢馬」と、その詩句を「韻を踏んだ便器」と呼んだ。或る（発送されなかつた）「公開書簡」でかれは述べた、ヴェネダイの「反芻する散文」は「依然この四つの脚の詩にたいする神肴である」と、そしてヴェネダイにこう呼びかけた、「不潔な下僕よ、自然はお前を便所の掃除人と定め、ドイツの詩人とは定めていない。お前の汚い長短短格でドイツ語に触れてくれるな、私がかの女〔ツ語〕に贈った白い夜会服を汚すなかれ。」

ヴェネダイがパウロ教会においてともかくも所属していた「西ホール」の派閥は、国民立法議会のフランクフルトからの追放後にはシュトゥットガルトの残余議会に所属して帝国憲法の擁護を呼びかけたのだが、パウロ教会の多数派の方は諸侯との交友的な「合意」に達することのみを熱望した。これら立憲君主主義者た

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グループ)

ちの政治的首領は国民立法議会議長ハインリヒ・フォン・ゲーゲルンであったが、かれらをハイネは「薄のろ共和主義者ら」より以上に軽蔑して、「やつらの中傷された敵たちの足もとにも寄りつけない」やつらだ、とした。

革命を早急に終結させようとして、新たな民衆反乱を恐れていたゲーゲルンは、一八四八年六月末に、ハプスブルク皇帝の叔父であるヨハン・フォン・エスターライヒ大公を、摂政に選ばせようと思いついた。チロルに暮らしていたヨハンは、宿駅長の娘と結婚していたので、一種民衆的なところがあつた。ゲーゲルンは国民立法議会に、自分が中央権力の問題を「思い切った手」を使って解決し、君侯の選出にもかかわらず人民主権の原理を放棄するつもりはないと確言することによって、不意打ちを食らわせた。反動的なフランクフルトの帝国議会はパウロ教会の多数派の決議を承認した。ユスチヌス・ケルナー、アナスタジウス・グリューンおよびフランク・ディンゲルシュテットは称賛する信奉の詩を作つたが、それらの詩のなかでかれらは大公の「チロル人の誠実さ」をたたえて、その「強力な狩猟用角笛」は無数の従者を呼び寄せるだろう、と述べた。賛歌やパンフレット類はかれを「ドイツ人の父」にして「民衆の男」と呼んで、誠実と忠誠を誓つた。保守的な自由主義者たちにとつて国民的統一を体現するように思われた、政治的にまったく無力なその摂政は、現実には王政復古および君侯の権力政治の道具であつた。詩『国なしハンス』

Hans ohne Land においてハイネはこの状況をすでにその標題によつてだけでも暴露した。その標題とはイギリス王ジョン 欠地王(二一九九—一三二六年)の貴族の大立物らへの依存を当て擦つたものである。詩人はガーゲルンおよびその一党の錯誤的な希望と、ヨハンの政治的・精神的無意味さとの間の食い違いを暴露することによつて、パウロ教会多数派の君主主義的奴隷根性の矛盾を論証した。

それらの信奉の詩とは反対に、ハイネはヨハンのフランクフルトへの意気揚々たる入城を描かず、チロルの城郭でかれの妻との個人的な別離を描いた。この転換に次のような役割を示す独白のせりふはふさわしかった。ヨハンはせりふの受け手ではなく、自ら発言し、素朴な告白によつて物笑いの種となる。この技法をハイネはすでに詩『アレキサンダー』および詩『シナの皇帝』で用いたが、それらはフリードリヒ・ヴィルヘルム四世・フォン・プロイセンのさまざまな欠陥を嘲笑するものだった。摂政の冠を戴かされた「国なしハンス」には絶えず舌のもつれが起きるが、それはかれの役割と矛盾するもので、それゆえ不本意な自己パロディーになるのである。

かれに「帝冠」を差し出す、あれらの者たちの「愛」は、「ほとんど理解さ」れえない、なぜなら三月革命の本源的な諸目的とひどく対立するのだから。このことがヨハンをそそのかして不本意な告白をさせた、ドイツ人は愚かな国民だ——「親父」が幸福に

してやらなければならぬ子供たちそっくりに。かれはドイツ人を「心情」によつて統治せんとする、このことがかれならびにかれの臣下らに無能の証明を与えるのである。かくてチロルの自然児は、ドイツ人の政治的な心情の概念に、つまりドイツ人が君主政治体制の代表者たちと制御されずに感情的に結びつくことに、適合するのである。「ばかげたまね」をしない、森のなかで成長した獵師は、かれが妻の前でリハーサルする即位演説において、自分がいかなる任意の他人によつても、「そこらにいるだれ」によつても取替え可能だと認める。「黒、赤、金のリボン」によつて飾られた「旅行用帽子」は、ただちにドイツのミヒェルの垂れ飾りつき帽子として認められる。皇帝のローブ、即位式の礼装その他の神器は帝国の再建という逆コースの反民主主義的にして時代錯誤的な性格をあらわにする。かくてハイネの描く摂政の曖昧な意見の表面は、ガーゲルンおよびパウロ教会多数派の国に忠義な基本姿勢をさらけ出すのであり、革命への弔辞に他ならない。

「ご機嫌よう、妻よ」国なしハンスは言った、
「高尚な目的がわたしを呼ぶ。」

違つた狩獵の仕事がわたしを待っている、
わたしはこれから違う山羊を撃つのだ。

おまえにわたしの獵笛を残しておく、

わたしが去ったら、これを吹いて
つれづれを慰めなさい。おまえは実家で
郵便馬車の角笛を吹き習ったのだから。

おまえにわたしの犬も残しておく、
犬がこの城塞を守ってくれるように。
わたし自身を守ってくれるのは
むく犬のように忠実な心根のドイツ国民だ。

かれらがわたしに皇帝の冠を差し出す、
その愛情がほとんど理解できない、
かれらは自分らの胸や
自らのパイプにわたしの肖像をつけている。

きみたちドイツ人は偉大な国民だ、
とても単純だけれどもとても才能がある！
きみたちを見ると本当とは思えない、
きみたちが火薬を發明したのが。

わたしは皇帝カイザーでなく、きみたちの父親ファーターになりたい、
わたしはきみたちを幸福にしてやりたい—
あアすばらしい考えた！ そう考えると誇りをおぼえる、

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

自分がグラックス兄弟〔古代ローマの政治家で保守
派と対立して悲運に死んだ〕の母親で
あるような。

知性でなく、心で

わたしはわたしの国民を治めたい。
わたしは政治家じゃないし
政治の議論などやれない。

わたしは獵師で、自然の人間だ、

森のなかで一緒に育ったのだ

羚羊や鴨と、野呂鹿や野豚と。

わたしは大言はしないし、ばかなまねもしない。

わたしは宣言や印刷された引き札で
騙しはしない。

わたしは言う、国民よ、鮭がなければ、
今日は干鱈で我慢してくれ。

わたしが皇帝としてきみらの気に入らなければ、
そこらにいるだれでも連れてきなさい。

わたしはきみたちなしでも食っていきける、
チロルではなに不自由なかつたのだ。

このようにわたしは述べる。では、妻よ、ご機嫌よう！

もうこれ以上ここにはいられない。

おまえの父の郵便馬車の御者が

駄馬を連れてもう待っている。

急いで旅行帽を渡してくれ

黒・赤・金のリボンのついた――

まもなくおまえは帝冠をかぶり

昔の皇帝の衣裳を着けたわたしを見るだろう。

まもなくおまえは フルツィアーレ 大外衣を、

かつて皇帝オットーに

サラセン人の回教王スルケンが献上した

美しい緋紫のガウンをまとったわたしを見るだろう。

その下にわたしは ダルマナカ 祭服を着る、

それには宝石で縫取りしてある

獅子や駱駝といった

お伽噺に出てくる動物たちの行列が。

わたしは胸に ストラ 頸垂帯をつける、

それは意味深く飾つてある

黄色の地に黒の鷲で。

この服装はことのほか似合うのだ。

ご機嫌よう！ 後世の人は言うだろう

わたしは帝冠を戴く功績があつたと――

それはわからない。おそらく後世の人は

結局わたしのことなど一言も述べはしないだろう」

ハイネの役割詩〔主人公が自己の役割を〕の全部が必ずしも、上

層貴族の階級を形づくる者たちと関係があつたとは限らず、それ

らの者たちの個人的な欠陥や知性の欠如や政治的無能を嘲笑した

わけではなかつた。詩『田舎町の恐怖時代の思い出』 クレーヴィンケル *Erinner-*

ung aus Krawinkels Schreckenstagen においてハイネは、不安がる

反革命的な市当局の布告による命令と禁令とを箴言風に構成する

ことによつて、一八四八年の問題性をはるかに超越してゆく、普

遍妥当的な金言を創造することができた。ひとは個人を風刺する

詩において、すべての当て擦りを理解するためには、歴史的関係

や人間関係の詳細を知らなければならぬのだが、ハイネはかれ

の クレーヴィンケル 田舎町一詩において、偽善に粉飾されたあらゆる反民主主義

の急所を突いた。デモンストレーションへの参加に警告を発する、

われわれ自身の時代の安寧秩序のための当局のまったくよく似た

警告を、だれが知らないだろうか？ — 情け容赦ない結句のみでも命令者の用心深いポーズが暴露された。

(45)
クレウインケル

田舎町の恐怖時代の思い出

われわれ、町長および町議員は、
次のような布告を

至極町の長老らしく

忠実な町民の全階層に発した。

「われわれの間に革命精神の種を蒔いたのは、
大抵は外国人らである。

かかる犯罪者が滅多に

わが同胞でないのは有難いことである！

これらの者は大抵無神論者である。

神にそむくものは、

ついには地上の当局にもまた

そむくであろう。

政府に従うことは、

ユダヤ教徒およびキリスト教徒の第一の義務である。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グループ)

キリスト教徒およびユダヤ教徒よ、
日没とともにのおのの店を閉させ。

三名のものが集合すれば、

解散しなければならぬ。

夜間何びとも無灯火で

路上に出てはならぬ。

各人はその武器を

ギルドハウス
同業組合に引渡さなければならぬ。

いかなる種類の弾薬も

同所に寄托される。

街頭で不平を言うものは、

即刻銃殺に処せられる。

態度で不平を示すものも

同様厳罰に処せられるべし。

慈愛深くいとも賢明なる統治により

敬虔に愛情こめて国家を防衛する

当局を信頼せよ。

町民各位は常に口をつぐむべきである。

一八四九年三月末パウロ教会の制憲議会が帝国憲法に関する書類上のかねらの仕事を終えたあとで、その多数派はプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世をドイツ人の皇帝に選出した。その君主は申し出られた帝冠を軽蔑的に突っ返した。すでにその前にかねは述べていた、「主権の眩暈」による「酩酊状態」の「日々⁽⁴⁶⁾雇い労働者議会」の帝冠には「革命の腐肉の臭気」がこびりついており、「神の恩寵を受けた正統の国王は泥や粘土で焼かれた、そんな空想の輪飾り」を受けることはできない、と。

ハイネがその選挙とその後続く喜劇のことを聞いたとき、どのような悲しみを感じたかは、一八四九年の四月十五日付の通信から読み取れる。その通信でかれは、ドイツにいる友人たちに自分の敗政状況と健康状態を知らせた。その結びの文章は次のようである。「祖国⁽⁴⁷⁾で血を流しつつある、人々の心臓に、挨拶と涙とを！」

ハイネの政治的抒情詩の若干の例はすでに、寓話に登場する動物を詩の主人公にすることを、かれが好んだことを示していた。このことはかれに、一般的に受け容れられた偏見を掘り崩し、懐疑的な立場からイローニツシュに、また時には攻撃的に既存社会の価値観の裏面をさぐることを、可能にした。かれの詩『選挙+驢馬』Die Wahl-Eselは議会における派閥抗争と民衆扇動の問題を提起しており、プロイセン国王の世襲皇帝への選挙をやりとげ

た、パウロ教会の国粹派にたいする風刺である。かれは国粹主義者らによつて尊重された純血性および心情⁽⁴⁸⁾の非合理主義的価値を嘲笑したし、またかれが反ユダヤ的、反フランス的、反スラヴ的偏見を暴露することによつて、ドイツ心酔の理想を皮肉つた。ローマ崇拜者とは政治的なカトリク主義の信奉者にたいする国粹主義者らの軽蔑的名称だった。詩のなかで言及された、投票をあえてしなかつた馬党は、パウロ教会の左派を意味するかもしれないが、その派はフリードリヒ・ヴィルヘルム四世の選挙には棄権した。もちろん選挙では実際には対立候補はいなかつたので、「馬の立候補」というのはユーモラスな効果を強めんがためにすぎなかつた。ドイツの血を享けた「驢馬」の口から発せられる、ユダヤ系ドイツ語〔イディッシュ〕から借用された表現「マMEM」(つまり母)もその類である。革命の諸成果をひたたくられ、驢馬たちによつてペテンにかけられる人民は、最初の詩節が暗示するように、共和主義的な自由⁽⁴⁹⁾に飽き飽きして、絶対主義を切望している。ここではたんにハイネの風刺詩に典型的な逆転だけでなく、下層階層の政治的能力にたいするかれの懐疑もがあらさまになる。

選挙+驢馬

とうとう自由に飽いて、
動物共和国は、

ただひとりの王の
絶対支配を求めた。

あらゆる種類の動物が集まり、
投票用紙に記載がされた。
党派心がさまざまに荒れ狂い、
陰謀が企てられた。

驢馬党は

年寄りの長耳たちに牛耳られた。

この連中は黒、赤、金の
記章を頭に飾っていた。

少数の馬党もいたが、
あえて投票しなかった。
激怒する年寄りの長耳たちの
喚き声が恐かったのだ。

それでも誰かが馬の立候補を
推薦したとき、年寄りの長耳が
悲鳴をあげて言葉をさえぎり
叫んだのだ。「この裏切り者め！

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

きさまは裏切者じゃ、きさまには
驢馬の血は一滴も流れていない。

きさまは驢馬じゃない、
ロマン系の牡馬がきさまを産んだのだろう。

おそらくきさまは縞馬の血を受けている、
毛並に縞馬の縞がある。

きさまの鼻声は

かなりのエジプトへブライ語訛りじゃ。

たとえきさまがよそ者でなくとも、
冷たい理性の驢馬でしかない。

きさまには驢馬の本性の深みがわからず、
その神秘的な詩篇の響きは耳に入らぬ。

だがわしはあの美しい恍惚のなかへ
魂をさまよわせる。

わしは驢馬じゃ、わしの尻尾の
すべての毛が驢馬なのじゃ。

わしはローマ崇拜者でも、奴隷でもない。

二九一 (二九二)

わしは先祖と同じく、
ドイツの驢馬じゃ。先祖は素朴で、
草食で、思慮深かった。

先祖は情事によっていかがわしい
悪徳の戯れに耽りはしなかった。
先祖は日々 元氣フリッシュ、敬虔フロム、明朗フレイリヒ、自由フライに
粉袋を水車小屋にせっせと運んだ。

先祖は死んでいない。墓のなかには
革の袋、魂の脱け殻だけがある。
先祖は天からわしらを見おろし
満足しておられる。

栄光輝く亡き驢馬たちよ！
わしらはいつもあなたがたと同じに、
義務の道から
一寸だにそれるつもりはない。

おオ驢馬であることの何たる喜ばしき！
そんな長耳族の子孫たる喜び！
わしは口をきわめて叫びたい、

わしは驢馬に生まれたのじゃ。

わしを産んでくれた大驢馬は
ドイツ種の大驢馬じゃ。

ドイツの驢馬の乳を
母は、おふくろはわしに吞ませてくれた。

わしは驢馬じゃ、それで忠実に、
わが先祖、先人のように、
古い大切な驢馬たちの心を
驢馬魂を守りつづけたい。

わしは驢馬じゃから、諸君に勧める、
国王に驢馬を選べ、と。
わしらはただ驢馬だけが命令する
大驢馬帝国を建設しよう。

わしらはみんな驢馬じゃ！ イー・アー！ イー・アー！
わしらは馬の奴隷じゃない、
馬は去れ！ 萬歳、ばんざい、
驢馬族の王様！」

愛国者はこう語った。

ホールでは驢馬たちが喝采を叫んだ。

かれらはみんな国粹的で

蹄を踏み鳴らした。

かれらは演説者の頭を

柏の葉の冠で飾った。

年寄りの長耳は黙って感謝し、

大喜びでその尻尾を振った。

パウロ教会の制憲議会の野垂れ死にのち、ハイネは『三月以後のミヒエル』*Michel nach dem März*で革命および憲法制定国民議会の嘆かわしい失敗の諸原因について最終的な判定をおこなった。かれは主張した、「高位の売国奴たち」に、しばらくの間希望を抱いた、と。革命の年に伝えられた、文書上のまた口頭での意見の表明には、もちろんこの主張を裏づける証拠はない。ハイネは「ドイツ人ミヒエル」の政治的な見識と能力への信頼を常に「幻想」とみなして、ベルリンおよびウィーンでの三月蜂起の知らせが届いたとき、すでにかれは「魔法革命」つまり「甘い童話の奇跡」^{メルヒエラ}についてこう語った。「ミヒエル」はそれゆえ自由を求めてはいなかった。なぜならミヒエルはブルシエンシャフトラーやドイツ心酔者たちの「腹黒い年寄りのやから」に服従

政治詩人ハイネ「新版」(V)・完(ヴァルター・グラープ)

していたのだから。そういう連中は、国民的な偉大と威信を政治的自由の獲得よりも高く評価することによって、社会的葛藤をほかして、権力を「三十四人の君主」の保護に委ねたのだ、と。ハイネは「黒赤金の旗」が目につくと、いつも「古代ゲルマンのガラクタ」を連想した。それはいつもブルシエンシャフトの国粹主義的な高慢をかれに思い起こさせたし、激烈な隠喩をもって(詩『ヴィツリプツリ』*Vitzliputzli*において)それらのドイツの色彩を猿の尻と比較した。

⁽⁵⁰⁾ おれを恐がるな、お猿さん！

おまえは好きだ、なぜならば

おまえは毛のないその尻に

おれの愛する色をもっている。

なつかしい色！ 黒赤金！

この猿の尻の色が

悲しく思い出させるは

バルバロッサの旗じるし。

これはドイツ心酔者たちの古めかしいバルバロッサ崇敬への当て擦り、ならびにパウロ教会内の左派への辛辣な嘲笑だった。かれら左派は黒赤金の旗のもとに集まったが、断乎たる転換への

二九三(二九三)

チャンスに気づかず、ドイツ連邦の三十八の国家を統一的な民主政体に変化させる能力のないことを実証した。

かくてハイネは、パウロ教会においておびただしい数の外交官、聖職者、法律家の代表者たちが時代遅れの諸権力を排除しなかつたことを、批判して、制憲議会の国家主義的右派に主な責任があるととした。かれは、すでに一八一三—一五年の解放戦争の間にゲルマン民族の大帝国の建国を要求していたエルンスト・モーリッツ・アルントやフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンのような政治的化石が、「かれらの墓穴から」起き上つてきたことを、嘲笑した。というのはかれらがプロイセンの「世襲皇帝党」に加盟していたのだから。

三月以後のミヒエル

ぼくの知っていたかぎり

ドイツのミヒエルはのらくら者だった。

三月にぼくは考えた、あの男は奮起して

これからはもつと分別ある行動をするものと。

ドイツのミヒエルは君主たちの前で

どんなに昂然とブロンドの頭をあげたことか！

どんなにかれは—許されないことだが—

高位の売国奴のことを語ったことか。

それはメールヒエン風の物語のように、

とても甘くぼくの耳に響いた、

ぼくは、若い愚か者のように、

心臓が再び高鳴るのを感じた。

だが古いドイツのガラクタの

黒い金の旗がまた現われたとき、

ぼくの幻想と

甘いメールヒエンの奇跡は消えた。

ぼくはこの旗の色と

それが示す前兆とを知っていた。

それらはドイツの自由の

最悪の凶報をもたらした。

すでにぼくは見たアルントを、^{フアイター}父ヤーンを、

むかしむかしの英雄たちが

墓穴から再び現われ出て近づいてき

皇帝のために戦っているのを。

多くの青年時代の

フルンゲンシャフト
学生組合のメンバーは、

みんな一緒に皇帝のために燃え立った、
かれらが酔っぱらったときに。

ぼくは見た、外交官や坊主の

腹黒い年寄りのやからが、

ローマ法の戦士どもが

統一神殿で働いているのを――

その間に辛抱づよく善良なミヒエルは

眠って鼾をかきはじめた、

そしてまた目覚めたとき

三十四人の君主の保護下にあった。

ハイネの嘲笑によって、フランクフルトのパウロ教会の政治的無能にたいするかれの憤りがかれにはまったく本気ではなかったと、思い込まされてはならない。革命の挫折ののちにかれはフアン・レーヴァルトとの会話でこう言った。議会の歴史は「見出だされる最もすばらしい題材だ。すべてが芸術作品として作られている如く、時と場所と愚かさの一致！ 何という見世物の動物がこのパウロ教会の議席に集まっていたことか！ ビュフォン

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

〔フランスの〕のような人が、かれらを描写するにはふさわしかった！ 何とそこにすべてのものが集まっていたことか、すべて化石のような有史以前のもの！ すべて古いガラクター！ そしてその首脳！ あア、その首脳！

とくにハイネはかつての若いドイツ派ハインリヒ・ラウベに腹を立てた。ラウベは三〇年代にはかれの政治的そして文学的な盟友だったが、一八四九年には第一回ドイツ議会について書いた本で革命の失敗の責任を左派になすりつけて、ガーゲルンの政策を正当化した。ハイネは、弟グスタフに打明けたところでは、ラウベが以前の「連帯的な生活の方向」から脱落し、「理性と真実への問題への裏切り」を犯したことを、「極めて悪意ある不誠実」とみなした。ラウベ自身に宛てた手紙のなかでハイネは自分の道徳的なひどい不満を歯に衣着せず述べた。ハイネはラウベに、かつて「革命的党派」の第一人者だったことを、思い出させた。そしてホメロスがアキレスの榮譽を歌ったと同じように、「貴族フォン・ガーゲルン」の称賛を賛嘆することが理解できぬとした。ラウベはガーゲルンを「とても好意的に描いた」と、かれは嘲笑した。「もし私が男色家だとすれば、この男が私の夫とならざるをえないほどに、そして私も同じようにかれ〔アキレスにたとえ〕のアキレスの尻にキスするであろうほどにである。母テティスがかれを三途の川に沐浴させたとき、かれの踵ではなく、頭を掴んだのは、遺憾なことだ。それゆえ頭がその貴人の傷つけることの

できる最も弱い部分となったのだ。」ラウベはかれの反駁において、性格上の欠陥と詩人の虚栄とをハイネに非難するより以上のことは思いつかなかつた。詩人は告白した、「政党用語」のこれら「特殊語法」にたいしとつくに無感覚になつてしまつたことを。ラウベはとても若返つたので、かれは「再び老ヤーンの弟子になつて」、「旧式の体操ズボンを穿い」たのだ、と。

けれども、かつての同盟者の政治的な馬鹿さ加減への嘲笑および勇敢で恐れを知らぬ民主主義者の不在の悲しみが、一八四八年革命についてのハイネの最後の言葉ではなかつた。革命の敗北にもかかわらずフェルディナント・マイヤーとの会話でかれは、別の戦士たちが挑戦に応じるであろう時代を予言した。この戦いの手本をかれはハンガリーの反乱に認めた。その反乱には数百名のドイツの革命家も武器を執つて参加したのである。プアルツおよびバーデンでの帝国憲法戦役の終結と共に、一八四九年夏ラシュエタット要塞が「榴散弾王子」後の皇帝ヴィルヘルム一世の軍隊に降服したとき、反動勢力が三十人の革命家の処刑と数百人の投獄とによつてその血腥い勝利を祝つたとき、それに全社会階層が参加したハンガリーの民族解放闘争は、ヨーロッパの自由の最後の砦だつた。民族の反乱を自力で制圧できなかったオーストリア政府は、ヨーロッパの反動勢力の番犬である、皇帝ツァーリスム専制ロシアに干渉を乞い求めた。ロシア皇帝ニコライは、神聖同盟の再興という使命を有するロシア軍隊の派遣と引き替えに、そのドナウ王

国からの領土の割譲あるいは敗政的賠償を要求することなく、たんに中欧におけるロシアのヘゲモニーの承認のみを求めた。「オーストリアのジブラルタル」として知られた「自由の最後の堡壘」、難攻不落のコモルン要塞は、ハンガリーの革命将軍ゲオルク・クラプカによつて、ハンガリー人の最終的敗北の六週間後、一八四九年十月五日に、名誉ある降服をした。翌日オーストリアの勝者らは十三人のハンガリーの政治家、将軍を絞首台で処刑した。

これらの諸事件の直後に書かれた詩『一八四九年十月に』Oktober 1849においてハイネは、ドイツの革命家たちの哀れな無能ぶりとハンガリーの自由の戦士たちの英雄的な破滅との間のコントラストが如何に強烈だつたかを示した。この詩は風刺詩であると同時に悲歌であつた、悲劇的英雄叙事詩であると同時に抒情的な自己表現でもあつた。

(55)
一八四九年十月に

強い風はおさまつた

そして故郷はまた静かになる。

大きな子供ゲルマーニアは

再びクリスマスツリーを喜んでゐる。

われわれは今家庭の幸福を楽しむ――

それ以上の誘惑は碌なことにならない—
以前に家の破風に巢をつくっていた
平和の燕が戻ってくる。

森と川は心地よく憩う、
やさしく月の光を浴びて。

ただ時おりパンという音—あれは射撃か？—
おそらく同志が射殺されたのだろう。

おそらく武器を手にした

頭の変な奴と出会ったのだろう

(いとも勇敢に逃走したフラックスほど
だれもが賢いわけではない)。

パンという音。あれは祭だろう、

ゲーテ記念祭の花火だ！—

墓から出てきたゾントーク嬢 〔女流歌手、この
年舞台上に復帰〕 を
打上花火の音が歓迎する—いつもの事だ。

リストも再び浮かび上がる、あのフランツめ、

奴は生きている、ハンガリーの戦場で

朱に染まって倒れていやしない。

政治詩人ハイネ 〔新版〕 (V)・完 (ヴァルター・グラープ)

ロシア人もクロアチア人も奴を殺しはしなかった。

自由の最後の砦が陥落した、

ハンガリーは血を流して死ぬ—

けれども騎士フランツは傷一つ負わなかった。

かれのサーベルも—戸棚のなかにある。

やつフランツめは生きている、年老いたら

ハンガリー戦争の功名を

孫たちにかこまれて語るだろう—

「わしはこう構えて、こう剣を振るったのじゃ！」

わたしはハンガリーの名を聞くと、

ドイツの胴着が窮屈に感じられる、

その下で胸が海のように波立ち、

ラッパの音がわたしに挨拶を送るかのようだ！

またもわたしの心のなかにガチャリと音をたてる

とつくに消え失せた英雄伝説、

苛烈な激戦の歌—

ニーベルンゲン族の滅亡の歌が。

それは同じ英雄の運命、
同じにしえの物語、

名前だけが変っていても、

いずれも同じ「ほまれの英雄」。

それもまた同じ運命だ―

いかに意気高く自由に旗はひるがえつても、

英雄は、古来のならわしによつて、

犇猛な力に屈せざるをえない。

そして今度は牡牛の奴が

熊どもと同盟した―

マジヤール人よ、きみは戦死する、だが安んじよ、

われわれ他国民はもつとひどい汚辱にまみれた。

きみを律儀にやつつけたのは、

とにかくまともな獣らだ、

けれどもわれわれは狼や豚や駄犬めらの

枷にかけられてしまった。

喚くわ吼えるわ唸るわ―わたしはほとんど

勝った者からの悪臭に耐え得ない。

シツ静かに、詩人よ、からだにさわる―

きみは病気だ、黙った方が賢明だろう。

最初の数節で詩人は、十字架と帝冠の方へ這って行ったドイツのプチブル的俗物の心的態度メンタリテイに身を置いて、かれらのロマン主義化する調べという嘘つきの牧歌の正体を、イローニッシュユにかれらの言葉の選択法を用いてかれらの用語の規則に合わせることによつて、暴露した。悪夢のような革命の嵐のあとでうわべは再び平穩が戻つたように見える、すべてがなじみの状態に復している、すべてが「古い繰り返しの曲」を聞く。クリスマスツリーを楽しむもうとしている「大きな子供、ゲルマーニア」は快適な気分だ。現存する当局にたいして武器を執る者は、分別の足りない「頭の変な奴」にちがいない。

しかしその居心地のよさは見せかけだ。復興された見せかけの生活の背後から暴力と弾圧が窺っている。漫画化されたビーダーマイヤーの世界が処刑命令での射撃によつて寸断される。プチブル根性の「家庭の幸福」の裏側は敗北した自由の戦士たちの軍事即決裁判によつての銃殺刑である。それら戦士はラシユタット要塞に避難の場を求めたが、降服せざるをえなかった。ハイネはこれら殉難者と犠牲いけにえをわが友と呼んでいる。その反対に辛辣な当て擦りがゲオルク・ヘルヴェーク(その名は今回は挙げられていない)を打つ、ヘルヴェークは戦場を捨てて、逃亡したのだからだ。

詩『ジムプリツイシムス一世』においてと同じようにかねはヘルヴェークをローマの詩人ホラチウスと比較している。ホラチウスはフィリッピーの戦いから(紀元前四二年)逃亡し、「勇敢に逃走した」。

革命的民主主義者らの処刑のさいの射撃の爆発音はプチブルの俗物たちにとっては、一八四九年八月のゲーテ生誕百年の記念祭で打ち上げられた花火にすぎないように思える。老いた女流歌手ヘンリエッテ・ゾンタクーベルリンっ子らによって「聖エッテ」としてほとんど崇拜に近く称賛された―のカムバックにもなう打上げ花火の爆発音は、革命の終りを喜ぶものと解釈されるし、あるいは包囲されたラシュタット要塞にプロイセン軍が撃ち込んだ焼夷火矢の轟音とも解釈される。

反革命がその勝利を楽しくたつぷりと味わっているドイツの、対の一方が、ハンガリー民族の国民的解放闘争である。ツァーの軍隊はよるその鎮圧はヨーロッパの革命の敗北を確定した。ドイツの俗物根性に嘲笑と反語の念しか抱いていなかった詩人が、失敗した革命後のドイツの憐れむべき日常をハンガリー人の蜂起の戦場と対照することによって、ハンガリー人の英雄的な自由闘争を、情熱を籠めて造形したのである。

しかしハイネは、ハンガリー人の民族蜂起への称賛の歌を唄い出す前に、ブルゲンラント(西ハンガリー)生まれの有名なピアニスト、楽長そして作曲家フランツ・リストを笑いのにした。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

ハイネはリストと一八三二年伯爵夫人マリー・ダグ、クリスチーナ・ベルジョイオソおよび女流作家ヨルジュ・サンドのサロンで知り合っていて、『フローレンスの夜』でかれのために文学的記念碑を樹ててやっていた。『フランスの舞台について』というかれの書簡集が一八三七年に出版され、そのなかでかれはリストを「ひねくれているが高貴な性格の人、利己的でなく素直だ」と呼んだ。後にその友情は冷えてしまつて、一八四四年にはハイネはその「音楽の奇跡のドクター」を、よみがえつた「ハーメルンの鼠取り男」、「巨人のようなこびと」そして「ハンガリーの名譽のサーベルをもつ怒れるローラン」と呼んだ。リストが一八三九年に輝かしい巡業中ブダペストでの歓迎祝典のさい進物として貰つた、この貴重なサーベルは、ハイネの詩のなかでイローニッシュに、その音楽家がそれを携えてハンガリーの自由戦争に参加しようとした武器として、説明されている。じじつリストは、間もなくかれの同胞の仲間に加わることを声明し、ハンガリーの反乱者たちのために幾度か慈善音楽会を開催したが、ヴァイマルの宮廷楽長という結構な地位を棄てることなく、ハンガリー人が政治的な自己決定と民主主義を求めて闘つていた間、家に留まつていた。オーストリアの貴族に列せられることを希う、リストの無駄な努力を、「騎士フランツ」の称号をかれに与えることによって、ハイネは嘲笑した。リストの言行の不一致を詩人は、軽薄漢にして大法螺吹きの方ルスタフ(シエイクスピアの『ヘンリ四世』

中)名セリフをリストに言わせることによって、批判した。

リストが「ハンガリーの戦場に朱に染まって」倒れて「いやしない」という詩の章句は、恐らく省略の手法を用いてあの天才的なハンガリーの詩人サンドール・ペテーフイに関係づけられていよう。ペテーフイはハンガリーの反乱に参加して戦い、(ジーベンビュルゲン内の)シユースブルク近郊の戦闘でベム將軍の副官として一八四九年七月三一日戦死した。ハイネはペテーフイの詩をドイツ系ハンガリー人のカール・マリーア・ケルトウベニイの翻訳で読んでいた。自らがペテーフイの知人であるケルトウベニイはその翻訳をハイネに献呈して、病床のハイネを訪問した。詩人はペテーフイの詩に感激して次のように述べた、自分はその「自然の音声」の豊かさのためにハンガリー人が羨ましい。「病的な反省癖」にみちた世代の内部ではペテーフイは驚くほど健全で独創的だと思われる。ペテーフイの詩は「サーベルのチャリンという音」と「ラツパの響き」が主題だった。ペテーフイは「戦野」での死を望んで次のように書いた。「そこに私の若々しい血がわが心臓から注がれた。」これらの言葉が少し変えられ、詩的に変容させられて、ハイネの詩のなかへ流れ込んだ。かれはペテーフイを、その民族と一致して生き、その敗北と共に滅ぶ、真の現代の英雄とみなした。かれが負け戦でヘルヴェークのように逃亡するとか、自己の民族の蜂起にリストのように全然かわらないというようなことは、まったく考えられない。

すぐ続く数節はハンガリー人の自由戦争の雅歌である。詩人が英雄として歌で称えたのは—この英雄という言葉は四度出てくる—勝者ではなく、敗れた者たちである。もちろんかれは、正義がすでに該当者の生きている間に実現するだろうとは、信じなかった。歴史的に回顧してはじめて、判断が修正されう。ハイネは『ロマンツェーロ』の極めて一風変わった題材のなかで、このことの現代との関連を明らかにした。かれは『ヴィツリプツリ』Vizlipuzliのなかでスペイン人ではなく、アステカ人を、『ムーア人の王様』Mohrenk6nigでは勝ち誇るキリスト教徒の君主フェルディナントではなく、打負かされたムーア人の王ポアブディル・フォン・グラナダを称えて歌った。

⁽⁵⁸⁾ ただ凱旋將軍ばかりではなく、

また盲目の女神の

勝ち誇った寵児ばかりではなく、

血塗れの不運の息子も、

さらに、武運つたなく斃れた

雄々しい戦士も

人間の記憶のなかに

永遠に生き残るだろう。

ハンガリー人をハイネは英雄とみなした。ドイツの俗物たちおよびパウロ教会の多数派というかれらの政治的な代表者たちと対照的に、ハンガリー人たちは体制側権力に屈することなく、新しく獲得された自由を守るために、勇敢に武器を執ったからだ。コシユートのような戦闘的な人民の指導者、クロプコのようなエネルギッシュで天分ある将軍、ペターフィのような熱烈な革命詩人を生み出したハンガリー人は、じじつ「牡牛」つまりオーストリアの反動主義者たちに、また「熊」つまりツァーの軍隊に敗北しはしたが、かれらの滅亡はドイツの「もつとひどい屈辱」と同じではなかった。ドイツではフランツ・リストとその徒党が文化の領域で、またカール・ハイネとその同類が経済界で音頭を取っていたし、またそこでは屈服した民主主義者らが吼えただけの狼や、ブーラー唸る豚や吠えかかる犬どもに屈従していたのである。「勝ち誇った者らの」耐え難い「悪臭」は、『ドイツ 冬のメールヒェン』でハンモニアが詩人にドイツの未来を覗き見させた、椅子型便器を思い出させる。けれどもそこではまだそれは、ドイツ連邦の「三十六の糞壺」を清掃するときに臭った「糞尿」の臭気だったが、ここでは革命の敵方の悪臭は気が遠くなるほどだ。

ハンガリー人の英雄的に勇敢な敗北はハイネの詩では、これもまたハンガリーの大地上で演じられたことだった、ニーベルンゲン族の滅亡に等しかった。「同じほまれ英雄」にかかわっている『ニーベルンゲンの歌』Nibelungenliedからの文字通りの引用

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

は、宿命的に同一の構造を示している。この合致によって詩人はハンガリーの敗北に、歴史的かつ神話的な伝承にもとづく暗鬱でいわば法則通りの必然性の性格を与えた。詩人は、ニーベルンゲンの歌について述べただけでなく、形式的にもそれを模倣することを通して、特別の技法を使用した。というのはニーベルンゲン詩節においてと同じようにその詩の各節の最後の行は、他のところより多い数の詩脚をもっているのだから。

ハイネは、かれが革命の戦いと敗北とをそれによって時代全体の象徴へと拡大したその詩『一八四九年十月に』を、第一級の政治的意思の表明とみなした。というのはその詩はかれの揺るぎない急進民主主義的な姿勢を、反革命的な勝利の徴候のもとにおいても決定的に証明したのだから。かれのハンブルクの出版業者にかれはこう願った、「⁶⁰どうかそれを貴地において私の名前を付して印刷してください、読者に届くように、パンフレットとしてか、雑誌に掲載して。つまり当地では若干の不正確な複写の形で出回っているの、われわれはどんな不正出版をも出し抜かねばなりません。その上これは現下の気分を表現している、真の時事詩なのです。(…)それゆえにこれは言葉の真の意味で、韻文で書かれた私の生命の血です。」—このような言葉をハイネはかれの政治詩の他のいかなるもののためにも選んだことはない。けれどもカムペはこの願いに反応しなかった。そしてその詩はほとんど一年の間ほっておかれた。ハイネはその原稿を若い友人、

つまりしばしばかれを訪ねて来ていた、ドイツ系ベーメン人の文筆家アルフレート・マイスナーに渡した。マイスナーはそれをジャーナリスト アードルフ・コラチュクが、シュトゥットガルトで発行されていた、自分の民主主義的な「政治、学術、芸術および生活のための月刊誌」上で複製するままにさせた。それは(第62)四節を省略して) 同誌の五〇年九月号に掲載された。パウロ教会の議員であり、そこでオーストリアのテシエン選挙区を代表していたコラチュクは、一八五〇年十一月二四日チューリヒからハイネに当て書いた。わたしは(第63)「どんな影響をその詩が祖国のすべての地域に及ぼしたか、またどんなに深くその詩人への古い愛情と友情のすべての糸がそれによってよみがえらされたか、述べることが」できないほどです。それは「電撃によって全新聞雑誌を刺激して、その作者のために働き出させ」ました。コラチュクはハイネの詩稿のなかからさらに他の詩を求めて、あなたがわたしに「書写して送ってください」ろうとする「すべて」を「とても喜び至極乗り気で」受け容れることをハイネに約束した。しかしながら一八五一年半ばにかれの雑誌は、検閲当局の圧迫の結果刊行を停止せざるをえなかったため、ハイネのペンによるものはこれの他には掲載されなかった。

コラチュクはその詩を『ハインリヒ・ハイネ作ドイツ 一八四九年十月に』という標題で公表した。これには『ドイツ 冬のメルヒエン』を連想させようという意図があったのだろう。実を言

うとハイネ自身も、『冬のメルヒエン』のフランス語訳を内容とする、一八五五年刊行の *Poème et légendes* 『詩ト伝説』において、その詩『一八四九年十月に』のフランス語訳を、末尾の章、棹尾の締め括りとして収録したのである。

注

- (1) J・カムベ宛一八四六年九月一日付手紙、H三巻八二ページ。
- (2) 続く四カ所の引用とも、一八四八年三月三日の報告、B五巻二〇八ページ。
- (3) 一八四八年三月三〇日付手紙、H三巻一三二ページ。
- (4) B五巻二一四ページ。
- (5) 次の引用とも、五巻二二五ページ。
- (6) B五巻二一〇ページ。
- (7) 一八四八年三月二〇日付手紙、H三巻一三二ページ。
- (8) B五巻二一四ページ。
- (9) B五月一九八ページ。
- (10) W二巻一一一ページ。
- (11) マクシミリアン・ハイネ宛一八四八年九月十一日付手紙、H三巻一五八ページ。
- (12) B四巻四八八ページ。参照、注釈B四巻九八三ページ。>>Sibirren<<はイタリアの準軍隊的な警官隊の名称。
- (13) ヒルト『冬のメルヒエン』のファクシミリ版による。参照B四巻六四〇ページ。
- (14) B四巻四八八および次ページ。
- (15) マルクス／エンゲルス全集、八巻一一五ページ。
- (16) 続く二カ所の引用とも、A・マイスナー宛一八四八年四月十二日付手紙、H三巻一三三ページ。

- (17) ヘルマン・ヴェネダイ、五六ページ。
- (18) J・カムペ宛一八四八年七月九日付手紙、H三卷一五一ページ。
- (19) 母宛一八四八年六月二六日付手紙、H三卷一三一ページ。
- (20) ジャン・ジャック・デュボシユ宛一八四八年八月二九日付手紙、原文フランス語、H三卷一五二ページ、ドイツ語訳、B五卷八〇四ページ。
- (21) F・マイヤーのハイネとの対話の報告、W二卷一三四―一三九ページ。
- (22) B二卷五二四ページ。
- (23) B二卷五九八ページ。
- (24) B三卷、二〇七ページ。
- (25) B六I卷二八〇ページ以下。長すぎるその詩の最初の十二節と最終節は省略。
- (26) J・カムペ宛一八五四年四月十四日付手紙、H三卷五〇五ページ。
- (27) クリスチアン・シャート宛一八五五年六月二日付手紙、H三卷四七五ページ。
- (28) B六I卷二七二ページ。
- (29) B六I卷二五ページ以下。参照、バイヤーデルファー、キユンツェル、ヒンデラー、スペンサーおよびヴェルナーによる諸注釈。
- (30) B四卷五八ページ。
- (31) B三卷六三九ページ。
- (32) B六I卷二六一―二八ページ。参照、ボーディ：Kopfos およびキユンツェルの注釈。
- (33) B二卷四八八ページ。
- (34) 続く引用とも、フィンガーフート・ハイネ・ドイツ冬のメーレンヒエン、七七ページによる。
- (35) B五卷八六一ページ。
- (36) B六I卷三三五ページ以下。詩の最初の十三節は省略。参照、メ

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

- ンデ・ハイネとヴェネダイ、八三一―八六ページおよび Andre.
- (37) 完全な復刻はB六II卷五八四―五八七ページ。
- (38) B六II卷五八五ページ。
- (39) W二卷三六四ページ。
- (40) B五卷八六一ページ。
- (41) B五卷一七七ページ、前の引用も同じ。
- (42) 次の引用とも、H・ラウベ宛一八五〇年十月十二日付手紙、H三卷二三〇ページ。
- (43) 参照、H・P・バイヤーデルファー：四八年における君侯称賛。
- (44) B六I卷二二八―二三〇ページ。
- (45) B六I卷二三〇ページ以下。参照、H・カウフマン：精神的発展、二二八ページの分析。
- (46) 続く引用とも、参照、W・グラープ/U・フリーゼル：まだドイツは亡びていない、二一八ページ。
- (47) B五卷一〇〇ページ。
- (48) B六I卷二八六―二八八ページ。
- (49) B六I卷二七〇ページ以下。
- (50) B六I卷五八ページ。
- (51) ハイネ回想、アードルフ・シュタール稿、W二卷一九四―一九八(一九六)ページ。
- (52) グスタフ・ハイネ宛一八五〇年十一月十五日付手紙、H三卷二四一ページ。
- (53) 続く引用とも、H・ラウベ宛一八五〇年十月十二日付手紙、H三卷二九九ページ以下。
- (54) H・ラウベ宛一八五〇年十一月三日付手紙、H三卷二四五ページ。
- (55) B六I卷一六〇―一八八ページ。参照、H・カウフマンおよびM・ヴェルナーの分析。

- (56) 続く引用とも、B五卷五三二ページ。
 (57) ジョルジイ・ヴァユダ・ハイネとペテーフイ、四二九ページより引用。
 (58) B六I卷四六六ページ。
 (59) S・プラヴァ・ハイネ悲劇的風刺家、一七五ページ。
 (60) J・カムベ宛一四九年十一月十六日付手紙、H三卷一八九ページおよびBII卷五七七ページ。
 (61) 詳細はW・グラープ・ゲオルクビュヒナーと一八四八年革命、三七四九ページ。
 (62) ドイツチエ・モナートシュリフト、第六冊、一八五〇年九月、四七二―四七四ページ。
 (63) コラチェクからハイネ宛一八五〇年十一月二四日手紙、HSA二六卷二六七七ページ。
 (64) B四卷一〇四五ページ。

共産主義の放浪鼠らと資本主義的利欲の絞ども

三十年代にハイネは保守的な「歴史学派の哲人たち」に強く反論した。そのなかでもとりわけかれが言及したのはレオポルト・ランケだったが、ランケらの見解は次のようなものだった。つまり太陽のもとには新しいことは何一つなく、政治的熱狂など何の役にも立たぬ、すべての自由の闘争はたんに新しい暴君どもの出現を促したにすぎないのだから。ヘーゲルの思想に負うところの、低次元から高次元への発展段階の順序という観念から出発して、ハイネは、人類は黄金時代に向かって歩いてゆく、「硬化する死

にたいし、過去にたいし」生きることを主張する必要がある、「こ
 うした力の發揮こそが革命なのだ。」と信じた。かれは、「歴史家
 や詩人たちの空想」も生きてたらふく食う人民の利益を擁護する、
 自分のエネルギーを麻痺させはしない、と誓約した。

このような社会的アンガージュマン、少数者の専横と多数の者
 の奴隷状態にたいするこころした憤りは、一八四八年の革命の敗北
 にもかかわらず、かれの心内に持続した。かれは現存する不正の
 体制の弁明者となりおうせることはなかった。かれ自身の肉体的
 崩壊と革命家たちの政治的希望の挫折との間には特有の類似が存
 在した。ハイネの個人的な不幸が、それぞれの民族的かつ社会的
 自由を求める闘いで敗北した諸民族の破局と溶け合ったのである。
 半ば反語的に半ば真剣に詩人は、自己の苦悩は自らの政治的認
 識と啓蒙思想的目標に起因するとした。「私は本当にプロメテウ
 スのような苦痛を耐え忍んでいます。私が二、三個の夜の小さな
 ランプを、わずかばかりの小さな光を、人間たちに分かち与えた
 がゆえに、私を恨んでいる神々の復讐心によって」こうかれはか
 れの出版書店主に書き送った。

かれの肉体的な麻痺ならびにドイツの民主主義と進歩との政治
 的な麻痺が、四〇年代の反動期に、かれが自らのために要求した、
 人民の「代弁者」の職務を引き受けることを、かれに妨げた。し
 かし病気にもかかわらずかれの「精神は」その褥の墓穴にいと
 きほど、「活発で活動的で矍鑠たることはなかつた」たし、社会問

題が臨終のきわまでかれに熾烈な興味を失わせることがなかった。

ハイネは二月革命のブルジョアの共和主義とはひどく懐疑的に対立していたのだが、ルイ・ボナパルトの大統領選出を歓迎し、「私のような古いボナパルチストでも、ナポレオン万歳が叫ばれるのを聞くと、ひよっとすると満足させられるかもしれない！」と、一八四九年四月に述べた。こうしてかれは、ブルジョアジーによって指導者に祭りあげられた「屈強な男」の、所有者たちのためにいきり立つプロレタリアートを押え込み、安寧と秩序のため、つまり利益を最大限にするために配慮する、その職分に、なんらの異議も唱えなかった。「大統領のために私は懸命に、だがたんに皇帝の甥という理由でだけではなく、立派な男でもあるという理由と、かれの名前の権威を通じて、これ以上に大きな災厄を防いだのだ。」もちろん間もなくかれは、「多数でなく、権威が」決定を下さねばならぬというボナパルト主義のスローガンが、啓蒙主義の重要な要請だった個人々の自己責任を排除したことを、認識せざるをえなかった。ルイ・ボナパルトが一八五一年十二月にかれの「驢馬の毛皮」をかなぐり棄てクーデターにより自ら皇帝を宣言したとき、ハイネの心臓は血を流した。「私の古いボナパルト主義では、あの事件の結果を展望したときに私を圧倒した苦惱に反論するにはおぼつかない」、こうかれは友人で「アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング」紙の編集者グスタフ・コルプに告白した。「政治的な道徳、合法性、市民の美德、自由

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

そして平等という美しい諸理想、それらは十八世紀の薔薇色の曙の夢であり、それらの夢のためにわれわれの父祖は英雄的に敢然と死地に赴いたし、かれらの後からわれわれは少からず殉教を願ってそれらの夢を夢みているのだが―そこにそれらの諸理念が、陶器の急須のかけらのように、射ち殺されたつまらぬ獲物のように、打ち砕かれて、いまわれわれの足もとに横たわっている。」

第二帝政において指導的役割を果している金権政治にたいして、政治権力への関与から閉め出され、経済的に搾取され、社会的に貧困化された労働者階級が対立した。当然ハイネは労働者階級をフランスの革命的伝統の後継者とみなした。かれはすでに一八四〇年〔原文の四四四は誤り〕年一月から一八四三年七月まで「アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング」紙のために執筆した論説で、フランスの社会運動に極めて大きな注意を向けていた。「破壊的な教義がフランスの下層階級を余りにもしつかりと捉えてしまった―問題はもはや権利の平等ではなく、この地上での享樂の平等なのだ、そしてかれらの粗野な頭のなかで孵化する、あの絶対的平等の理念を実現するために、ひたすら合言葉を待っている、およそ四十万の粗暴な拳がパリにはある。」この平等を求めるスローガンは共産主義者たち、つまり保護されず廃嫡され、「その不幸がその狂気と同じくひどい、最も若く最も死に物狂いの革命の子供たち」によって流布された。

一八五四年にハイネは十年以上前に書いた論説を一冊の本にま

とめ、『ルテーチア』Luteziaという題名をつけた。それをかれは、「ドイツにおける政治生活を目覚めさせる者たちのための精神的な宝」とした。かれは、共産主義の「同じ髪型に刈られ、同じように喚き声をあげる人間の群れが」近づいて来るのを予感してあからさまな不快の念を抱いたにもかかわらず、平民が同じように物質的な要求をするのに憤慨する飽食した富裕なブルジョアジーを嘲笑した。ハイネは、ブルジョアの本性は非道徳的で反文化的だと申し立てられた、プロレタリアの本性は非道徳的で反文化的だという主張が偽りであると、確信していた。労働大衆の悪意は生まれつきの特性ではなく、困窮と悲惨の結果にすぎないのだ、と。衝撃的な社会的物語詩『歎きの谷』Jammerthalは、飢え死にしつつある夫婦の悲惨と愛の憧れとの物語であって、社会の不正にたいする告発である。「哀れた人々」を殺す酷寒は、現実的(レアル)だけでなく隠喩の意味をもち、ブルジョア社会の冷酷と疎外を暗示している。そのブルジョア社会は相続財産ももたず恵まれない人たちの運命とは何の関係もない。医師は平然と「胃袋が空っぽな」と「両者の「屍体の死」の原因だと断言し、温かさ「健康によい食餌」があつたらかれらは生きながらえたるうにと、ありきたりでしかも冷笑的に述べる。

歎きの谷

夜風が天窓からピューピュー吹き込む、
屋根裏部屋のベッドに
可哀相なふたりが横たわっている。
いる蒼ざめて瘦せた顔つき。

可哀相なひとりが言う、
しっかりとわたしを抱いて、
わたしに口づけを、
あなたの中からで温まりたい。

可哀相なもうひとりが言う、
あなたの眼を見ると、
不幸も飢えも寒さも
この世のすべての苦しみが消え失せる。

ふたりは幾度も接吻し、もつと多く泣いた、
溜息をつきながら手を握り合い、
時には笑い、歌いさえした。

あくる朝警部が来た、
立派な検察医もいつしよに、
検察医はふたりの屍しかばねが

死んでいるのを確認した。

厳しい天候が、と検察医は説明した、

胃袋が空っぽなのと重なって、

ふたりの死をひきおこした、

少なくとも死を早めた。

検察医はつけ加えて言った、

厳寒ともなればぜびとも

毛布による防護が必要だ。

同時に健康によい食餌を取るように強調した。

ハイネはその社会批判的な物語詩『^{ブラッド}奴隷船』Das Sklavenschiffにおいて資本主義的市場経済の非人間性を暴露した。ここではすべての精神のおよび物質的な価値が利己的な視点から見られ、人間が商品へと貶められる。奴隷船の政治的な寓意^{アレゴリー}をハイネはすでにかれの『^{ミュンヘン}ミュンヘンからゼノヴァへの旅』(一八二九年)で使用していた。そこでかれは、オーストリアの皇帝によってナポレオンにたいする反乱へと鼓舞されて、皇帝が約束を守ってくれ^レることを無益に期待したチロルの人民について語っていた。

「^{哀れ}哀れな道化たちよ、元気を出せ！ 君らだけがなにかを約束された人たちではないのだ、大きな奴隷船でしばしばこんなこと

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

も起こっているのだから。大時化に遭い船が難破しそうになると人々は、船底の暗い船倉に詰め込まれて横たわっている黒い人々を頼みの綱とする。そのときかれらの鉄鎖を外し、おまえらの働きによって船が助ければ、自由にしてやる、といとも厳粛に約束する。愚かな黒人たちは歓呼して日の光目ざして上へと。万歳！かれらはポンプへと走り、力の限りドスンと足踏みし、ただ助けが求められるところで手助けし、よじ登り、跳び、マストを切り詰め、ロープを巻き、要するに危険がすぎ去るまで働く。それから自明の通りまたも船倉に引きずりおろされ、再び唯々諾々と鎖につながれる。そうしてかれらには暗い悲惨のなかで奴隷商人らの約束について^{デモゴグ}扇民家なみの考察をする〔…〕」

この『旅の絵』の別の―後に抹消された―一章ではハイネの批判はプロイセン国王に向けられていた。プロイセン王は、「解放戦争」の間はかれの臣下らに厳粛に憲法の約束をしていたが、ナポレオンに勝利したのちはその約束を守らなかったのだから。ハイネがプロイセンの国民を奴隷と比較したのは、かれらが報酬も補償もなしで戦って、王から騙されたからである。

「^私私は奴隷船を知っている。その船は、もし哀れな黒人たちが手を貸さなかったら、一人残らず溺死してしまっただろう。危機が過ぎ去ったときには、もはや約束された自由は問題にならず、唯一の心配は、奴隷を幾人かより多く売買することにだけ向けられていた。」

ハイネは一八五三年に制作したかれのバラードの題材を、フランスの詩人ジャン・ピエール・ド・ベランジェが三十年前に書いた詩『黒人と操り人形たち』から取った。その詩はアーデルベルト・フォン・シャミッソーによってドイツ語に翻訳されていた。ベランジェの詩の第一節は次のようだった。

Sur son navire un capitaine

Transportait des noirs au marché.

L'ennui les tuait par vintaine:

Peste! dit-il; quel débouché!

Fil que c'est laid, sots que vous êtes!

Mais j'ai de quoi vous guérir tous.

Venez voir mes marionettes;

Bons esclaves, amusez vous.

シャミッソーはこの詩節を次の詩行に翻訳した。

黒人⁽¹⁴⁾たちは悲歎にくれて船上で

幾ダースも死んだ、

死んだ、死んだ、そして

大商人の航海全体を台無しにした。

「なんだって! 商品は救わねばならん!

よしおまえらの鎖を忘れろ、
おれの操り人形たち立ち上がれ、
立派な奴隷ども、楽しくやれ!

ベランジェの詩では、黒人たちが自分らの捕囚の身を絶望してアフリカからアメリカへの移送中に鬱症状に陥り、拒食して大量に死んでゆくことを、経験から奴隷商人は知っている。この致命的な抑鬱症を防止するために、商人は僱傭の王、道化、憲兵そして黒い悪魔という四個の木製の操り人形を携えていた。黒人奴隷たちは「その芝居によって惑わされ」、かれらの苦悩を忘れる。悪魔が頭に一撃をくらわせて警官を打ち倒すと、かれらは歓呼する。「一人の黒人がすべての者のために勝利した!」そして勝ち誇ってパチパチ拍手する。「鎖のガチャガチャ鳴っている英雄たちが、歓声をあげ、叫び、狂喜し、どよめく。」

奴隷貿易⁽¹⁵⁾には、ヨーロッパおよび新世界の膨張する経済の三つの問題を解決する働きがあった。奴隷貿易はアメリカの白人の大農場主と大地主に安価な労働力を供給し、西欧の各首都に熱帯の物産をみちぎれさせ、ヨーロッパの工場^{マニファクチュア}場に新しい販売市場を開拓した。海外の砂糖黍および棉花農園所有者らは、奴隷船の船主たち、工場主たちそして西アフリカ海岸の奴隷狩りに関与した首長たちと全く同様に、生きている人肉の取引きによって利益を得た。捕らえられてふたりひと組に縛り合わされた黒人たちは

―男女別々―幾段もの下層船室によって水平に仕切られた、低い船倉にぎゅうぎゅう詰めされた。大西洋上を渡る「キリスト教的奴隷船」の航海は四ないし八週間かかった。捕らえられた者の三分の一の死亡件数が覚悟されていた。奴隷貿易は往々にして、とりわけ「ネグロ昏睡熱」と呼ばれ、蔓延し恐れられたアフリカの嗜眠病のように―悪疫が発生したときには、取引きが急激に損害をこうむった。生きてゐる者が知らぬ間に死んでいた者と鎖でつながれたままのことも時々あった。病人たちは、それ以上の傳染を防ぐために、あつさり海中に投げこまれた。すでに一八一五年にウィーン会議がすべての強国に奴隷制度と奴隷売買の廃止を求めたし、英国議会は一八三三年に奴隷解放法を布告していたにもかかわらず、なおも四十年間およそ六万人の黒人が毎年アフリカからアメリカへと連れてゆかれた。一八五四年、つまりその詩の成立時に、フランス元老院は、奴隷制度がフランスの各植民地において復元されてはならないと、宣言した。

奴隷船上の出来事についてのかれの平然として冷静な報告においてハイネはそつけない記録者のよそよそしい態度をとつて、関係者たちの考え方・話し方を論評しなかつた。この美学的な異化は読者に、資本活用の商業的利益がただたんに個人的な利得に役立っていただけでなく、非人間性と犯罪へいたりうることを、認識させるであろう。かれの「メネール・ヴァン・ケーク」がオランダ人であるのは、オランダの豊かさが十七世紀以来大部分奴隷

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

貿易という実入りのいい商売に基づいていたのだし、ハイネはそのことを通じて感情を伴わず計算し利益のみを追求する男の像を、鋭く描き出そうとしたからである。その独立した商人の唯一の關心は、最高の儲けを狙うことにあるに違いない。かれは「二束三文で」ガラス玉や火酒との交換で手に入れた黒奴たちの人間の尊厳を尊重しようとする気もないし、できもしない。かれにとって黒奴たちは生きてゐる商品にすぎず、それは、輸送された人肉の取引きで儲かるために、定めの場合に良好な状態で到着しなければならぬのである。

せめて黒奴の半分が輸送に生き残りさえすれば、その「黒い商品」は、金、象牙、ゴムそして胡椒よりも大きな利益を生んだ。奴隷の買い手たち、つまり大規模農園所有者たちにとって奴隷たちの労働力がコーヒーや綿花の生産に不可欠だったので、かれらはそれらの商人たちに大きな売買差益を容認することを覚悟していたのである。ハイネが貪欲な資本家の典型として描いているメネール・ヴァン・ケークにとつて、手足の運動をしたり音楽を聴いたりする必要のような、人間の自然的な欲求は、利益の最大限の追求のための手段にすぎない。それゆえ、黒い商品を今にも台無しにししようとする致命的な鬱病を、ダンス療法によって治癒させるといふ、船医の提案は直ちに納得がゆく。自分の船医は「アリストテレスのように賢明」だと、船長が言うのは偶然でない。そのギリシアの哲人はかれの国家理論のなかで奴隷制度を正当化

していたのだから。踊っている「黒い罪びとたち」を理性のない動物たちと比較して、かれらを「キリストのために」生き長らえさせて下さいと神に祈願する、その奴隷貿易商人は、宗教的なうわべの偽りによって己れの情容赦ない利己主義を隠蔽している。市場経済組織の利益への関心が、道徳および人間性のすべての要請よりも優先させられ、芸術ならびに宗教をも歪曲するのである。あくびをしながらじっと見つめる鯨どもをほとんど愛情深く自分の「居候」と呼ぶ、その骨と皮ばかりの瘦せつぼちで鼻いちめんに疣のある「船医」を描き出すことによって、詩人は最高の異化と非人間化の叙述に成功した。黒人らは「自らの罪によって」死んだのだと主張し、かれらの屍体を厳密に検査して「損害をすぐに帳簿」に書き込む、おどけて無気味な船医の官僚主義的な非情さは、詩『歎きの谷』における檢察医の冷笑主義を思い出させる。エロチックなさまがなわけではない黒奴のダンスは、鯨どもの餌食のダンスと対幅をなす。そのわけはかれらの人間性を奪われて狭い船倉にぎゅうぎゅう詰めされた黒人たちが無為の抑鬱のなかで病み衰えて死んでゆくかぎり、鯨どもは船のまわりでおどけてはしゃぎまわるのだから。しかし黒人たちが甲板上でますます狂ったように「大喜びで跳びあがり、駆けめぐ」れば、それだけますます「海の世界の怪物」は我慢できずに憂鬱になり、自分の尻尾に食いつくのだ。鞭打ちによって強制された奴隷のダンスの寓喩は、無産者や被搾取者たちの市場経済体制内での逃げ場の

なさを暗示している。そしてその体制はすべての物質的および精神的価値を資本の増大に従属させるのだ。なぜなら鎖につながれ—そしてそれゆえ気絶した—奴隷たちは残酷で野蛮な資本主義的利欲の鯨ども、つまり屍体を飢渴してかれらの「朝食」を待ちうけている、自然によってつくり出された鯨どもの前に、むさぼり食うようにと投げやられるのだから。「黒い商品」には自分の意思が—黒奴たちには現在または未来で行動する好機がない。

①¹⁶ 奴隷船

I.

船荷管理人メネール・ヴァン・ケーク

かれの船室で勘定している。

積荷の総価格と

確からしい儲けを計算する。

「ゴムはよし、胡椒もいい、

三百俵に三百樽だ。

砂金も象牙もある—

黒い商品はなおもよい。

六百人の黒人をセネガル河畔で

二束三文で手に入れた。

筋肉は堅く、臄はぴんと張り、
まるで極上の鉄の鋳物だ。

ブランデー
火酒とガラス玉と

鉄具との交換さ。

半数が生き残りや、

儲けは八十割。

リオ・デジャネイロの港で

三百人の黒人さえ生き残つてりや、

ゴンサレス・ペレロ商館は

一匹に百ドウカーテン払つてくれる。」

とたんにメネール・ヴァン・ケークの

胸算用はやぶられた。

船医がはいつてきたからだ、

ドクトル・ヴァン・スミッセンが。

骨と皮ばかりの瘦せつぼちで、

鼻いちめんに赤い疣―

「なア、船医さん」とヴァン・ケークが叫ぶ、

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

「黒人たちの様子はどうかだい？」

ドクトルはその問いに礼を述べて言う、

「それをお伝えにきたんですが、

どうも今夜は死人の数が

ずっとふえたんです。

毎日平均二人が死んでいたのに、

今日は七人も死にました、

男が四人、女が三人―損害は

すぐ帳簿に書き込みました。

屍体は厳密に検屍します。

あいつらはときどき

死んだふりをしますからね、

海へ投げ込んでもらおうと。

死んだ者らから鎖をはずして、

いつものように、

屍体を海へ投げさせました

朝早いうちに。

するとすぐに波のなかから

鯨の一群が躍り出ました、

奴らは黒人の肉が大好物です。

わたしどもの居候のような奴らです。

鯨の奴らはわたしどもが出帆してから、

ずっと船のあとをつけてきたのです。

あの畜生らは貪欲に鼻を鳴らして

屍体の臭いを嗅ぎつけます。

奴らが死人にパクリと食いつくのは、

滑稽なみものです！

頭に食いつき、足に食いつき、

ぼろ切れを呑み込む奴らもある。

すっかり呑み込みまうと、^{かまぼた}舷のまわりを

満足げにぐるぐるはねまわり

わたしをじっと見つめます、朝食の

お礼を言うとするかのように。」

だが溜息ついて話をさえぎる

ヴァン・ケーク、「この禍をどうすれば

少くすることができかね？ 死人の数を

どうしたらふやさぬことができるかしらん？」

ドクトルは答える、「己れ自身の罪で

多くの黒人は死ぬのです。

あいつらの悪い息が

船倉内をすっかり腐らせちまつたんです。

それに沢山の者が鬱病で死にます、

死ぬほど退屈してますから。

すこし空気と音楽とダンスを

与えれば病気はなおります。」

そこでヴァン・ケークは叫ぶ、「名案だ！

わが船医さんは

まるでアレキサンダーの先生、

アリストテレスみたいに頭がいい。

デルフトのチューリップ改良協会の

会長さんはとても利口だが、

あんたの半分の

分別しかない。

音楽だ！ 音楽だ！ 黒人たちを
この甲板で踊らせよう。
跳びはねて楽しまない奴あ
鞭でぶちのめしてやる。

II.

高く碧い空の天幕から
数知れぬ星たちが覗いている、
憧れに輝いて賢そうに見ひらく
美人たちの瞳のように。

星たちは海を見おろす、
海は燐光を放つ紫紅色の霧に
ひろくおわれ
波がみだらな媚をふくんでささやく。

奴隷船の帆ははためかず、
廃船であるかのように垂れている。
でも甲板上にはランタンがほのかに光り
ダンス音楽がかまびすしい。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

バイオリンを奏でる航海士、
コックがフルートを吹く、
それに合わせてボーイはドラムを叩き、
ドクトルがラッパを吹奏する。

百人ほどの黒人が
男も女も歓声あげて跳びあがり
狂ったように走りまわる。跳ぶたびに
鎖が調子を合わせて鳴る。

楽しく騒いで床を踏み鳴らし、
幾人かの黒い美女たちは
欲情に駆られ裸の同胞を抱きしめる—
そのあいだ呻く声。

獄卒が総指揮者で、
鞭打ちによって
いい加減な踊り手を鼓舞し
楽しい気分へと駆り立てた。

ぶーぶかぶーぶか、たらたったった！
この大騒ぎは

海底で眠りほうけていた
海の世界の怪物を誘い出す。

寝ぼけまなこで数百の
鯨の奴らが泳いでくる。
船を見上げて眼を見張り
呆然として不思議がる。

まだ朝食のときではないと
気づいた鯨どもは、大口あいて
あくびする。その顎には、
鋸のような歯が植わっている。

ぶーぶかぶーぶか、たらたつたつたー
踊りはいつまでも終りが無い。
いら立った鯨どもは
自分の尻尾に食いつく。

奴らは音楽が嫌いらしい、
奴らの一味はたいていそうだ。
「音楽嫌いの動物に気を許すな！」と
アルビオンの大詩人は言っている。

たらたつたつた、ぶーぶかぶーぶかー
踊りはいつまでも終わらない。
正面前方のマストにメネール・ヴァン・ケークが立ち
手を組み合わせお祈りする。

「おオ主よ、願わくはキリストのおんために
黒い罪びとの命をゆるしたまえ！
お気にさわりますとも、あれたちは
ご存じの通り、牛みたいに愚かです。

願わくはあれたちの命をゆるしたまえ、
われらすべてのために亡くなられたキリストのおんため
に！

あの三百個の命が残りませぬと、
わたしの商売は破滅ですから。」

幾つかの徴候から、ハイネが『奴隷船』を、船が航行する図柄
を紋章とする「世界の光り輝く首都」の裏側の暗黒面を見せるた
めに、寓喩として構想したことが推論できる。ハイネは『ロマン
ツェーロ』の各詩を互いに調整して分類することに苦心した。か
れは出版者カムペにこう書いた。

(17) 「配列する精神が私の主要特性であることは、ご承知の通りです。最近もそのことを『ロマンツェーロ』の出版のさいにお認めになられたでしょう。もし私が外形上の配列に多くの時間をかけて熟慮しなかったならば、その出版はきつとどうにもならなくなつたことでしょう。」

その詩集で『奴隸船』の前に置かれた詩は『バビロンの憂鬱』(18) *Babylonische Sorgen* という題名で、もちろん「罪の泥沼」パリを暗示するものである。ハイネは読者にかれの「樽の墓穴」を覗き見させて、個人的告白を、パリの意気揚々たるブルジョアジへの鋭い隠喩の衣をかぶせた批判と、結びつけた。

バビロンの憂鬱

死がわたしを呼ぶ—ああ 愛しい者よ、わたしは
お前を森のなかに置いてゆきたい、
あの樅の樹の森のなかでは
狼が吼え、禿げ鷹が巣く
ブロンドの雄猪の妻の野性の豚は
恐ろしい声で唸る。

死がわたしを呼ぶ—わたしはおまえを、
ねえ、わが妻よ、大海原の真ん中に

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

置き去りにしなければならぬ方が、よいかもね、
たとえ苛烈な北極風が
波濤を打ちつけ、海底から
そこに眠っていた怪物ども、
鮫や鰐鮫が大口あけて

泳ぎ昇つて来ることがあろうとも—
ねえ、わたしが言うのを、妻よ、マチルドよ、信じなさい、
あの荒れ怒る海もいこじな森も
わたしたちの今の住居ほどに

危険なことはない！
どんなに狼や禿げ鷹や
鮫やその他の海の妖怪が恐ろしくても。

ずっと凶暴で邪悪な動物どもが沢山
パリ、この世界の輝く首都にはいるよ、
歌い踊る美しいパリ、
天使らの地獄で悪魔らの天国には—
おまえをここに残して置くなんて、
そう考えると頭がおかしくなり気が狂う！

嘲けるようにぶんぶん唸って黒蠅どもが
わたしのベットのまわりを飛ぶ。

額や鼻の上にとまるのだ、忌わしいならず者め！

人間のようて顔つきをしている者もいて、

ヒンドスタンのガネザ神〔インドの福運の神〕のよう

象の鼻さえもっている。――

わたしの頭はがんがんじんじん鳴り、

わたしの理性はもう旅支度して

旅立つてゆくようだ―ああ 悲しや―

わたし自身がまだ出かけもしないのに。

この詩は第二帝政の開始期における社会的変化の知識によってのみ理解できる。一八四八年の革命ののちに始まる工業化過程はフランスの首都の相貌を一変させた。ナポレオン三世によってセーヌ県の知事に任命され、男爵バロンに昇格させられた技術系行政官テクニクラートジョルジュ・ユージェヌ・オスマンがブルジョアの居住区を豪華な建築物の築造と広い環状道路の設置によって美化して、パリを「世界の輝く首府」にした。かれは老朽した貧民窟を再開発して、賃銀奴隷たちのみすばらしい住宅を巨大な団地アパートに建て替えた。流行病の危険を封じこめるために分岐の多い下水道網が創出された。これらの衛生上の措置や居住条件の改善は思いやりのある理由から生じたのではなく、むしろ事業主たちの関心は、最大限可能な利潤率をめざすために無産階級の労働力を維持し、その高い死亡件数を引き下げることにあつた。労働組合は禁止されて

いたし、社会的情報網は存在していなかったたので、無産者たちは際限なく搾取されるままだった。近代の資本主義体制は、ハイネの言うところでは、「悪魔らの天国」だった。その体制は自然によつて創り出された「鮫やその他の海の怪物」よりも「ずっと凶暴で邪悪な生物」を生み出した。

詩人は、貪欲に「大口あけて」泳ぎまわっていた、資本主義の利欲の鮫どもの隠喩を、二十年前すでに『フランスの状態』のなかで使っていた。当時すでにかれは、株式取引所仲買人と投機家の経済力が国家の政策を決定的に規定することを、認識していた。かれの亡命の数カ月後に、パリの「高い丸天井の取引所ホール」の巨大な空間「にかれは足を踏み入れた。「こここそ」とかれは述べた、「国債証券の悪徳商法がありとあらゆるどぎつい姿をとり、不協和音を立て、まるで私欲の海のごとく激動するところである。雑然たる人波のなかから大銀行家たちが鮫のように現われてパクリとやり、怪物どうしが互いに呑み込み合い、そして：目下戦争か平和かを決定する利息たちの住むところでもある。」

ハイネは、まずかれ自身の世代のなかでフランスの支配的社会形態となつてきた資本主義の危機性を見抜いた、そして搾取する者らと搾取される者たちとの利害の対立が和解できないことを、認識していた。ハイネが常に抱いている富と強欲エンペーンの神の崇拜者にたいする憎悪は、多分年齢が加わると共に昂じたのかもしれないが―それはたんにかれの一族の成金どもによつてかれが経験した

このためばかりでなく、次のことをかれが理解していたからだ。つまり工業化過程の結果強力に増大する資本の蓄積がブルジョアジーとプロレタリアートとの間に存在する隔たりを深めたこと、またこの階級対立が、フランス大革命時代に特権貴族と第三身分との間に存在していたあの階級対立よりも—今回は革命家たちが封建的な所有権だけでなくブルジョアの所有権をも没収しようとしたのだから、もっと極端だったことを、理解していたからだ。ハイネは肉体的な欲望の充足だけでなく、社会的な公正をも渴望する無産者たる共産主義者たちの要求を正当と認めはした。それにしては、同時代人のアレクシ・ド・トクヴィルに似て、平等の原理の貫徹が芸術および学問の精神的独立を脅かすかもしれないことを恐れた。かれは、芸術が宿命的な二者択一のまえに立っていることを、認識していた。芸術は資本主義的体制のなかで「その独立の台石から引きずりおろされ、贅沢の侍女に貶められたのだが、来るべき共産主義の社会には芸術の平均化と規制という危険が存在した。²⁰⁾「どんな人間もどんな人間の仕事も、一定の共同体の制約を超えることはできない。」

功績主義という、また人間の能力の自己実現という、サンシモン主義の理想に決して背かなかつたハイネが、それにもかかわらず、プロスペル・アンファンタンおよびエーミール・ペレールのような資本主義的に墮落した²¹⁾、かつてのサンシモン主義者たちにそっぽを向いたのは、「これら殉教者たちの大多数が」その

政治詩人ハイネ〔新版〕(V・完(ヴァルター・グループ))

間に百万長者になって極めて利益の多い地位についていたからである。「全人類のための黄金時代を夢みていた、かつてのこれら先駆者たちが、銀の時代、つまりすべての人および各人の父と母である金という神の支配、を宣伝することで満足した。」自由主義的な自由の理念の種子が社会の最下層にはいり込んで、そこを豊穣にすることを、かれは希った。²²⁾「自由のこの大衆化、この神秘的な過程は、すべての出生と同様にと、そしてすべての結実と同様に、必要な条件として時間と安息を切望するもので、それはわれわれの先達たちが取り込んだあの根本理念の告知に劣らず、確かに重要なことである。言葉は肉となり、肉は血を流す。われわれは、われわれの先達たちよりも仕事は少いが、苦悩はずっと大きい。神聖な自由と平等の法則が厳かに宣言され、幾百の戦場においては是認されたのちに、全てが上首尾に終ると、先達たちは信じていた。」民衆に生き甲斐ある生存を保証する必要性を完全に認識していたにもかかわらず、ハイネは、自分の自由主義的な自由の概念を社会的平等の祭壇にいけにえとして捧げることが好まなかつた。支配的な金権政治の偽善と偽信とにたいするかれの嫌悪にもかわらず、いきり立つ大衆との間にかれは距離を置いた。かれが恐れていたのは、ブルジョアジーにたいするその無産階級の敵対者が「これまで既成勢力と闘った者のなかで最も恐るべき者であろう」ということだった。²³⁾「この敵対者はまだその恐ろしい本名を隠している。そしてみすばらしい王位継承者のよう

に、あの公的社會の地階に、死と腐敗の下から新しい生命が芽ぐみ発芽するあの地下墓所に居城を定めている。共產主義がこの恐るべき敵の隠された名前であり、それは現在のブルジョア階級の支配に抗して、無産者支配をその完全な徹底性をもって対置するのである。」

四十年代の初めに「アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトゥング」紙へのかれの通信においてハイネは、「社会の下層に待ち伏せして、好機が到来したらその暗闇から躍り出るであろう魔物」のことを報道し、「未来はこれらの怪物のものだ」と予言した。パリ市民の顔がかれには「醜いほど真面目に、苦しいでいららして威嚇的に」思われたので、「これらの人々はいつか拳を握りしめて突然打ちかかってくるかもしれないという」不安がかれを襲った。一八四二年十二月に「すべては雪に埋もれた冬の夜のように静に」思われた。「ただ微かで、単調な雫の滴る音がするだけ。それは不断に膨張してゆく資本のなかへ、たえず滴り落ちる利子なのだ。富者の富が増えてゆく音がきちんと聞こえる。その合間に貧者の低い歎息が。時にはまたナイフを研ぐようなカチャカチャ鳴る音も聞こえる。」

「路地の民衆の表情」はかれに「固く確信」させる、「遅かれ早かれフランスの全市民劇がその議会の花形役者や端役もろとも野次り倒されて恐ろしい幕をおろし、それから共產主義体制という事件の余波が上演されることを」。飢餓に駆り立てられた大衆の

突撃が「在来の所有観念や、今日の社会の大黒柱を揺り動かすに」至るだろうことを、かれは恐れて、「持たざる者と所有の貴族との大闘争」を予見した。「そのときには国籍も宗教も問題にならないだろうような」闘争を。つまり「唯一つの祖国、すなわち地球上だけが存在するだろう。そして地上での幸福という唯一つの宗教だけが存在するだろう」。ただ舞台に登場するために、きつかけのせりふを待っているだけの共產主義は、「近代の悲劇のなかで偉大な役割を」演じるであろう。ブルジョアジーは「重大なスーヴの問題」を解決できないのだから、「共產主義にたいして、つまり現在の統治の廢墟から鼠のように飛び出してくるであろうあの陰気な仲間にたいしては、本能的な恐怖を」抱いている、と。すでにその『ベルネ追想録』でハイネは無産の下層民を鼠と比較していた。動物の隠喩法には、ブルジョアの所有権社会に内在し、それゆえ揚棄できなかった社会的諸矛盾を、批判するイデオロギーの機能があった。

五〇年代、工業化過程が加速され、共產主義運動が初期資本主義の仮借なき搾取の結果強まったとき、ハイネはかれの寓話的で物語詩風の時事詩『放浪鼠』Die Wanderratten を書いた。その詩はかれの遺稿のなかから一八六九年に初めて発表された。

詩人は飢餓によって留まるところなく追い立てられてゆく憤激したプロレタリアートの行進を描いた。プロレタリアートは社会の悲惨の領域に群がって、失うべき何物も持たず、財産家たちの

飽食の世界を脅かしていた。かれらは、共産主義的プロレタリアについて広まっている、ブルジョア・ジャーナリズムによる偏見風聞、伝説を組み合わせた。かれらはたんに粗暴な平等主義しか望まなかったし、宗教的戒律を守らなかったし、魂の不滅は信じず、一夫多妻で、下品な肉体的欲望以外は何も考えなかった。鼠の群れの旺盛な食欲と貧困からその群れの衝動の目標、つまり官能の満足と世界の財産の分割が生じた——一九世紀の五〇年代には恵まれた地位のプロレタリアなど存在しなかったもので、その（第一節に言及された）「飽食した鼠」とはブルジョア階級のことだけを意味した。

物質的利益が両陣営の行動を決定する。革命家たちが飢餓に駆り立てられる一方、飽食したブルジョアジーはかれらの私有財産の維持を道徳と同じに取扱い、それを擁護するために自らが意のままにできるイデオロギー的そして軍事的手段を差し向ける。詩人は、かれが嫌悪する成金たちを、無気味な「ラジカルな徒党」によって震え上がらせ、財産家らのすべての宗教上、哲学上そして法律上の論拠が、プロレタリアの飢餓蜂起を「大砲、数百ポンド砲」を用いて流血のなかに圧殺する——パリの一八四八年の六月闘争のさいに試みられた——方法と全く同様に、役立たぬに違いないことを示した。

詩人は「紳士たちに」、暴力を振るわないで、むしろ「黒い群れの」飢えた「口々に」栄養のある食餌を詰め込んでやることを

政治詩人ハイネ〔新版〕(V・完(ヴァルター・グループ))

勧める。民衆の悪意は、ハイネが幾度も強調したように、人間類的に条件づけられているのではなく、物質的な窮乏の結果なのだから、飢えに苦しむプロレタリアはブルジョアの弁護者の滔々たる弁説によってではなく、スープ、肉団子、ゲッチングンの腸詰め、牛の焼肉そして魚によってだけ満腹させられることができた。これらの（すでに詩『安心のために』で言及された）享受が、革命の危険を除去するための適切な手段であるように、と。

末尾の数節は韻律論、リズムそして観点の転換を示している。ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級戦線を超えて、またその彼方に立つ、近代の大道歌手ベッケルゼンのポーズで、驚愕させられた市民に詩人は問いかけた。かくて鼠の寓話の政治的教訓は、悲惨な状態で細々と暮らす大衆の生活環境を改善すること、蔑視され、屈辱を受けた者たちの人間の尊厳を尊重すること、私有財産への脅威を払いのけるために、広範囲な社会的改良を実行すること、が必要だということだった。

およそ同じ時期に書き下ろされた『告白』のなかでハイネはまた、「民衆陛下(30)が無料で入浴できる」公衆浴場を設けることをも提案した、そして「バター(31)を塗ったパンやその他の食糧の給食つきで民衆が無償で授業を受けられる」公立学校を民衆のために設立することをも。

放浪鼠⁽³²⁾

二種類の鼠がいる。

飢えたのと満腹のと。

満腹の奴らは家で安閑、

だが飢えた奴らは旅に出る。

何千マイルも旅をして、

休みも止まりも全然せぬ、

歯を喰いしばって一目散、

風にも嵐にもひるまない。

山によじ登り、

湖を泳ぎ渡る。

溺れる者、首の骨を折る者、

死んだ者らは置いてけぼり。

これらの変り者は

ぞつとするような口髭を生やし、

頭は全員極端に

ラッテンカール
つるつる坊主に剃っている。

このラジカルな徒党らは

神なんぞ知りもせぬ。

子供に洗礼受けさせず、

女は共有地だ。

官能主義の鼠の群れ、

貪り食ってがぶ飲みし、

飲んだり食ったりするあいだ、

靈魂不滅など考えない。

こんな野蛮な鼠らは、

地獄も猫もこわがらない。

かれらに土地も金もなく、

新たに世界の分割を望む。

放浪鼠、おオこわや！

あいつらはもう近くにいます。

近づいてくる、チュウチュウと、

その数は軍団をなす。

あアつらい！ もうだめだ、

やつらは市門の前まで来た！

市長も参事会員も、

頭を振ってお手あげだ。

市民は武器を取り、

坊主らは鐘を鳴らし、

道徳国家の聖域たる

所有権が危殆に瀕する。

(33) こんな窮境にどうすればよい？

皆さんに勧める、パンや

ケーキや肉類を詰め込んでやること

この黒い群集の口という口に！

鐘の音も坊主の祈祷も

いとも賢明なる市会の布告も

大砲、数百ポンド砲も

きみたちにはいま役立たない！

時代遅れの雄弁術の言葉の網も

いまやきみらに役立たぬ。

三段論法^{シロツヌム}じゃ鼠はつかまらない、

かれらはどんなに精緻な詭弁も飛びこえる。

飢えた胃にはいるのは

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

団子論^{ソップ}の肉汁論理だけ、

ゲッチンゲンの腸詰め引用句つき

焼肉の論証だけ。

バタで揚げた沈黙の棒鱈の方が、

このラジカルな徒党の口には合う、

ミラボーよりもずっとよく、

またシゼロ以来の弁説家のだれよりも。

ハイネは社会的平均化過程にたいして苦情を述べた。理由はかれが、未来の共和主義的民主主義は美と天才にたいしてふさわしい場所を容認しないだろうと恐れたから。かれの平等の概念は、法律上そして政治上の領域ならびに、かれらの物質上の要求を満足させる、万人の平等の権利に、適用されていた。しかるにかれは、知的かつ芸術的領域での平等の原理の適用を拒否した。かれはその平等の原理を、人々の差異のある能力を無視する、無作法な扇動とみなした。かれが社会革命家ルイ・ブランと知り合ったとき、じじつかれはブランの「民衆の苦悩にたいする燃えるような同情」を正当に評価しはした。けれどもブランはいつか「政府の権威」を掌握するだろうという可能性がかれを驚愕させた。なぜならかれは、「明白に公共の安寧と、一般的平等と、民衆の社会的幸福のために」ブランは「新兵の身長の基準を超える頭を全部切り落

とさせる」だろう、と信じたから。

『アッタ・トル』Atta Trollのなかでハイネは「急進派の連中の平等騒ぎ」の現実化を笑いものにした。

⁽³⁶⁾ すべての神の被造物の

完全な平等が憲法だ、

信仰や毛皮や

体臭の区別などなしに。

厳格な平等！ どんな驢馬にでも

最高の官職に就く権限があり、

そのかわりライオンに袋をかっいで

水車小屋へ急がせるのだ。

一八四四年八月、二度目にハンブルクを訪問したとき、ハイネは手工業者「共産主義の理論家である仕立屋ヴィルヘルム・ヴァイトリングと知り合った。ヴァイトリングの主著『調和と自由の保証』*Garantien der Harmonie und Freiheit*はハイネによって「ドイツの共産主義者たちのカテキズム」と見なされていたが、ヴァイトリングは、チューリヒで秘密結社の結成と瀆神のことで起訴され、足を鎖でつながれてほとんど一年間その地の刑務所ですごしていた。刑期を終えたかれは、かれの本『貧しい罪人の福音書』

Das Evangelium des armen Sinders の出版を出版業者カムペに申し込むため、ハンブルクに来た。その本でかれは、イエスが、パリサイ人と闘った共産主義的革命家だったことを、証明しようとした。カムペの事務所でハイネはかれと出合った。詩人は会話のなかで、ヴァイトリングが自分自身と「同じ革命的で無神論的な学理」を信奉すると表明していることがわかったとき、驚いたというのは「アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング」紙へのかれの報告の一つでハイネは次のように書いたのだから。「⁽³⁷⁾富んでいる者が神の国にはいるよりは、駱駝が針の孔を通る方が、もっとたやすい」——この神々しい共産主義者の言葉は恐ろしい異端判決であり、エルサレムの取引所と富豪にたいする憎悪を証拠立てている。」

ハイネの『告白』を信じようとすれば、ヴァイトリングは出合ったとき尊敬の念の全然ないような態度で、「⁽³⁸⁾アウトロウの仲間うちでの実際の聖別を同じくつくに受けた浮浪者にたいしているジプシーのような馴れ馴れしい身振りをして」かれと話した。会話のあいだヴァイトリングは絶えず片脚のくるぶしの上あたりを擦って、驚いて尋ねるハイネに説明した、「⁽³⁹⁾自分はいって、いたドイツのいろいろの刑務所で、いつも鎖につながれていて、脚につけられた鉄の輪がきつすぎることがあったから、その所がずっとむず痒いことを」。ハイネはこのことを聞き取ったとき、二、三步後さりした。なぜなら「ここで問題になっていたのが、

いま世界が身につけている、あの比喩的な鎖ではなく、ヴァイトリングは「極めて鉄の如くゆるぎない意味での」鎖のことを語ったのだから。その鎖と詩人は関係をもちたがらなかった、「それれ『一緒に捕われ、一緒に首吊られる！』という格言にたいする恐怖からのようなものではない。そうでなくて、むしろ並んで絞首刑にされることを恐怖に駆り立てたのである。」

こうしてハイネは「繕い専門の洋服屋」ヴァイトリングから距離を置いたのだが、かれは、カール・マルクスおよび、自分と同等だとみなした、マルクスの同志たちのような、他の共産主義者たちに称賛を惜しまなかった。一八五四年の末にかれがフランス語版『どいつニツイテ』*De l'Allemagne* の新版の準備をしたとき、それにはロマン派についてとドイツにおける宗教と哲学についての二つの論文が収められていたが、かれはフランス語原文のなかに、明らかにカール・マルクスとその同志たちに関する、次の章句を挿入した。

「多かれ少なかれ地下活動しているドイツの共産党の指導者たちは、偉大な論理的思考者であり、それらの最も頭脳明晰な者たちはヘーゲル学派の出身である、そしてかれらは疑う余地なくドイツで最も能力ある頭脳の持主で最も断乎たる性格の人々である。これら革命のドクターたちとかれらの容赦なく決然たる弟子たちは、精力的に活動していて、未来がかれらのものである、ドイツにおける唯一の政治勢力である。―すべての他の党派とそれらの

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

ドイツ心酔的な代表者たちは死んだ、死に絶えた、そしてフランスフルトのパウロ教会の丸天井のもとに葬られている。ハイネ自身は、知的な「革命のドクターたち」へのかれの尊敬と無産の下層大衆の政治行動にたいするかれの嫌悪との間にある矛盾を、自覚していたことだろう。類似の矛盾は、かれがミュンスターを訪れたときその責めさいなまれた遺骨にかれが「燃える唇」でキスして『冬のメールヒェン』のなかでも称賛の言葉述べたことのある、処刑された「仕立屋王」ヤン・フォン・ライデンにたいするかれの崇拜と、「ヤン・フォン・ライデンがそのために苦しんだ同じ事柄の使徒であり殉教者であり、光栄のある追想のシオンの王であった」生きている仕立屋ヴァイトリングにたいする軽蔑との間にも、存在したのだ。かれはこれらの矛盾を解決することができなかつた、そして「この告白に対応するであろう解釈が、どんなに好意的でなく厳しいものかもしれないかを、ただたんに全く確認するだけ」にとどめたのだ。

未来は共産主義のものだというハイネの予言は、希望と不安の間で揺れた。一八五四年に書かれた『告白』でかれは、「無花果の葉を全然つけない、ぞつとするほどむき出しの共産主義」の破壊的な暴力にたいする「芸術家や学者のひそかな不安」を強調して、次のように言った、「われわれの近代文明のすべて、何世紀にもわたる労苦にみちた成果、先人たちの極めて気高い営為の果実、それらが共産主義の勝利によって脅かされているのをわれわ

れは見るのである。」

けれどもかれは、そのちよつと後で『ルテーツィア』へのフランス語の序文を執筆し、プロレタリア的^{ドクトリン}学理との自分の一体感を強調した。じじつかれは、自己の本能および関心と相容れない共産主義へのこうした同意が、おそらく偉大な論理的思考者である悪魔の囁きかけに帰せられるかもしれないことを、反語的に認めはした。それにもかかわらずかれは、自己の芸術家としての偏見を冷静に修正することが可能だったことを、論証した。それはたんに、人民大衆の物質的状态を改善する必要性への認識ばかりではなく、共産主義者たちの敵であると同時にかれ自身の敵でもあった、ドイツの国粹主義者らへの嫌悪の念でもあった。かれは『告白』のなかで美学的考慮から誤って非文化的とされた共産主義者たちとは一線を画していたのだが、ハイネの死の十ニカ月前に書かれたかれの政治的遺言だとみなされうる、その序言のなかでは、かれの世界市民的な考え方と社会正義の倫理的原則が優勢を占めた。

ハイネは、ヴァイルヘルム・ヴァイトリングが喜んだかも知れなかつたような、つまり共産主義の教理はキリスト教の本源的な理想に相応するという主張で締め括った。かれは、検閲をうまくごまかして免れるため、また「アウクスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング」紙への通信でも共産主義のテーマを話題にするための、自己の戦術をさらけ出した後で、次のように続けた。

「⁽⁴³⁾アルゲマイネ・ツァイトウング」紙によつて、ばらばらの共産主義者たちの諸団体は、かれらの責務の日増しの進歩について最初の本物の報道を知つたのである。かれらが決して弱い小さな群れではなく、あらゆる党派中での最強のものであり、かれらの日はまだ来てはいないが、未来がその人たちのものである人々にとつては、静かに待つことは決して時間の損失でないことを知つて、かれらはとても驚いた。未来が共産主義たちに属するというこの告白を、私は極度の不安と憂慮の調子でした。そしてあア！この語調は決して仮面ではなかつた！ 実際、あれらの偶像破壊者たちが政権を掌握する時代を考えると、私は恐怖で愕然とするばかりだ。それからかれらは粗暴な拳で、私の愛する芸術世界の大理石像を打ち砕く、詩人があんなに愛したあれら夢想的なガラクタをすべて破碎する。かれらは私の月桂樹の森を掘りおこし、そこに馬鈴薯を植える。紡がず、働かず、けれどもソロモン王のように美しい衣裳をまとつた百合の花は、紡ぎ棒を手に取りとうとしないときには、社会の地面から引き抜かれる。薔薇、鶯のあの怠惰な花嫁たちもそれと同じめにあう。鶯、あの役に立たぬ歌手たちは追つぱらわれる、そしてあア！ 私の『歌の本』は、香料小売商人が未来の老婆たちのために、コーヒーか嗅ぎ煙草を入れてやる紙袋に使うだろう。あア！ 私はそれらすべてを予見する、そして古い世界秩序が共産主義によつて脅かされる没落のことを考えると、私は名状しがたい哀愁に襲われる―そしてそれにもか

かわらず、私は率直に告白するが、その同じ共産主義が、打ち勝つことができなほど、私の心を魅惑する。二つの声が私の胸のなかでそれを擁護する。それらの声は沈黙させられないし、おそらく悪魔の囁きにすぎないだろう―だがいまや私は、それに取れない―なぜならこれらの声の第一のものは論理であるからだ―悪魔は論理的思考者である、とダンテは言った―恐ろしい三段論法が私を呪縛する。そして「人間はすべて食う権利をもつ」という前提を私が反論することができないならば、私はまたそのあらゆる結論にも従わなければならない―そのことを考えると、私は気が狂いそうになる。真理のあらゆる精霊たちが勝鬨をあげながら私をとりまいて踊り、ついにはやけっぱちな寛大な気分が私の心を捉え、そのとき私は叫び声をあげる。いつの日か私の詩集で紙袋を作り、われわれの現在の不正義の社会では、そのような楽しみを我慢しなければならぬ哀れで善良なお婆ちゃんたちのために、その紙袋にコーヒーや煙草を入れてやる香料品店主に祝福あれ―タトエ世界ハ亡ブトモ、正義ハ行ワレヨ fat iustitia, pareat mundus!

そして二つの強制する声の第二の声は、第一の声よりもっと力強い。なぜならそれは憎悪の声、つまり共産主義にたいし最も断乎として敵対し、その最初の登場のときからきつとその怒れる巨人を妨害するであろう、あの共同の敵にたいして私が抱く憎悪の

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

声だからだ―私が言うのはドイツにおける国粹の自称代表者の党、その祖国愛なるものがたんに外国や隣国民にたいする愚かな嫌悪に他ならず、日々特にフランスにたいしてその憤懣を吐きかける、あれらの似而非愛国者たちのことなのである―そうだ、古いドイツの道化師の衣裳を取り替えて、尖った帽子の先を切り縮めさせただけの、一八一五年のドイツ熱狂者たちの生き残りや子孫どもを、私はわが全生涯を通じて憎み、かれらと闘った。そして死に行く者の手から剣が離れ落ちようとする今、共産主義がかれらの途上に立ち現われた最初のものとして、かれらに止めを刺すであろうことを確信し、その者は慰めを感じる。そしてきつとそれは棍棒による打撃ではなく、あたかも墓ひきかえを踏み潰すように、ただひと踏みでその巨人はかれらを踏み潰すであろう。国粹主義者にたいする憎悪から、私はほとんど共産主義者を愛しかねないほどだ。かれらは少なくとも宗教やキリスト教をたえず口にする偽善者ではない。共産主義は、本当のことだが、宗教をもたない(欠点のない人間はない)、のみならず無神論者ですらある(それは確かに大罪だ)、だがかれらは絶対的な世界主義とあらゆる民衆にたいする普遍的な愛と、地球上の自由市民たるすべての人間にたいする平等の友情を信じている。この根本信条は、福音書もかつて説いたところで、実際において共産主義者たちは、いわゆるドイツ愛国主義者、つまり排他的な国粹主義の頑迷な戦士たちよりも、ずっと遙かにキリスト教教的である。」

注

- (1) 続く引用とも、B三卷二二および次ページ。
 (2) J・カムペ宛一八五一年八月二日付手紙、H三卷二九六ページ。
 (3) 母宛一八五〇年七月二五日付手紙、H三卷二二一ページ。
 (4) G・コルプ宛一八四九年四月十七日付手紙、H三卷二六八ページ。
 (5) G・コルプ宛一八五一年四月二日付手紙、H三卷二八一ページ。
 (6) G・コルプ宛一八五二年二月十三日付手紙、H三卷三六一ページ。
 (7) B五卷三七五ページ。
 (8) B五卷三八六ページ。
 (9) J・カムペ宛一八五四年七月十八日付手紙、H三卷五三三ページ。
 (10) B五卷四〇七ページ。
 (11) B六I巻三〇五ページ。
 (12) B二卷三三六ページ。
 (13) DHA七I巻三二六ページ。
 (14) K・フィンガーフトゥによる引用、ハイネの『奴隸船』への構造的注釈：二九六ページ。参照、フィンガーフトゥのその詩の詳細な分析も。
 (15) この段落はシユテファン・ヴィンクレ、トリパノゾーマの歴史について、三二一および次ページの叙述に従う。
 (16) B六I巻一九四―一九九ページ。
 (17) J・カムペ宛一八五二年三月十八日付手紙、H三卷三七一ページ。
 (18) B六I巻一九三および次ページ。
 (19) 次の引用とも、B三卷一九三ページ。
 (20) 前の引用とも、B五卷三八二ページ。
 (21) 次の引用とも、BII巻一四二ページ。
 (22) B五卷四六一ページ。
 (23) B五卷四〇五ページ。
 (24) 続く引用とも、B五卷四二五ページ〔原文二三八は誤り〕。
- (25) B五卷四二六ページ。
 (26) B五卷三七四ページ。
 (27) B五卷四二二および次ページ。
 (28) B五卷四〇六ページ。
 (29) B五卷四一四ページ。
 (30) B六I巻四六八ページ〔原文四六九は誤り〕。
 (31) B六I巻四六九ページ〔原文四六八は誤り〕。
 (32) B六I巻二〇六および次ページ。参照、ハーン、ヒンデラー、ヴェルナーおよびカウフマン：『精神的発展二三〇および次ページによるその詩の注釈』。
 (33) 草稿のなかに見出だされるこの詩節は、ハイネによってその詩の最終稿には採用されなかった。
 (34) 続く引用とも、B五卷三二七および次ページ。
 (35) B五卷三八二ページ。
 (36) B四卷五一―一ページ。
 (37) B五卷四五三ページ。
 (38) B六II巻一八五ページ。
 (39) B六I巻四七〇ページ。
 (40) B六II巻一八六ページ。
 (41) 続く引用とも、B六II巻一八五および次ページ。
 (42) 続く引用とも、B六I巻四六七ページ。
 (43) B五卷三三二―三三三ページ。フランス語の『ルテーツィア』への『序文』は一八五五年三月三〇日付で、B五卷二一九―二二七ページにある。ドイツ語序文の信すべき原文は長い間行方不明とされていて、『Weinarter Beiträge』1958のK・エムメリヒの論文にはじめて出現した。

最 前 哨

ハイネは一八五一年に出版されたかれの抒情詩集を『ロマンツェーロ』Romanzeroと名づけ、それを「歴史調」Historien、「哀哭調」Lamentationen として「ヘブライの旋律」Hebräische Melodien に分類配列した。「哀哭調」の最後の二十篇をかれは「ラザロ詩篇」Lazarus と題してまとめた。そうすることではたんに自己の貧窮と病気のみならず、自己の不滅性をも示したのである。ラザロとは、新約聖書において、金持たちの食卓からこぼれ落ちるパン屑を食って生き、犬たちに腫物を舐められ、死後永遠の至福にあずかる乞食（ルカ伝十六章十九—三十一句）であると同時に、マリアおよびマルタの死んだ兄弟の名前でもあり、そのラザロをイエスは四日後に新しい生命へとよみがえらせた（ヨハネ伝十一章一—四十四句）。しかしハイネラザロは、かれが「ヘブライの旋律」のなかで褥の墓穴でのかれの苦悩を流涕の数千年にわたるユダヤ人の悲劇と織り合わせたとき、新約聖書ばかりでなく、旧約聖書とも自らを関係づけた。

(1) われらバビロンの流れのほとりに坐し
涙を流しぬ、われらが豎琴を

枝垂柳に掛けたり—

この古い歌をおまえは憶えているか？

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

おまえはこの古い調べを憶えているか、
初めは竈の上で沸騰する
薬缶のように哀調帯びて

めそめそ泣きだしヒューと鳴る調べを？

長く、すでに数千年もの間その調べは

わが胸に煮えたぎる。陰鬱な悲哀！

時がわたしの傷口を舐める

犬がヨブの傷口を舐めるように。

感謝する、犬よ、おまえの唾液に—

だがそれは冷やして和らげてくれるだけ—

死だけが私を癒すことできる、

ところがあア、私は不死なのだ！

「ヘブライの旋律」のなかでハイネはかれ自身の苦難の運命とユダヤ民族のそれと間に平行線を引いた。かれは詩人であることとユダヤ人であるという実存との共通点、つまり選民意識、殉教者の運命、故郷喪失、アウトサイダー性を指摘した。こうした類似はとくに長篇詩『エフダ・ベン・ハレヴィ』Jehuda ben Halevy に表現された。その詩でハイネは自分の愛が、ムーア人・スペイン人の中世時代のこの最も重要なユダヤ人の詩人の愛と同じように、迫害され苦悩するユダヤ民族に向けられていたことを示した。

その中世のユダヤ人の詩人は——ハイネと全く同じように——大きな権力をもつ敵対者たちの高慢な無知を耐え忍ばなければならなかった。エフダ・ハレヴィの功績を評価することによって、ハイネはかれ自身の肖像を描いたのである。

(2) そうだ、かれは大詩人になった、

かれの時代の星であり炬火、

民族の光であり燈火、

驚嘆すべき、偉大なる

歌の火の柱となって

イスラエルの苦難の隊商を

流謫の沙漠のなかで

導いていった……

人生と同じく詩作においても

最高のよきものは恩寵である——

これをもつ者は、罪を犯すことができない

詩文においても散文においても。

神の恩寵にあずかるそのような人を
われわれは天才と呼ぶ。

思想の国の

無制約の王こそ天才だ。

脊髄麻痺はハイネの神経系に重い障害を与えた。かれはもはや独りで起き上って歩くことが出来なくなった。部分的な視力の障害が徐々に進んだので、もはやかれは読むことができなくなり、書くためには麻痺した脛を左手で開いておかねばならなかったし、これまでの驚ペンの代りに鉛筆を使わなければならなかった。けれどもその苦痛多い苦惱は、回復の見込みが考えられなかったにしろ、かれの精神力と意思力にいささかも影響を及ぼさなかった。

(3) わたしの暗い小部屋には一条の陽光も、

一筋の希望の微光も射し込まない。

この呪わしい部屋からはただ墓地の墓穴にしか
移れないことがわかっている。

その病気によってかれは人間の共同体から隔離されていた——いわば墓穴のなかから話す、生ける屍。「私は本⁽⁴⁾当にまだ生存しているのか？ 身体はすっかり縮んでしまつて、声より他には、ほとんど何も残らなくなつてしまつた」、こう『ロマンツェーロ』の後記には述べられている。

ハイネは、自分の病気が性病に起因するものだと思つていたに

もかわならず、かれは常に、性欲は罪でないという確信に固執した。かれは自分の病苦を禁断の官能の快楽にたいする神の罪とみなさず、恐ろしい不運とみなした。遺稿詩に次の内容の一篇がある。

(5) 気紛れのために—なんと向う見ずな行為！—

わたしは生命を賭けた。

そしていま勝負に負けた。

わが心よ、嘆くなかれ。

ニーダーザクセン人たちの曰く、*»Minschenwille*

Ist Minschen-Himmelryk—わたしは

生命を投げ出した、けれどもわたしは

わたしの心の気紛れを実現した！

それによってわたしの感じた

至福は、短期間のものでしかなかった。

でも歓喜に酔っている者は、

時間だけでは測りはしない。

至福のあるところ、永遠がある。

ここにすべての愛の焰が集中し

唯一つのほむらとなって燃え上がる、

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グループ)

ここには空間も時間もない。

その苦痛にもかかわらず詩人は諦念に陥らなかつた。かれの死後一年して「ドイツ・ムーゼンアルマナハ」に『ミゼレの祈り』*Miserere* という題で発表された、一八五五年に書かれた詩には、悔恨に打ちひしがれたさまは認められない—むしろかれは己れの死にたいする恐怖を反語イロニーによって巧みに隠し、己れの苦悩をユーモアをもって受け容れることによって優越の身振りを勝ち取るうと試みた。

幸福な人々をかれらの生のために

わたしは羨みはしない。

わたしはかれらの死のために羨みたい、

苦しみのない速やかな死別のために。

華麗な衣裳、頭に花冠

そして唇に笑みを浮かべ、

かれらは楽しく生の宴席に坐す—

そのとき突然死神の鎌が当たる。

晴れ着をまとい、今なお生きているように

花開いた薔薇で飾られて、

幸福の女神の寵児たちは
闇の国に到着する。

決して長患いがかれらの姿を損なうことはなかった、

死者たちは立派な顔つきである、

冥府^{プロセルピナ}の女王がかの女の宮廷に

鄭重にかれらを迎え入れる。

かれらの運命をなんとわたしは羨まずにいられないこと

か！

すでに七年もの間辛い苦しい病患のために

わたしは床を転げまわり

そして死ぬこともできない！

あア 神よ、わたしがすぐに埋葬されるように、

わたしの苦しみを切り縮めて下さい。

あなたもご存知の通り、

苦難に耐える能力はわたしにはありません。

おオ 主よ！ お許し下さい、わたしは

あなたの首尾一貫のなさに驚いています。

あなたは至極愉快な詩人をお創りになりましたが、

いまやその詩人からその上機嫌さを奪い取ります。

悲痛が陽気な心を曇らせ

わたしを憂鬱^{メラニコリック}にします。

悲しい冗談の終りがなければ

最後にわたしはカトリク教徒になります。

そのときわたしは他の善良なクリスチャンと同じに、

あなたの耳いっぱい泣き叫びます—

おオ 憐れみたまえ！

ユーモリストの最善の人間が駄目になります。

既に言及したように、詩人はかれの詩集の詩の配列を入念で芸術性豊かにするよう大いに苦心した。『ロマンツエーロ』はいわば確信と勝利への希望に満ちた詩句の枠に嵌め込まれている。冒頭に置いたモットーでかれは、革命の挫折によってひねくれ意気消沈したすべての人々に、信念を変えることなく、芸術に慰めを求めするように勧めた。

⑦
もしもおまえが裏切られたら、

それだけ一層誠実であれ、

そして死ぬほど気が滅入ったら

豎琴を取れ。

弦は鳴り響く！ 炎と熱のみなきる

英雄の歌だ。

すると怒りも溶けて、

おまえの心は甘美に血を流す。

晩年の抒情詩の—というのは『ロマンツェーロ』の、『一八五三・五四年詩篇』の、それから没後発表された詩篇の—大部分は確かにこのような楽天主義とは矛盾するように思われる。そこではハイネは、「英雄は、古来の習わしによつて、獐猛な力に屈せざるを」えないという、また罪人ではなく、正しい者、罪のない者が苦悩の責め苦を耐え忍ばねばならぬという、詩『一八四九年十月に』に盛られた思想を、主題として取扱つたし、変化させもした。『ロマンツェーロ』の「歴史調」詩篇に含まれる『ヘイスティングズの戦場』Schlachtfeld bei Hastings では次のように歌われている。

⁽⁸⁾ 討死したのは優れた士、

不義の子、下劣漢が勝利した、

武装した盗賊どもが国を分割して

自由民を奴隷にする。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

しかしハイネは善人の敗北と悪人の勝利の原因を、不可解で予測のつかぬ偶然、あるいは計りがたい神の決定に帰せしめることなく、人々の営為と悪業に歴史の進行の責任を負わせた。ラザロ「詩篇の最後の二つの詩は、その生涯と作品が自由と進歩のための政治的な参^{アンガーシュマン}加のしるしのもとにあつた詩人の、批評的連続性を記録的に裏付けている。

ラザロ「詩篇の最後から二番目の詩の題名は『遺贈』Vernächtnis [これには「遺言」の意味もある]である。それによつてハイネはゲーテの同じ題名の詩を暗示したのだが、次に掲げる詩はそのオリンポス神の八十歳のときの作で、地上および宇宙の秩序についてのゲーテの老齡の知恵が包蔵されている。

⁽⁹⁾ 遺言 Vernächtnis

いかなるものも無に帰することはありえない！

永遠なるものは万有のなかに活動しつづける、

楽しく生き続けよ！

生存は不滅のもの。なぜなら法則が

万物を飾る

命ある宝を守っているのだから。

真なるものはとうの昔に発見されていて、

高潔な精神を結び合わせた。

その古い真なるものをつかめ！

地球に太陽を回るべしと、

また他の遊星にも軌道を示した、

あの賢者に、地上の子よ、感謝せよ。

さてただちに汝の内面に向え、

そのなかにも汝は中心を見つけ出すし、

高潔の士はそれを疑おうとせぬ。

そこに法則がないわけはないのだ。

自立した良心こそ

汝の日常の道德生活の太陽なのだから。

それから汝は感覚を信じなければならぬ、

汝の悟性が汝を目覚めさせているかぎり、

感覚は汝にいつわりを見させない。

生きたまなざしで喜ばしく認めよ、

そして確かな足どりで自在に歩め、

豊かな天分をもつ世界の緑野をぬけて。

ほどよく享受せよ充ち溢れる祝福を、

生命が生きることを楽しむところでは、

どこにでも理性があれ。

そのとき過去は持続し、

未来はまえもって生き生きとし、

瞬間が永遠なのだ。

そしてついに汝がそれに成功し、

創造力あるもののみが真実であると

汝がすっかり思い込んだならば、

汝は世の流行を試み、

それはそれなりにおこなわれよう、

汝は最小の群れに加われ。

そしていにしえより静かに

好きな仕事を己れの欲するがままに

哲学者や詩人たちが創り出してきたように、

汝もこよなき恩寵を得るだろう。

なぜなら高貴な魂の持主の氣持を先立って感じることこそ

なによりも願わしい使命なのだから。

ゲートルは崇高な安らぎと落着のなかで永遠なる存在の法則、真理、良心、悟性、理性、感情と愛を、あらゆる人間の秩序がそれに依拠しなければならぬ七本の柱と称賛したのだが、ハイネの詩

『遺贈』 Vermächtnis はこの英知にかれの七つの病気の悲惨を対置した。

遺贈

(10) どうやらおれの命も尽きる、
遺言状でもこさえておこう。

キリスト教徒らしくおれは遺贈する
おれの敵どもに贈物を。

これら威厳ある、高潔な
敵どもに受け継がせよう
おれの長患いと障害の一切
おれの四百四病を。

おれは汝らに遺贈する、
やつとこのように腹をねじりつける疝痛を、
小便詰まりと、底意地悪い
プロイセン風の痔疾をも。

おれの痙攣ひきつけをくれてやる。
だから涎と手足の痙攣、

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

すばらしい神の賜物ばかり。

遺言状の添え書は、

主が汝らの思い出を

忘れ給わんことを、

奴らの記憶を主よ抹消させ給え。

ゲーテの『遺言』の倫理的・哲学的考量は確乎として干渉しがたい自然の法則の全体を包括していたが、ハイネの視線は人間の幸不幸に向けられていた。かれの詩は、世界をひとより高い見地から眺めるのではなく、かれの悲惨な肉体的状態にもかかわらず、依然として戦い続けている男の作品であった。いかなるものも滅びて無に帰することはない、存在は永遠だ、というゲーテの楽天主義的なお告げは、自己の身体の苦痛に満ちた崩壊を体験しているハイネには、嘲笑の如くに思われたに違いない。ハイネの次の詩はゲーテの確信への間接的な返答とみなされうる。この詩は遺稿中に発見された。

(11) まったく恐ろしく健康に悪い

この地上は、そして、そうだ、

この世で偉大な美しいものはすべて

滅び去らなければならぬ。

地面から瘴気となつて

音もなく立ち昇り、空間を

ひどい毒で満たすものは、

古い迷妄の幻想なのか？

愛しい太陽のくちづけに

夢を開くか開かぬかの

優しい女の花たちを、

死がすでもぎ取つた。

馬上豊かに疾駆する戦士らを

弾丸が闇打ちする。

そしていやな奴らが奮起して、

かれらの月桂冠を汚そうとする。

昨日は誇らしげに燃え立ったもの、

それが今日はすでに朽ち果てた。

かれの七弦琴を腹立たしく

天才は真つ二つに叩き割る。

おオ なんと賢明なことか星たちは！

致命的に不健康な、

厭わしい地球から

安全に離れて位置を占めている。

賢明な星たちは望まない、

ここで生命、安らぎ、天の光を失うことを、この地上で

われわれとともに惨めになりたくないのだ。

星たちはわれわれとともに

臭い路地に身を沈めたくない、

蛆虫が這いまわり、これまた

悪臭芬々たる厩の肥こえに沈みたくないのだ。

星たちは致命的な地上の営為から

ごたごたや饒舌から

常に離れていきたいのだ。

星たちはしばしば高空から

同情をこめてわれわれの不幸を見おろす

そのとき金色の涙が

この地上に降ってくる。

でもハイネの詩『遺贈』に戻ろう。そこで廢疾の詩人はかれの「威

厳ある、高潔な敵ども」に己れ自身が苦しまされている、これらすべての業病があれかし、と願った。これらの敵とはだれだれだったか？ 一八四〇年頃に書かれた遺稿詩『遺言状』¹² Testament がヒントを与えてくれる。その詩でハイネは「シユトウトガルトの道徳監視人にして信仰管理者」に言及し、それによってユダヤ人およびフランス人憎悪者ヴォルフガング・メンツェルのことを述べた。メンツェルはハイネを革命的陰謀の「つまり「若いドイツ」の文学運動の―首魁としてドイツ連邦当局に密告し、ハイネは道徳と宗教の、教会と国家の破壊をその目標としていると主張していた。ハイネが（先に分析した）同じ名前の詩『シナの皇』¹³とと同様に、「シナの皇帝」と呼んだ、もう一人の敵は国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世だった。その国王をハイネは詩『新アレキサンダー』、『城館の伝説』そして『冬のメールヒェン』の最終章で、非難し嘲笑した。詩『遺贈』では「王位に即いたロマン主義者」の国家の名が挙げられている。ハイネが自分の「プロイセン風痔疾」について語り、そのさい「底意地悪い」という付加語はたんにかれの肛門からの苦痛を伴う出血だけをでなく一八四八年の革命を打倒したプロイセンをも指したのだから。

ゆえに『遺贈』は、表面的な、あるいは余り事情に通じない読者はそう思われないかもしれないが、病気の詩人が反語的な、あるいは悲嘆の叫びをあげるやり方で自分の病患を数え上げるといふ詩ではなくて、むしろ哲学的・政治的傾向を有するものである。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完(ヴァルター・グラープ)

その詩はゲーテの瞑想的な理想主義を反動的な権力者らとその手下どもにたいする世界観的闘争に代えている。

しかしその詩にはまだそれ以上に広い観点がある。最後の節で鬱積した詩人の怒りが鬱憤を晴らす。詩人は、神がかれの敵対者らの思い出を抹殺し、忘却することを希っている。その破門の呪いのこの旧約聖書的な決り文句はヘブライ語からの翻訳である。問題になっているのは聖書の破門^{アナテマ} Jemach Scham―かれらの名前は抹殺されるべし、ということである。旧約聖書でこの呪いはイスラエルの迫害者らの頭上および神の否定者らの上にくだされるように祈られている。そこでたとえば「わたしは天が下からアマレクの記憶を完全に消し去る」であろう（出エジプト記十七章十四句および申命記二十五章十九句）。この呪いは異教の神々に仕える人々にも向けられている（申命記二十九章十九句）。詩篇六十九章二十九句〔邦訳では二十八句〕は、神の誹謗者の名前を「いのちの書から消し去って」くださいと、要請する。詩篇百九章は求める、神を認めない者の名前ばかりでなく、かれの子孫の名を消し去って下さい、と。

ハイネがかれの『遺贈』のなかでかれの敵ども投げつけた呪詛は、人間の生きる権利は名前を通じて初めて成立するのだから、とても恐ろしいものである。個人¹³を他の人たちと連絡可能にする名前は、人の確乎たる構成要素、本人であることのシンボルで、生存の核心である。或る人の名前を抹消し、同時代および後世の

人々の記憶から消去せんとする要求は、それゆえその人自身の抹殺を意味する。

ハイネが旧約聖書的な呪いをたんにかれの政敵にたいして投げつけようとしたばかりでなく、「長患いと破滅」をかれの従弟カール、ハンブルクの「成り金」の頭上にも降りかかるよう希ったことは、ありうることだ。詩人は臨終のまぎわまで、カールが自分の芸術家としての自由を侵害し、自分に屈辱を与え、年金の支払いの継続を維持するためには、自分の『回想録』を破棄するよう強要したことを、カールに許せなかった。「私の一番親しい竹馬の友にして近親者が父親の言葉を尊重しなかったという道徳的憤慨、これが私に心臓を破裂させ、それがもとで私は死んでゆきます」と、ハイネはかれの出版業者カムペに打ち明けた。

この説明はもう一つの遺稿詩によって強められる。ハイネはその詩で死者たちのよみがえりの聖譚を引合いに出したのだが、その聖譚は聖書の予言者ダニエル(十二章二句)に触れて、エルサレムの神殿の破壊(紀元七〇年)後にユダヤ教の体系的学説に受け容れられたものである。ムーア人支配下のスペインの最も重要なユダヤ人哲学者にして法律学者マイモニデス(一一三五一一二〇四)は、神のみむねにかなった生活を送った死者たちのよみがえりを、かれの信仰告白のなかに受け入れた。最後の審判の日にすべての死者たちが、ラツパの響きに目覚まされ、かれらの墓から起き上がって、神の裁きの庭に姿を現わすであろう。けれども

大天使たちがその名前を呼びあげない死人たちは、よみがえらな
いだろうし、それゆえ裁かれることはできず、永遠に墓のなかで
朽ち果てるように永劫の罰を下されている。その遺稿詩に五回繰
り返された聖書の呪い「二度と思い起こされてはならぬ！」は、
この呪いの言葉を、カール・ハイネに頭から浴びせかけ、詩人は
自分の苦悩にカールも共同責任ありとした。

「あいつのことは忘れられてしまえ！」¹⁵

哀れなエスター・ヴォルフ婆さんの口から

わたしが聞いたこの言葉は、

いつまでもわたしの心に残っている。

この地上で人々の記憶から

消し去られることは、

呪いの言葉のきわまりだ―

あいつのことは忘れられてしまえ！

心よ、わが心よ、おまえの嘆きと

苦情の大浪を流し出せ、

だがあいつのことは口に出すな―

あいつのことは忘れられてしまえ！

あいつのことは忘れられてしまえ、
詩のなかでも、本のなかでも――

暗い墓のなかの黒い犬よ、

おまえはわたしの呪いととも腐ってしまおう！

復活の日に、喇叭の

吹奏に呼び覚まされて、

死者たちの群れがよろめきながら

審判へと巡礼してゆくときにこそ、

またそこで天使が神の裁きの場を前に

召喚された者たちのすべての名前を

読み上げるときにこそ――

あいつのことは忘れられてしまえ！

よみがえりの信仰は新約聖書にもある。福音書作者マタイは最後の審判を、そのさい神の子が正しい人たちを正しくない人々と分けるだろう、「羊飼が羊とやぎを分けるように」（二十五章三十二句）と、⁽¹⁶⁾記述している。ラザロ⁽¹⁷⁾詩篇（『ロマンツェーロ』）に属する詩『よみがえり』Aufstehungでハイネは、このキリスト教的神の法廷を、中世時代の秘密刑事裁判として述べることによって、⁽¹⁸⁾もじり茶化^{パロディ}した。

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完（ヴァルター・グラープ）

よみがえり

喇叭の呼びかけが大気を満たし、

恐ろしくも反響する。

死者たちが墓穴から現われて出て

手脚を揺すぶり動かす。

脚のある者はすごとすごと進みゆき、

白衣の人々の姿が

集合地ヨシヤパテへと巡礼してゆき、

そこで審判がおこなわれる。

そこに秘密刑事裁判所長としてキリストは

使徒たちに囲まれて坐す。

使徒たちは審判人であり、かれらの判決と言葉は

愛情あり聡明だ。

かれらは覆面して判決を下しはしない。

おのおの仮面をはずす、

最後の審判の白昼に

喇叭が鳴りわたるとき。

それはヨシャパテの谷でのこと、そこに召喚された群集が立ち、被告たちの数が多すぎるので、ここでは大雑把なやり方がされる。

雄山羊は左側に、羊は右手に、かれらは速かに分けられる。天国は信心深く篤実な羊に、好色な山羊には地獄！

エルサレムの近くにあるヨシャパテ（ヘブライ語で「神が裁判権者となりたまう」という意味）の谷で救世主はかれの使徒たちの真つ只中に坐し、使徒たちはよみがえった者たちにただたんにかれらの善行あるいは悪業にもとづいて判決を下すだけでなく、「信心深く篤実な」教会の掟に従う「仔羊」だけが天国にと決められ、他方、肉欲の快楽を好んだあれらすべての者は永劫の地獄の責苦の刑を宣告される。このことは神の裁きに風刺的なニュアンスを加える。この似而非宗教的、瀆神の詩はかくて死後のよみがえりという、またあの世で報われる信仰という神学的教義を笑いのものにした。一八五二年十一月五日、『マンツエーロ』を完成した直後に、ハイネはゲオルク・ヴェールト宛の手紙に書いた、自分は「宗教も哲学も必要とせず、両者となんらかかわりをもた

ぬ詩人として死にます。詩人は宗教の特殊語イデオロギイと哲学の抽象的な悟性の難解語をとてもよく理解するが、宗教や哲学のお偉方はいつの日にも詩人を理解することはないでしょう。」

あらゆる政党およびあらゆる種類の教義上のイデオロギーにたいして常に独立を主張したハイネは、かれの敵たちからしばしば、政治的に当てにならなくなり、かれの信念に忠実でなくなつたと咎められた。この非難を常にかれは憤激してきつぱりと退けた。「われわれをむしばむ最悪の毒は、脱落の可能性への恐れである」と、ベルネ追想録の草稿の一つで述べられた。「かれの生涯の末期にあたり、確信からしる不実からしる、変節者としてかれの敵どもの腕のなかで死ぬということは、確かに最大の不幸に違いない！」同様にかれの最後の出版物『ルテーツィア』でかれは強調した、「どんな離反も私はいやだ。」

この政治的言明はかれにとつてとても重要だったので、かれはその言明をラザロラザロ詩篇の最後の詩の中心に据えた。そのなかでかれは自己の生涯を総括し、自己の最終的な政治的・文学的告白に軍事的隠喩をまとわせた。かれは、迫害された者や隷属させられている者の解放を求める生涯の闘いで自分が敗れるに相違ないことを承知していたにもかかわらず、変節者にならなかつた。かれは自分自身を、生涯にわたって「油断なく」「忠実に」危険に晒された最前哨に立って、攻撃してくる敵を寄せつけない、独立戦士として描いた。不撓不屈の夜間歩哨のことを二度述べること

によつてかれは、自分が「人類解放の勇敢な兵士」として眠ることが許されなかつたことを示唆したが、かれが自分の「ドイツの憂い」のために眠ることができなかつたという（詩『夜の思い』で述べられた）連想をも喚起した。優勢な敵にたいする恐怖にもかかわらず、かれが銃を腕に抱え、ひとりぼっちの孤立したかれの陣地を固守していた一方で、かれの「戦友らの群れ」はなにもすることなく、かれを射殺されるままにした。かれが致命的な銃弾をくらつたとき、だれもかれを救うために急行しなかつた。

かれの詩の最後の節によつて、ハイネは自分自身の墓碑銘を書いた。かれは絶望に陥らなかつた。というのは、自分が無駄に戦つたのでなかつたこと、また悪漢や卑劣漢の勝利は歴史の発展の意味になうことができないことを、かれは確信していたのだから。かれの通告は敗北の破局への宿命論的な降服ではなく、別の戦士らが後に続き、理性と人間性が世代から世代へのリレー競走で結局のところ優位を占めるに違いないという確信であつた。独裁支配の桎梏から人間の解放が、「まだ産まれていない」あれらの孫たちを明るくするために、炬火を受け取る、未来の種族に委託されるのである。空いた持ち場はかれらのために定まつている。

ハイネは最初その詩に『最前哨』Verlorene Schildwachtという

題をつけようとしたが、その後につけたのが次の題である。

(22)

Enfant perdu

政治詩人ハイネ〔新版〕(V)・完 (ヴァルター・グラープ)

自由戦争の最前哨を

三十年間わたしは忠実に守り通した。

勝つという希望もなく、戦つた。

自分が決して元気で帰宅しないことを、わたしは知っていた。

わたしは日夜見張りをつづけた―わたしは眠ることができ

なかつた、

陣営の天幕のなかの戦友の群れのように―

(わずかにうとうととしたとき、

これらの勇士らの高いびきもわたしを眠らせなかつた。)

毎夜しばしばわたしは襲われた

退屈に、また恐怖にも―(恐わがらないのは愚か者だけだ)―

それらを追つ払うために、そんなときわたしは口笛で吹いた

風刺詩の大胆な韻律を。

そうだ、わたしは銃を抱えて油断なく見張りに立った、

あやしい曲者が近づくと、

巧みに狙つて、鑄造したての

熱い弾丸をやつのだとて腹に撃ち込んだ。

時にはそんなことがあるかも知れなかった、
 そんな悪い曲者でも同じようにとても巧く
 射撃できることが—あアわたしは否定できぬ—
 傷口が開く—わたしの血が流れ出る。

持ち場がからだ—！—傷口が開く—
 一兵が倒れると、戦友が後に続く—
 けれどもわたしは倒れても屈しない、そしてわたしの武器は
 毀れはしない—わたしの心臓だけが破れた。

- 注
- (1) B六I卷一三五および次ページ。
 - (2) B六I卷一三四ページ。
 - (3) B六I卷二〇二ページ。
 - (4) B六I卷一八〇ページ。
 - (5) B六I卷三三二二ページ。独文のままの部分は意味未詳、乞御教示。
 - (6) B六I卷三三三二ページ。
 - (7) B六I卷一〇ページ。
 - (8) B六I卷二二二ページ。
 - (9) 参照、R・アングラーデのゲーテの詩の分析。訳は田口義弘氏との他に拠る逐語訳。
 - (10) B六I卷二二〇ページ。
 - (11) B六I卷三三三〇ページ。
 - (12) B四卷四八二ページ。
 - (13) この論証はディーツ・ベリングの論文：シユティグマとしての名

- 前、二五〇—二六〇ページに従う。
- (14) J・カムペ宛一八四六年九月一日付手紙、H三卷八三三ページ。
 - (15) B六I卷三三四ページ。
 - (16) B六I卷一〇六および次ページ。参照、M・ローゼによるその詩の分析、九七一—一〇四ページ。
 - (17) ゲオルク・ヴェールト宛一八五一年一月五日付手紙、H三卷三二五ページ。
 - (18) DHA十一卷一九一ページ。次の引用も同じ。
 - (19) B五卷四七八ページ。
 - (20) B二卷三八二ページ。
 - (21) B一巻三四〇ページ。
 - (22) B六I卷二二〇ページ。『決死の哨兵』

※〔〕内は訳注。「原注」の番号は訳者が打った。
 約束により原著の使用文献を左に掲げさせて頂く。

Ernst Alker: Die deutsche Literatur im 19. Jahrhundert. Stuttgart 1961.

August Andrae: Zu Heines Gedicht »Kobes I.« In: Zeitschrift für den deutschen Unterricht, Jg. 18, Leipzig 1904, 272.

René Anglade: Heines zweifache Kontraktur. Vermächtnis. Versuch einer Interpretation. In: Zeitschrift für deutsche Philologie, Bd. 107, Sonderheft 1988, 161-188.

Ders.: Heines Rheinlied. »Platzgräfin Jutta«, eine Interpretation. In: Jahrbuch des Freien deutschen Hochstifts 1989, 308-344.

- Adolf Bartels*: Heinrich Heine. In: A. B., Geschichte der deutschen Literatur, 2. Bd., Leipzig 1902, 310-327.
- Hans Peter Bayerdörfer*: Fürstentpreis im Jahre 48. Heine und die Tradition der vaterländischen Panegyrik. In: Zeitschrift für deutsche Philologie, Heine-Sonderheft, Bd. 91, Berlin 1972, 197-205.
- Ders.*: »Politische Ballade«. Ze den Historien in Heines »Romanzero«. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Jg. 46, Heft 3, Stuttgart 1972, 435-468.
- Ders.*: Heine, Karl I. In: Walter Hinck (Hrsg.): Geschichte im Gedicht. Texte und Interpretation. Frankfurt 1979, 109-117.
- Eva D. Becker*: Heinrich Heine. Ein Forschungsbericht 1945-1965. In: Der Deutschunterricht. Jg. 18, Stuttgart 1966, Beilage zu Nr. 4, 1-18.
- Warner Bellmann* (Hrsg.): Heinrich Heine. Deutschland. Ein Wintermärchen. Erläuterungen und Dokumente. Stuttgart² 1984.
- Ders.*: Heine und der Pariser »Vorwärts!«. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 22, 1983, 70-82.
- Ders.*: »Der Kaiser von China«. Anmerkungen zu Heines Zeitgedich. In: Wirken des Wort, Jg. 36, Düsseldorf 1986, Heft 2, 81-85.
- Dietz Bering*: Der Name als Stigma. Antisemitismus im deutschen Alltag 1812 bis 1933. Stuttgart 1987.
- Albert Betz*: Ästhetik und Politik. Heinrich Heines Prosa. München 1971.
- Helmuth Bock*: Die ökonomisch-politischen Auffassungen Heinrich Heines in den Briefen an die Augsburger Allgemeine Zeitung von 1840 bis 1843. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, Jg. 5, Heft 4, Berlin/DDR 1957, 826-835.
- Leslie Bodi*: Heine und die Revolution. In: Dichtung, Sprache, Gesellschaft. Akten des 4. Internationalen Germanistenkongresses, Frankfurt 1971.
- Ders.*: Kopfos—Ein Leitmotiv in Heines Werk. In: Internationaler Heine-Kongreß 1972. Referate und Diskussionen. Düsseldorf 1972, 227-244.
- Mechtild Borries*: Ein Angriff auf Heinrich Heine. Kritische Bemerkungen zu Karl Kraus. Stuttgart 1971.
- Georg Brandes*: Die Literatur des 19. Jahrhunderts in ihren Hauptströmungen, Bd. 6, Das junge Deutschland, Leipzig 1891.
- Klaus Briegleb*: Opler Heine? Versuche über Schriftzüge der Revolution. Frankfurt 1986.

- Max Brod*: Heinrich Heine. Amsterdam 1934.
- Eliza Marian Butler*: Heinrich Heine. A biography. London 1956.
- Heinrich Cunow*: Ferdinand Lassalle und Heinrich Heine. In: Die Neue Zeit, Jg. 39, 1921, Bd. 2, 221-229.
- Fritz Eisner*: Echtes, Unrechtes und Zweifelhafes in Heines Werken. In: Heine-Jahrbuch 1, Düsseldorf 1962, 50ff.
- Karl Emmerich*: Heinrich Heines politisches Testament in deutscher Sprache. In: Weimarer Beiträge, Jg. 4, Hef 2, Weimar 1958, 202-213.
- Paul Engelstoft und Iwend Dahl* (Hrsg.): Dansk Biografisk Leksikon, Bd. 9, Kopenhagen 1936.
- Paul Fechter*: Geschichte der deutschen Literatur. 2 Bände. Gütersloh 1954.
- Karlheinz Fingerhut*: Strukturele Interpretation und die Tätigkeit des Rezipienten. Untersuchungen an Heinrich Heines »Sklavenschiff«. In: Diskussion Deutsch, Hef 35, 1977, 281-304.
- Ders.* (Hrsg.): Heinrich Heine, Deutschland-Ein Wintermärchen. Mit ergänzenden Texten zum historischen Verständnis engagierter Poesie im Vormärz. Frankfurt/Berlin/München 1982.
- Georg Forster*: Werke in vier Bänden. Hrsg. von Gerhard Steiner. Frankfurt 1967 bis 1970.
- Gerhard Friesen*: Heine II. In: Heinrich Heine. Dimensionen seines Wirkens. Ein internationales Heine-Symposium, hrsg. von Raymond Immerwahr und Hanna Spencer, Bonn 1979, 96-113.
- Wolfgang Iwkuwald*: Der König als Dichter. Zu Absicht und Wirkung der Gedichte Ludwigs des Ersten, Königs von Bayern. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Bd. 50, 1976, 127-156.
- Bernd Fillmer*: Heinrich Heine in deutschen Literaturgeschichten. Eine Rezeptionsanalyse. Frankfurt und Bern 1982.
- Eberhard Galley*: Heinrich Heine. Stuttgart 1971.
- Geschichte der Frankfurter Zeitung. Volksausgabe. Frankfurt 1911.
- Wilhelm Gössmann* (Hrsg.): Geständnisse. Heine im Bewußtsein heutiger Autoren. Disseldorf 1972.
- Ders. und Manfred Windfuhr* (Hrsg.): Heinrich Heine im Spannungsfeld von Literatur und Wissenschaft. Symposium anlässlich der Benennung der Universität Ditseldorf nach Heinrich Heine, Disseldorf 1990.
- Walter Grab*: Saul Ascher, ein jüdisch-deutscher Spätaufklärer zwischen Revolution und Restauration. In: Jahrbuch des Instituts

für deutscher Geschichte, Jg. 6, Tel Aviv 1977, 131-179.

Ders.: Heine als politischer Dichter. In: W. G., Radikale Lebensläufe. Von der bürgerlichen zur proletarischen Emanzipationsbewegung, Berlin 1980, 125 bis 157.

Ders. und *Uwe Friesele*: Noch ist Deutschland nicht verloren. Unterdrückte Lyrik von der Französischen Revolution bis zur Reichsgründung. Texte und Analysen, ³Berlin 1980.

Ders.: Georg Büchner und die Revolution von 1848. Der Büchner-Essay von Wilhelm Schulz aus dem Jahr 1851. Frankfurt 1985.

Ders.: Ein Volk muß seine Freiheit selbst erobern. Zur Geschichte der deutschen Jakobiner. Frankfurt 1984

Ders.: Dr. Wilhelm Schulz aus Darmstadt, Weggefährte von Georg Büchner und Inspirator von Karl Marx, Frankfurt 1987.

Jacques Grandjonn: »Vorwärts!« 1844. Marx und die deutschen Kommunisten in Paris. Beitrag zur Entstehung des Marxismus. Bonn-Bad Godesberg 1974.

Almuth Grésillon: Wege und Irrwege. Zu Heines Gedicht »Lebensfahrt«. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik, Jg. 17, 1987, Heft 68, 84-103.

Walter Gruppe: Heines »Schlesische Weber« auf einen Berliner

Flugblatt. In: Der Deutschunterricht, Jg. 9, Stuttgart 1956, 426-428.

Jürgen Habermas: Heinrich Heine und die Rolle des Intellektuellen in Deutschland. In: J. H., Eine Art Schadensabwicklung, Frankfurt 1987, 25-54.

Karl Heinz Hahn: Die Wanderratten. In: Aus der Werkstatt deutscher Dichter (Goethe, Schiller, Heine). Halle 1963, 57-70.

Louis L. Hammerich: Heinrich Heine als politischer Dichter. In: Heinrich Heine, Wege der Forschung, Bd. 39, Darmstadt 1975, 82-95.

Wolfgang Harich: Heinrich Heine und das Schulgeheimnis der deutschen Philosophie. In: Sinn und Form, Jg. 8, Heft 1, Berlin 1956, 27-59.

Peter Hasubek: Heinrich Heines Zeitgedichte. In: Zeitschrift für deutsche Philologie, Heine-Sonderheft, Bd. 91, Berlin 1972, 23-40.

Georg Wilhelm Friedrich Hegel: Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. In: Theorie. Werkausgabe in 20 Bänden. Bd. 12, Frankfurt 1970.

Ders.: Recht, Staat, Geschichte. Eine Auswahl aus seinen Werken. Hrsg. von Friedrich Bülow. Stuttgart ⁶1964.

Heine-Bibliographie, hrsg. von Gottfried Wilhelm unter Mitarbeit von Eberhard Galley, Bd. 1: Primärliteratur 1817-1953, Bd. 2: Sekundärliteratur 1822 bis 1953, Weimar 1960.

Heine-Bibliographie 1954-1964, hrsg. von Siegfried Seifert. Weimar 1966.

Wolfgang Heise: Heine und Hegel. In: Weimarer Beiträge, Jg. 12, Weimar 1973.

Jost Hermand: Der deutsche Vormärz. Texte und Dokumente. Stuttgart 1967.

Ders.: Streitobjekt Heine. Ein Forschungsbericht 1945-1975. Frankfurt 1975.

Ders.: Der frühe Heine, Ein Kommentar zu den Reisebildern. München 1976.

Ders.: Heines »Wintermärchen«. Zum Topos der »deutschen Misere«. In: Diskussion Deutsch, Jg. 8, Heft 35, 1977, 234-249.

Ders.: Mehr als ein Liberaler. Über Heinrich Heine. Frankfurt/M. 1991.

Friedrich Hirth (Hrsg.): Heinrich Heine, Deutschland ein Wintermärchen. Faksimile nach der Handschrift des Dichters. Mit einem Nachwort von F. Hirth. Berlin 1915.

Ders.: Heinrich Heine. Bausteine zu einer Biographie. Mainz 1950.

Gerhard Hahn: Heine Handbuch. Zeit, Person, Werk. Stuttgart 1987.

Ders. (Hrsg.): Heinrich Heine. Ästhetisch-politische Profile. Frankfurt/M. 1991.

Paul Holzhausen: Heinrich Heine und Napoleon I. Frankfurt 1903.

Laura Hofrichter: Heine. Biographie seiner Dichtung. Göttingen 1966.

Richard Gary Hootom: Heinrich Heine und der Vormärz. Meisenheim am Glan 1979.

Rolf Hosfeld: Die Welt als Füllhorn: Heine. Das neunzehnte Jahrhundert zwischen Romantik und Moderne. Berlin 1984.

Ders. (Hrsg.): Heinrich Heine und das neunzehnte Jahrhundert: Signaturen. Neue Beiträge zur Forschung (Argument-Sonderband 124) Berlin 1986.

Heinz Hubert Huben (Hrsg.): Gespräche mit Heine. Frankfurt 1926.

Ders.: Jungdeutscher Sturm und Drang. Ergebnisse und Studien. Leipzig 1911.

Georg Iggers: Heine and the Saint-Simonians. A Re-Examination. In: Comparative Literature, Vol. 10, Nr. 4, Eugene/Oregon 1958, 289-308.

Gustav Karpeles: Heinrich Heine und seine Zeitgenossen. Berlin 1888.

Ders.: Allgemeine Geschichte der Literatur von ihren Anfängen bis auf die Gegenwart. 2 Bde. Berlin 1891.

Hans Kaufmann: Politisches Gedicht und klassische Dichtung. Heinrich Heine, Deutschland ein Wintermärchen. Berlin/DDR 1959.

Ders.: Heinrich Heine. Geistige Entwicklung und künstlerisches Werk. Berlin und Weimar 1967

Ders.: Zur Entwicklung der Weltanschauung Heinrich Heines 1840 bis 1844. In: Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität Berlin, 1956/57.

Ders.: Heines Schönheitsbegriff und die Revolution von 1848. In: Weimarer Beiträge, Jg. 6, Heft 2, Weimar 1960, 266-277.

Ders.: Gesang aus dem Grab. Heinrich Heines »Im Oktober 1849«. In: Neue deutsche Literatur, Jg. 29, Nr. 5, 1981, 121-131.

Ders.: Heines Weberlied. In: Junge Kunst, Jg. 3, Heft 7, Berlin

1959, 72-77.

Hartmut Kucher: Heinrich Heine und das Judentum. Bonn 1973.

Karl Theodor Kleinbacht (Hrsg.): Heine in Deutschland. Dokumente seiner Rezeption 1834-1956. Tübingen 1976.

Franz Koch: Idee und Wirklichkeit. Deutsche Dichtung zwischen Romantik und Naturalismus. Düsseldorf 1956.

Karl Kraus: Heine und die Folgen. In: K. K.: Untergang der Welt durch schwarze Magie (Werkausgabe, Bd. 8), München 1960, 188-213.

Leo Krentzer: Heine und der Kommunismus. Göttingen 1970.

Edward Krüger: Heine und Hegel. Dichtung, Philosophie und Politik bei Heinrich Heine. Kronberg/Ts. 1977.

Joseph A. Kruse: Heines Hamburger Zeit. Hamburg 1972.

Ders.: Heine in der Bundesrepublik Deutschland 1972-1987. 15 Jahre Heine-Rezeption. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 28, 1989, 13-30.

Horst Kinzel: Lyrik als Herrschaftskritik. Zu drei Gedichten Heinrich Heines. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 12, 1973, 83-98.

Liselotte Kuntz: Heinrich Heine. Dichtung, Wertung und Kritik. Eine Einführung in die Sekundärliteratur. Stony Brook, N. Y. 1976.

Paul Kurz: Künstler, Tribun, Apostel. Heinrich Heines Auffassung vom Beruf des Dichters. München 1967.

Wolfgang Kuttkenbeuler: Heinrich Heine. Theorie und Kritik der Literatur. Stuttgart 1972.

Ders. (Hrsg.): Heinrich Heine. Artistik und Engagement. Stuttgart 1977.

Ferdinand Lassalle: Nachgelassene Briefe und Schriften. Hrsg. von Gustav Mayer. 6 Bände. Berlin 1925.

Cuno Ch. Lehmann: Heinrich Heine, Kämpfer und Dichter. Bern 1957.

Georg Lukacs: Heinrich Heine als nationaler Dichter. In: G. L.: Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts, Berlin 1951, 124-146.

Ders.: Heine und die ideologische Vorbereitung der 48er Revolution. In: Text + Kritik, Heft 18/19, Heinrich Heine, München 3¹⁹⁷⁸, 31-47.

Ludwig Marcuse: Heine. Melancholiker, Streiter in Marx, Epikureer. Zürich 3¹⁹⁷⁰.

Ders.: Die Tragödie des bürgerlichen Revolutionärs. In: Text + Kritik, Heft 18/19, Heinrich Heine, München 3¹⁹⁷⁸, 48-62.

Karl Marx/Friedrich Engels: Werke. 39 Bände und 2 Ergänzungsbände, Berlin 1956-70.

Gustav Mayer: Radikalismus, Sozialismus und bürgerliche Demokratie. Hrsg. von Hans-Ulrich Wehler, Frankfurt 1969.

Hans Mayer: Von Lessing bis Thomas Mann. Wandlungen der bürgerlichen Literatur in Deutschland. Pfullingen 1959.

Ders.: Anmerkung zu einem Gedicht von Heine: Doktrin. In: Sinn und Form, Jg. 3, Heft 4, Berlin/DDR 1951, 177-184.

Franz Mehring: Biographische Einleitung zu Heines Werken in zehn Bänden, in: F. M.: Aufsätze zur deutschen Literatur von Klopstock bis Weerth (Gesammelte Schriften, Bd. 10) Berlin/DDR 1961, 422-464.

Ders.: Zu Heines Gedächtnis, in: ebd., 484-488.

Fritz Mende: Heinrich Heine. Chronik seines Lebens und Werkes. Berlin/DDR 2¹⁹⁸¹.

Ders.: Heinrich Heine. Studien zu seinem Leben und Werk. Berlin/DDR 1983.

Ders.: Heinrich Heines antijakobinisches Demokratieverständnis. In: Weimarer Beiträge, Jg. 29, 1983, 115-135.

Ders.: Heine und Venedey. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 25, 1986, 61-94.

Ders.: »Ein begeisterter und aufrichtiger Verteidiger der Menschenrechte«. Zu Heines früherer Rezeption in Frankreich. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 27, 1988, 113 bis 141.

Ders.: Heine und das historische Lehrbeispiel eines Bürgerkönigs. In: Weimarer Beiträge, Jg. 30, 1984, 357-380.

Ders.: Kobes I. Zu Heines Satire im Venedey-Streit. In: Zeitschrift für deutsche Philologie, Bd. 107, Berlin 1988, 189-204.

W. Th. Meyer: Heinrich Heine als Politiker. In: Die Neue Zeit, Jg. 21, Nr. 21, Bd. 1, 1903.

P. M. Mitchell: A History of Danish Literature. Copenhagen 1957.

Irngard Moller: Historische Bezüge in Heines »Zeitgedichten«. Ein Beitrag zum Problem der Kommentierung. In: Walter Dietze und Peter Goldammer: Impulse. Berlin und Weimar 1978, 237-259.

Heinz Monz: Marx und Heine verwandt? In: Jahrbuch des Instituts für deutsche Geschichte, Bd. 2, Tel Aviv 1973, 199-207.

Bodo Morawe: List und Gegenlist. Heinrich Heine als politischer Schriftsteller. In: Euphorion, Bd. 82, Heft 3, Heidelberg 1988, 281-315.

Joachim Müller: Heines Weg als lyrischer Dichter. In: J. M., Wirklichkeit und Klassik, Berlin/DDR 1955.

Walter Muschg: Tragische Literaturgeschichte, Bern 1983.

Shlomo Na'aman: Lassalle. Eine politische Biographie. Hannover 1970.

Ders.: Heinrich Heine als zentrales Problem einer Lassalle-Biographie. In: Heine-Jahrbuch, Bd. 7, Hamburg 1968.

Ders.: Heine und Lassalle. Ihre Beziehungen im Zeichen der Dämonie des Geldes. In: Archiv für Sozialgeschichte, Bd. 4, Hannover 1964, 45-86.

Josef Nadler: Literaturgeschichte der deutschen Stämme und Landschaften, 4 Bände. Regensburg 1912-1928.

Dolf Oehler: Heines Genauigkeit. Und zwei komplementäre Stereotypen über das Wesen der proletarischen Massen. In: Diskussion Deutsch. Jg. 8, Heft 35, 1977, 250-270.

Ders.: Letzte Worte—Die Lektion aus der Matratzengruft. In: D. O., Ein Hüllensturz der alten Welt, Frankfurt 1988, 239-267.

Karl Obermann: Die ungarische Revolution von 1848/49 und die demokratische Bewegung in Deutschland. Budapest 1971.

Ders.: Heinrich Heine und seine Rolle in der deutschen Geschichte der dreißiger und vierziger Jahre des 19. Jahrhunderts. In: Heinrich Heine und die Zeitgenossen. Geschichtliche und liter-

arische Befunde, Berlin und Weimar 1979, 7-36.

Günther Oesterle: Integration und Konflikt. Die Dichtung Heinrich Heines im Kontext oppositioneller Literatur der Restaurations-
epoche. Stuttgart 1972.

Ders. und Ingrid Oesterle: Der literarische Bürgerkrieg. Gutzkow, Heine, Börne wider Menzel. Polemik nach der Kunstperiode und in der Restauration. In: G. Mattenklott/K. R. Scherpe (Hrsg.): Demokratisch-revolutionäre Literatur in Deutschland, Vormärz, Kronberg/Ts. 1975, 151-185.

Hermann Oncken: Lassalle, Eine politische Biographie. Stuttgart 1923.

Alfred Opitz: »Adler« und »Ratte«. Schriftstellerisches Selbstverständnis und politisches Bewußtsein in der Termetaphorik Heines. In: Heine-Jahrbuch Jg. 20, Hamburg 1981, 22-54.

Paul Peters: Heinrich Heine »Dichterjude«. Die Geschichte einer Schmähung. Frankfurt/M. 1990.

Christian Petzet: Die Blütereit der deutschen politischen Lyrik von 1840-1850. München 1903.

Ernst-Ulrich Pinkert: Georg Büchner und Heinrich Heine. Aalborg 1989.

Fritz Pohle: Das mexikanische Exil. Ein Beitrag zur Geschichte der politisch-kulturellen Emigration aus Deutschland 1937-1946. Stuttgart 1986.

Henni Poschwamm: Heine und Büchner. Zwei Strategien revolutionär-demokratischer Literatur um 1835. In: Heinrich Heine und die Zeitgenossen, Berlin und Weimar 1979, 203-228
Siebert Salmon Praver: Heine. The tragic satirist. A study of the later poetry 1827-1856. Cambridge 1961.

Ders.: Heine's Jewish Comedy. A study of his Portraits of Jews and Judaism. Oxford 1983.

Wolfgang Preisendanz: Heine, Saint-Simonismus und Kunstautonomie. In: Art social und art industriel. Funktionen der Kunst im Zeitalter des Industrialismus. München 1987, 153-169.

Gerard Ras: Börne und Heine als politische Schriftsteller. Göttingen 1927.

Nigel Reanes: Heinrich Heine. Poetry and politics. Oxford 1974.

Paul Reimann: Hauptströmungen der deutschen Literatur 1750-1848. Beiträge zu ihrer Geschichte und Kritik. Berlin/DDR 1956.

Hans Heinrich Reuter: Heines politische Lyrik. Entwicklung, Haupttendenzen, Grundzüge. In: Der Deutschunterricht. Jg. 10,

Heft 6, 309-326 und Heft 7, 371-378, Stuttgart 1957.

Inge Ribbmann: Heines Denkschrift über Börne. Ein Doppelporträt. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 12, Hamburg 1973.

Margaret A. Rose: Die Parodie: Eine Funktion der biblischen Sprache in Heines Lyrik. Meisenheim am Glan 1976.

William Rose: Heinrich Heine. Two studies of his thought and feeling. Oxford 1956.

Ludwig Rosenthal: Heinrich Heine als Jude. Frankfurt und Berlin 1973.

Alain Ruiz: Heinrich Heines »arme Vorgänger«. Zur Tradition der deutschen Freiheitsspieler und politischen Emigranten in Frankreich seit 1789. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 26, Hamburg 1987, 92-115.

Jeffrey Sammons: Heine, the elusive poet. Yale University Press 1969.

Ders.: Heinrich Heine. A modern biography. Princeton 1979.

Heinrich Scheel (Hrsg.): Die Mainzer Republik II. Protokolle des Rheinischdeutschen Nationalkonvents und Quellen zu seiner Vorgeschichte, Berlin/DDR 1981.

Wingolf Scherer: Heinrich Heine und der Saint-Simonismus. Diss. Bonn 1950.

Schleswigisches Journal (Hrsg. August V. Hennings), Altona 1793.

Ferdinand Schlingensiefen: Heinrich Heine als Theologe. München 1981.

Gerhard Schmitz: Über die ökonomischen Anschauungen in Heines Werken. Weimar 1960.

Hans Joachim Schoeps: Ein unbekannter Agentenbericht über Heinrich Heine. In: Heine-Jahrbuch, Jg. 6, Hamburg 1967, 67-80.

Ulrich Schulte-Wilwer: Die literarische Verarbeitung des griechischen Freiheitskampfes. Harro Harring als Theaterdichter 1822-1828. In: Mitteilungen der Harro-Harring-Gesellschaft, Heft 4/5, Husum 1985/86, 5-40.

Siegfried Seifert: Der unbewältigte Heine. In: Neue Deutsche Literatur, Jg. 13, Heft 1, Berlin/DDR 1965, 172-179.

Hanna Spencer: Heinrich Heines »Karl I.« In: Germanisch-romanische Monatsschrift, Jg. 2, 1972, 377-389.

Dies.: Dichter, Denker, Journalist. Studien zum Werk Heinrich Heines. Frankfurt 1967.

Gerhard Steiner: Georg Forster. Stuttgart 1977.

Josef Peter Stern: History and Prophecy, Heinrich Heine. In: J. P. S., Re-Interpretations, London 1964, 208-238.

- Dolf Sternberger*: Heinrich Heine und die Abschaffung der Sünde. Hamburg 1972.
- Gerhard Storz*: Heines lyrische Dichtung. Stuttgart 1971
- Adolf Strodtmann*: Heinrich Heines Leben und Werk. Berlin 1874.
- Werner Subge*: Saint-Simonismus und Junges Deutschland. Das Saint-Simonistische System in der deutschen Literatur in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Berlin 1935.
- Giorgio Tonelli*: Heinrich Heines politische Philosophie (1830-1845). (Studien und Materialien zur Geschichte der Philosophie, Bd. 9). Hildesheim und New York 1975.
- Heinrich von Treitschke*: Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert. 5 Bände, Leipzig 1879-1894.
- György M. Vajda*: Heine und Petöfi. In: Heinrich Heine, streitbarer Humanist und volksverbundener Dichter. Internationale wissenschaftliche Konferenz, Weimar 1972, 425-433.
- Hermann Venedey*: Jakob Venedey. Darstellung seines Lebens. Phil. Diss. Stockach 1930.
- Walter Wadeuhl*: Heine-Studien (Beiträge zur deutschen Klassik, Abhandlungen, Bd. 4). Weimar 1956.
- Ders.*: Heinrich Heine. Sein Leben und seine Werke. Köln und Wien 1974.
- Johannes Weber*: Libertin und Charakter. Heinrich Heine und Ludwig Börne im Werturteil deutscher Literaturgeschichtsschreibung 1840-1918. Heidelberg 1984.
- Werner Weber*: Die Grenadiere, In: Wege zum Gedicht. Interpretationen von Balladen. München und Wien 1968, 267-269.
- Erhard Weidl*: Heines Arbeitsweise. Kreativität der Veränderung. Hamburg 1974.
- Hermann Wendel*: Heinrich Heine. Ein Lebens- und Zeitbild. Berlin 1926.
- Hans-Georg Werner*: Heine. Seine weltanschauliche Entwicklung und sein Deutschlandbild. Bukarest 1958.
- Ders.*: Geschichte des politischen Gedichts in Deutschland 1815-1840. Berlin²1972.
- Ders.*: Zur Wirkung von Heines literarischem Werk. In: Weimarer Beiträge, Jg. 19, Heft 9, Weimar 1973, 35-73.
- Michael Werner*: Genius und Geldsack. Zum Problem des Schriftstellerberufs bei Heinrich Heine. Hamburg 1978.
- Ders.*: Heine und die französische Frühsozialisten. In: Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur, Bd.

7, Tübingen 1982, 88-108.

Ders. und *Eva Werner*: Zur Praxis der Handschrifteninterpretation am Beispiel von Heines »Karl I.« und »An die Jungen«. In: Cahier Heine, Paris 1975, 87 bis 115, wiederabgedruckt in: Heinrich Heine und die Zeitgenossen, Berlin und Weimar 1979, 78-105.

Ders.: Heinrich Heine—über die Interdependenz von jüdischer, deutscher und europäischer Identität in seinem Werk. In: Walter Grab und Julius Schoeps (Hrsg.): Juden im Vormärz und in der Revolution von 1848 (Beihft 5 des Jahrbuchs des Instituts für deutsche Geschichte). Stuttgart-Bonn 1983, 9-28.

Ders.: Politische Lazarus-Rede. Heines Gedicht »Im Oktober 1849«. In: Günter Häntzschel (Hrsg.): Gedichte und Interpretationen. Vom Biedermeier zum bürgerlichen Realismus, Stuttgart 1983, 286-299.

Ders.: Noch einmal: Heines » Wanderratten«. Zur Interpretation

einer Handschrift. In: Edition und Interpretation. Jahrbuch für Internationale Germanistik, Reihe A Bd. 11, 286-301.

Manfred Windfuhr: Heinrich Heine. Revolution und Reflexion. Stuttgart 1969.

Ders.: Zum Verhältnis von Dichtung und Politik bei Heine. In: Heine-Jahrbuch 24, Hamburg 1985, 103-122.

Stefan Winkler: Zur Geschichte der Trypanosomiasen. Die Nagana der Pferde und Rinder sowie die Schlafkrankheit der Menschen. In: Hamburger Arztblatt 42, 1988, 312-323.

Carl Wittke: Against the Current. The life of Carl Heinzen (1809-1880). Chicago 1945.

Susanne Zantop: Lateinamerika in Heine, Heine in Lateinamerika: »...das gesamte Kannibalencharivari...«. In: Heine-Jahrbuch Jg. 28, 1989, 72-87.